

明治三十一年二月十日發行

# 北辰會雜誌

(非賣品)

第拾八號

第四高等學

校北辰會



北辰會雜誌第拾八號目次

文苑

今様新体詩

此麗山人

和歌 五首

俳句 十六句

復孫齋人書

教授 村上函峯

種櫻記

垂東仙史

筆筒銘

石田黒子軒

詩卅首

批評

本誌第十七號概見

紫 溟 郎

雜報

新年辭。雪景色。運動會記事。柔。劍。紅白勝負概況。演說會概況。送川上校長其數件

論說

獨逸語練習法に就いて

教授 矢板 寛

史傳

ラフワキット

潮 來

雜錄

生物の年齢

教授 市村 塘

白山の家苞

皓 嶽 坊

讀書餘話

教授 浦井 恒 堂

滄浪陳言

河 滄 浪

北辰會雜誌第拾八號

論 說

獨逸語の自修法に就て

矢板 寛

獨逸語の研究ハ今後益必要を増加するの傾向あり是れ醫學法學哲學等を攻究する輩不取テて殊ハ然りと蓋此等の諸學に關する外國文の教科書又と參考書の中に就て讀者の便益を與ふるものは獨逸語を以て著トシるもの其最も多き小居るか故かり獨逸語研究の必要斯の如きとすれば吾輩從來の經驗に基き其研究法に就て所見を述べ初學者の參考ヲ資するも亦無益の業に非るを信ず元來獨逸語研究の目的ハ特殊の必要を除きて容易に逸獨文を理會して各自欲する所の智識を得るハ在り其攻習の初めに於て書取會話等を習ひ時々暗誦を行ふハ練習乃手段として目的にあらざる吾輩は上記目的の範圍内に於て獨逸研究法に關し少く述ぶる所あふんとす凡そ語學熟達の遲速ハ教授法の良否に依るよきも寧ろ自動的研究法の良否ヲ據るもの多し教授法良かりと雖ども自動的研究法然らざれば恐く成熟を期去難かるべし之ハ反シ自動的研究法にして宜きを得ば仮令教授法及ばざる所あるも其熟達の効を奏すること速かなるべし是れ語學研究には殊に自動的研究の必要ある所以にして吾輩の述べんと欲する所も亦茲に在り自動的語學研究の第一方法は多讀とるに在ること言を俟たず然きども漫に多讀するのみにてハ研

究此目的を達すること難かるべし初學者に在りてと先づ獨逸文字の形象語綴發音等に注意すべきハ勿論能く詞の種類及其關係等に注意し冠詞あらば其冠詞と何れの名詞に屬するものなるや又前置詞あれば何れの詞に係る前置詞なるや又形容詞あれば何れの詞に係るものあるや凡そ此等關係に常は注意して書を誦に際し必ず其所關の名詞と一呼吸の間に之を誦し前置詞形容詞も亦必ず斯の如くするを要す其他殊に句讀に注意して發音の斷續呼吸の轉換を明にするを要す斯の如くにして容易は其關係を發見し呼吸を轉變し得ることに慣るべきと後に所關れ文章の意義を了解するに於て大に益する所あるべし

發音を正しく句讀を明に兼て又詞の關係を了得する方法は一に各自研究者の注意と練習とに依るべしと勿論ありと雖ども又同志者兩三名相集りて時々會讀を行給が如きの練習の一良法なり會讀を行ふて互に欠點を指摘し正鵠を得ざる者交々代りて誦を續け依りて以て互に注意を喚起するに於てハ知らず識らず其間に熟得するに至るべし此の如き方法と吾輩幼時漢書の素讀を行ひたることと於て屢々其効驗あるを見たり

意識ある多讀の効の當り上記の事柄に止らず斯の如くにして獨逸文字を讀むことに慣ると此は同一の文字屢發現し來るべきが故に一旦其意義を解するときハ容易に其文字と意義とを記憶することを得べし蓋し記憶の働は先に一たび把住して後に之を復現するに在り故に知覺を屢々すると此ハ容易に把住するを得從て時を経て忘却することなれに至るべし又屢々口に發音して之を耳に反響するときハ目に獨逸文字を慣らすの効あるのみならず又自から發音の緩急巧拙を了得すべき

が故に初學者の力めて屢々發音を試むべし仮令誤謬あり困難なりとも毫も頓着せず之を屢々するときハ不知不識れ間に練習を得べし又友人間の談話に於て會得したる獨逸語を使用せるも練習の一手段たるべし

自助的研究の第二方法ハ成るべく早く字典の使用に慣ること是れなり此點に於て英語の素養ある者と便宜尠かざるべし然れども英語の素養ある者に取り殊に注意を要するは獨英字典を使用せずして常に獨和字典若くは原字典を使用すべきこと是れなり英語の素養ある者の常として獨逸語を攻習するは方と獨英對照字典を使用する者多し是れ便宜上然かもしむる所なりと雖ども而も獨逸語研究の目的を達する上に於ては却て進歩を妨ぐるものあり蓋し文字は思考の符號なるが故に成べく中間物を避けて直接に其文字の包含する思考に近接せんことを要す然るも便宜ありとし英語を媒介として獨逸語を解釋するときハ文字ハ思考の符號あるの結果其解せんとする獨逸語の眼中に止らずして英語のみ腦底に止り從て獨逸語の知覺は頗る薄弱あるの感あり此事たる仮令獨和字典を使用するも多少免れ難き所なりと雖ども而も獨英字典を使用するに比すれば進歩の早きこと余輩曾て英語を攻習するに方り實際に經驗しざることをあり以上の理由に依り又獨逸語を攻究するに方りては成べく英語を口に出さず筆を擧る念頭置かざるを要す故に獨英字典は只獨和字典又ハ原字典に於て發見し得ざるか若くは適當の解釋を得難き場合於て單に補助として使用するに止るべく獨和字典又ハ原字典に依賴することを要す其他又原字典に依ると此は原語の意義を正確に解し得ざるはなからず兼て又獨逸文法の一斑を窺ひ得る便宜あり然れども其事たる多くハ術

に屬し言明し難い所あるが故に研究者ハ先進者に就て親しく之を習ふべし。字典の使用は又文法に攻究と相待つことを要するは言を要せず蓋し文法の語學の原則と示すものがあるが故に之を通せざれば文の理は暗く従て又章句の意義を明亮あすること難くるべし。獨逸語の文法を攻究するは當り最も緊要にして且困難あるものは代名詞前置詞及動詞の作用及其變化なり心を潜めて二さび此等の作用及變化に通ずるとは獨逸文の理は炳々たることを得べし。文法を了得せるの良方法は成るべく解し易き原文の文典を撰擇し術語及實例の原語の儘に之を存し一巻を通じて其大意を翻譯するに若くものち此方法も亦吾輩曾て之を實際に試み頗る効驗多かりしを覺えたり一たび文法の大体に通ずるとは字典を補助とし各自欲する所の書を涉獵することを得べし。

少しく獨逸語に慣るときは字典に使用を忽に斷を以て譯解せんとするの傾きを生ずることあり是れ進歩の一徴なるは相違なしと雖ども而も亦頗る緊要の時機なるが故に二層注意して字典の使用を巧に用ひ所用の場合に方りて譯語の搜索適切あることを力むべし。斯の如くおして字典の使用に熟達し他は學科の進歩も亦之に伴ぬときは自ら適切の譯語を創造し得るに至るのみならず又能く紙背を透して獨逸文の妙味を咀嚼し得るに至るべし。最後に自動的研究法と翻譯とす翻譯の要は原文の意義を咀嚼し國語を以て平易に其意を寫すに在り單に文字を代ふるの義にあらず故に原文を翻譯するに方りては先づ適切なる譯語を搜索し次に原文の包含する意義の概念を作り最後に主文副文の關係并に時の變化等を明かし然る後筆を採り

國語を以て其意義を寫し更し原文と譯文とを反覆對照玩味して文字の適否文意の通否を考へ修正すべし。又翻譯に熟達する方法として之を屢々するを要するに勿論ありと雖ども翻譯を爲さんとするに方り先づ其大意を他人に話し能く了解するや否やを試むるを可とす然るときは讀話の際大に發見する所あるべきのミならず獨逸文の解釋力を養ふ最良の方法となるべし。其他研究の材料は成べく各自將來專攻せんとする學科に近きものを選択し且各自に讀書力に相應しうるものを探用すべし。徒に高尚の書に就くか若くは關係遠き書を読むが如きは毫も利益あるを見ざるなり。余、語學の専門者に非ずと雖ども少く經驗に徴し所見を述べ一に初學者の参考を資し兼て専門家の教を待つ。

## 史 傳

ラファエレット

(承前)

潮 來

ラ氏は、はオートヴェルヌ州に貴族と撰ばれて、三民議會の議席を占たり、議會已に開くるや、三民の軋轢益々甚しく、貴族僧侶は、王權を保護して平民を壓ふ、己が特權を維持せんと欲し、平民は貴族僧侶の特權を破り兼て王權を翳せんと欲し、互に鎬を削ぎて争ひしが、平民黨の勢力盛にして、貴族僧侶は、漸く意を屈して來り附く者多く、國王も亦大に讓る處あり、六月十七日に至り、三民議會は自ら國民憲法議會と改稱する旨宣言しければ、大權漸く王室を去りて、人民に歸するの傾

を生じて、ラ氏等の率ゆる平民黨は、存亡に勝を制しければ、七月十二日の議會に於て、ラ氏ハ自ら進みて「デクララシヨシ、デ、ドロ權利の宣言」は議案を提せし此れ實に後革命黨の宣言の骨子とせざるものあり、越十三日に至り、ラ氏等が、大臣責任の實を擧げしめんとを發議するに及びて、政府と人民との反目愈々激しく、老巧のネツケルも亦事に任へずして、其職を去り、剩さへ國王ハ兵を指使して、將に巴里府民に利あらざらんとするの風評さへ起りければ、十四日に至り、市民蜂起して群集喧囂遂まばスチル獄を破壊し、千歳未聞の慘劇たる佛國大命は形り、現然として是に成り、其餘將に延いて、難を王家に及ぼさんとせり、ラ氏は固より自由を愛し、自由の爲めハ、一身を犠牲に供ふ、終始節を守りて愉らずと雖も俄に王家を倒し、之ハ代ふるに純然たる民主政を以てするを冀みず、唯自由の制度にして、確立すれば王家の存否ハ、敢て之を意に介せざるを故に今市民ハ將ハ難を王家に加愈んとするに臨み、氏ハ六十人の議員を従へ、自ら出で、市民に向ひ、其勇を奮て自由を獲得せしを祝し、一方には又國王は善人にして一時小人の爲に聽を蔽はれたる旨を諭し以て其の囂々制せり、蓋し上下の怨嗟は正に滿漲の水となり、一たび決すれば氾濫して止む所を知らず、市民の激昂ハ殆ど絶頂に達したる時なれば、ラ、ファエットの名望隆々たるは非ずんば決して之を鎮制する能とざりしかり、市民は又十三日より相集りて、一大團を組成し仰ぎて首領と戴く可き者を求めるに、十五日に朝に至り、モローハ起ちて、巴里會館の大廣間なるラ氏の塑像を指示しければ、萬口一致氏を戴きて將と仰ぐに決せり(此塑像と合衆國ヴィルヂニア州より紀念として巴里市民に贈りたるものなり)巴里の一府は、全佛國の死命を制するの力ありけるに、是に至りラ氏と市民に推

戴せられて其地位益牢固とされり、此の團體は後ラ氏の編制訓練により、國民軍と(Garantional)なるものなり、廿四日に至り、ラ氏の革命黨の採用せる巴里市の二旗色に佛國古代の旗色を合して一となし三色旗を作り以て、全國一致の意を示し、衆人謂て曰く「此の旗章を以て世界を一周す可し」(The ecorde ferale fundumonde)蓋し此の語り、自由主義は海内に普布す可き意を示すものなれども、亦以て氏が王家を其儘に存立せしむるの意ありしを想見す可し、ラ、ファエットは衆望を一身に擔ひ北辰乃衆星を望むが如き、有様なりければ、己れ一人の力を以て何事と雖も、成りて成らざるはあしと信じ、獨力を以て、猛く狂ふ人心を制抑するに尽力せしも、人心の熱度の沸騰点に達する頃なれば命令は毫も行ゆる可くもあらずベルチエ、フーロン、の二人が目前に殺害せられしを見るよ及びて氏も亦其れ勢力の及ぶ能はざるを感じ、ダントン、ロベスピエールの如き、粗暴過激の徒日々に勢を得て、其の所爲の殘忍なるを見、大に厭忌れ念を生じ遂に自ら引退せんと欲せしも人々其の請を容れざりし」

騒亂の世の習ひとして、上下は意志互に隔絶して通ぜず猜忌に猜忌を重ねるを常としければ、其の上下の疑團ハ終に結びて、十月五日及び六日の變を成せし、五日の事なりけん、ラ、ファエットの亂民の鎮制に尽力せし餘り、体倦し神疲れ少憩せんとて隣近き頃寢に就きしに耳邊に忽然として警報を齎らすものあり亂民已に宮城に入り王室殆ど危しと傳ふ、則ち蹶起して國民軍の兵士を指揮して城門を守り、突、自ら入りて、狀を見しハ王后以下滿廷の人、皆震慄して、國王の室に集へり、城下を瞰るに幾萬の賤民は、三方より喧擾して警衛を破り亂入せんとし、ラ氏則ち女后の手を取り之を

接吻し一人の親兵を呼びて彼の三色旗を與へたり、群民之を望見し乍ち「將軍萬歲、女后萬歲、親兵萬歲」と連呼せり、ラ氏れ世に重望を負へると斯の如し、既にして國王が巴里を去ると聞き、人心漸く鎮まりければ、ラ氏之國王を護してチュイルリー宮に赴けり、滿廷の人漸く愁眉を聞き、互に握手して萬死を脱したるを賀せり、アテライド夫人の如きは荐りふラ氏に向ひ謝して曰く「將軍、貴下は吾人の命を救ひ玉へり、深謝す」

ラ、フアエツトは國民軍の將とあまてよと、日夜其職務に執掌せし爲め、憲法議會の事業に就きては、大に力を致す能とざりしも、被告を保護する爲に倍審制度を設け、華族の名號を廢し、兩議院制を設け、帝王の拒否權を認むる如し、重要な議事に關しては之を熱心論議するに於て、決して人後に落ちざりし、其の宣戰媾和に關する大議題も付ては、ミラボート同じく行政權に委ぬべしとれ説を抱き國法を以て、宗教事業に立ち入るを非として大に反對を試み玄等、着々其意見の公平正大なるを見るに足れり、千七百九十年二月れ會議は於て地方に起りし一揆の處置を議するに當り「舊來の秩序とは、唯下の上に隸屬するを云ぬのみ、此のる場合には、一揆は、人間本務中の尤も純潔なるものあり」と云ひしは實は氏が事に激して發せし語にして其の天然自由を愛するは情は言表に躍然たれども敢て無政府を冀ぬに非ず、合理的の秩序の亦其の希望する處あるを想見す可し」國會已に主權を掌握し革命の舉略は緒を就きたれば佛國人民の一千七百九十年七月十四日を以て渾然たる國民とありし紀念にとて聯合祭(Feathered Federation)と爲すに當りラ、フアエツトの參軍の資格を以て進んで宣誓式を發言せしに幾萬の人衆は皆異口同音に之を和せり、是をラ、フアエ

ツト將軍が名譽絶頂に達せし時とす、爾後過激黨が漸次勢を得るよ及びてラ、フアエツトの名は一時漸く人口を去るに至れるや是非もなれ國王も已に全く威權を失ひ徒ら空位守りて悖因同然の日月をチュイルリー宮に送り快々として樂まず、遂に聯合祭の翌年六月二十一日王后以下を隨扈私に宮を脱してヴァラレスに至り捕はれて巴里に護送せらる、市民は王が外國の援を得て位を恢復せんとするの志あるを察し王の逃走は實にラ、フアエツト之を與り知むるとの嫌疑を起して之を攻撃する者あり、殊にダントンの如きのヂャコピン俱樂部に立ちて叫び曰く、「吾輩は國王の身又ハ將軍の頭を得て甘心せん」

人民の激昂此の如く甚しかざれば若し王が途にして捕はれざんば氏の存亡浮沈も亦知る可らざるものありしなむ、蓋し、ラ氏が、秩序的の革命を庶幾して王家と國民との間を介立を以て苦慮計畫せし所と反り衆て怨の府とあらんとはラ氏が純潔の心より豫想の及ばざる所ありや然、嗚呼ラ、フアエツトの地位も亦悲しむべき哉、國王已に捕獲せられれば、ラ氏の、之が守護の責任を負はせられ、熟く政界の光景を察するよ、一に過激に失志、奔馬の羈勒す可からざる如くなるを患ひ、國王の不幸を憐み、王位ハ王位として、之を存置するも、敢て事に害あふずとなし、遂に一千七百九十一年七月十五日乃國會にて此の意を以てバルナトヴの有名なる辯論を賛成し、越て十七日、人民がマスの野に屯集し、王を迫りて位を退けしむるを議するよ際、赤旗を揮ひて、バイイの行爲を扶け、執拗頑固の徒は兵力を以て之を退却せしめければ、此の一舉に因り、ラ氏ハ、一方よ温和黨は名望を奠ふに至りしも過激黨の爲には又顧みられず、温和黨は世に所謂憲法黨を形成せるもの

にして、ラ、フアエツト之が首領となりダントン、ロベスピエールの徒の率ゆる過激黨と、隱然相反目するに至れり、議會は開設せしより茲に三年憲法已に成り特權を廢し、人民は自由平等を布告し、大赦を行ひ、立憲國の基礎、是に成りけり。國民憲法議會も其の職分を全くし千七百九十一年九月卅日を以て解散せり、是を於て將軍ラ、フアエツトも略ぼ平生の志望を達しければ、其の翌月を以て遂に國民軍の將印を辭し、オー、ヴェルニユある故山の烟水に歸臥せり、歸臥の夢未だ全く圓ならず、一家團樂の情將に濃ならんとするに際し烽警復し到りしかば又起ちて戎軒を事とせざるを得ざるに至れり、惟ふに佛國革命の舊趣と王權と民權との爭奪にして、若し革命黨の爲す所を縦にせば歐洲諸王國に影響を及ぼし遂に其の國基を震撼するの惧あり、是を於て、填普の諸王の袖手して一國の王家が沉淪するを見るに忍びずサクセン州のビルニツク市に相會して攻守同盟の約を結び將に佛國王家の聲援を爲さんとを計れり、過激黨と大に驚き北東南の三軍を組織して之を當り、ラ氏を起して北軍を監せしむ、己にして佛軍諸處に利あふざると多く、且つ諸軍の僚友、ロシヤンポーモ職を辭きて去り、加之あらず、將軍は常より過激黨を爲す所を喜ばず常より巴里の天を願望して、デヤコピン黨の勢力日に加はり國政の日より非なるを慨嘆し、彼の憲法議會に次ぎて起りし契約議會には過激黨の跋扈するを憤り滿腔の熱血澆くは所なく、遂に一千七百九十二年六月十日附を以て、モーブーヂユの營より議會に向ひて、詰問書を發し、以て俱樂部政治の非を鳴らし憲法を準據せる王位は、不羈強固あるべきを主張し、殊にデヤコバン黨を目して亂民と(Factieux)云ふの語ありければ、はラ氏の行爲を以て、クロムウエルは脅迫に比する者あるに至り、討議紛々たり、然るに

デロンド黨は、故に該書を發せし者は、ラ氏あるを信せざるまねし、輕蔑して之を委員會に附せり、ラ氏の之を聞きて大に怒り、蹶起して軍を去り、其月廿二日を以て、獨り其の參謀と共に議會に至り、前書の要領を得ん事を請求せり、時にガーデーの起ちて巧に舌を揮ひ辨を弄き外患未だ去らず國難未だ全く除くを得ざるを國境守備の任務を帯べる將官たるラ、フアエツトが軍を去り、恣に巴里に至れるは、何の爲ぞとて、大に將軍の行爲が脅迫的にして且は越權を宣れるを攻撃しければ、ラ氏の請求は特別委員に附して、直に排斥せられたり、是の時に當り、國王の依て以て、生を托す可きものは、ラ氏一人なるのみなるに、ルイ十六世の不明ある、亦之を冷遇されれば、ラ氏乃ち會て教養せし國民軍の跡々たる者を率ゐて、事を謀らんとせしに、會する者僅に三十人、是に於て、ラ氏の、碌々の徒、共々成すあるに足らざるを悟り、直に鞭を揚げ、去とて北部に軍に歸れり、嗚呼、ラ氏已に去れり、是より憲法黨と其の首領を失ひ、委靡して又振はず、憲法黨の振はざるは、則ち佛國が立憲王國とあらんと欲して能はず、必ず共和政体に變ず可き機會到達せしものあり、幾もかくして、ラ、フアエツトと國王と結托して不遜國家に不利を計るとの嫌疑を以て、ロベスピエール、コルロデルポア等の爲に議會に告發せられたり、二百廿四票に對する四百四十六の多數にて其の彈劾は非決せられたり、時八月八日なり、然れどもラ氏は是を認せし議員は、後多く詬辱を蒙り、ラ、フアエツトの塑像は焚棄せられたり、二年前、ラ氏れ功業の紀念の爲に巴里市に議決せし賞牌は、ダントンの發議により、破棄せられ、ラ氏の名聲全く地に墜ちて、之を僅々三年前聯合祭れ當日を視て、氏の感想如何かりし、想ふに中々に愚かりかし、ラ氏此れ報を接し、大に憤り、更は同志を糾合

て、事を爲さんと欲せしに、皆遲疑きて應ずる者少し、ラ氏益々人心の恃む可からざるを嘆息すると良久し、遂に議會の委員と來て解職乃命を傳へ、猶之を彈劾せんとせければ、ラ、フアエツト則ち勢の已よ去ざるを惜り暫く中立國に依て跡を隠し機を得て成を志さんと欲し八月十九日私軍を脱せり

不幸にして氏ハ途にして填國哨兵の手裏に落ちラドウトル、モトブール、ア、ラネツト、ビユヂー、等同志の士と共にマグドブルグ、グラッス、ナイツス、の諸獄に遞傳幽閉せられ、最後にオルミューツ獄に投ぜられ頗る壞人れ虐遇を受けたり、ラ、フアエツト夫人は、久しく空圍を守り、時又或の無常河邊の骨を深闇の夢裡に現じ、ひたす胸との痛死つゝ、慄しおろて、加へて、過激黨と益々勢力を得、到る處殘暴酷薄を逞く、異論者ヲ逮捕し、温厚の人を幽し、遂に君主の頭を刎ね、囚獄の裡鬼哭啾々として、天人共お其れ秩序なきを嘆ざるの際、夫人も亦獄裏に月を眺むると拾五閱月、漸く身を脱きて、其の二女と共にオルミューツに至り、切に壞人に乞ひて良人に侍し共に艱苦を分つを得たり、夫人は千八百八年を以て世を辭せり、夫人性頗る淳良にして、淑徳あり且忍耐に富み、ラ氏が東西に奔走せる間能く家政を料理して、内顧憂なから去め、政治上は事に於ても良人を助けて大助力あり、夫人逝去より、ラ氏の精神少し々沮喪せしと云ぬ」



雜 錄

○生物學者并に動物の壽命

市 村 塘

噫人生五十年我今廿五年既過其半矣と慨嘆するは東洋人の口癖なるが、西洋人の七十年を以て壽命とせりといふ聞きぬ、されば人間は平均六十年の壽命を保ち得る動物なりと謂ふて不可なからん、勿論稀は百歳を超過する人もある代はりには、十歳未滿にして失命する兒亦中々多し、元來人間の先天的賦與の性能のよにて、決して自活し能はざるの動物なり、他動物の如く食ふと、飲むと、眠ると、子孫を遺すと、丈を知りざりとして、人間といへば、必ずや後天的養成の必要ありて、複雑なる社會に投じ自ら一定の事業を執りて活動し得るに至らしめざるべからざるべし、假に此限界を稱して人間の自活年期といふ、故に該年期に達せずして死亡する者は未だ以て世に出現して人間の義務を完ふざりといふを得ざるなり、尤も社會幾多分業のあるあり、隨て該年期迄に長短かかざらん、これを先づ廿五歳(廿歳乃至卅歳平均)とせば過不及なるべし歟、即ち大凡卅五年間は人間が眞正の人間として社會に活動する駒隙といはべし、豈に悠々輕過とせんや、

予の好奇心、一日予に責むるに既往有名なる生物學者の壽命を以てと、乃ち左の卅四氏を披撰し、其平均年齢を計算せし、殆ば七十三歳餘となれり、予是に於てか人生を六十年となさざりむるには、他の勞働者若くは他は學者社會に早世せる者、多死と證するに足るといふ奇念を起すに至りぬ、



希臘	ヒボクラテース	紀元前四百六十年生 全三百五十七年死	百四歲
希臘	アリストートル	紀元前三百八十四年生 同三百二十二年死	六十三歲
希臘	レヂー	千六百二十六年生 千六百九十七年死	七十二歲
英國	グリニ	千六百二十八年生 千七百〇七年死	八十四歲
英國	リンネー	千七百〇七年生 千七百七十八年死	七十二歲
日本	小野蘭山	千七百二十一年生 千八百〇三年死	八十二歲
蘭國	リウインホック	千六百三十二年生 千七百二十三死	九十二歲
蘭國	ツンベルグ	千七百四十三年生 千八百三十二年死	八十六歲
佛國	キユビエー	千七百六十九年生 千八百三十二年死	六十四歲
瑞國	ドカンドル	千七百七十八年生 千八百四十二年死	六十四歲
日本	飯沼慾齋	千七百八十五年生 千八百六十五年死	八十三歲
獨國	フォンベア	千七百九十二年生 千八百七十六年死	八十五歲
佛國	ドヤルギン	千八百〇一年生 千八百六十年死	六十歲
獨國	シーポルド	千八百〇四年生 千八百八十五年死	八十二歲
英獨	チ、ダーウキン	千八百〇九年生 千八百八十二年死	七十四歲
瑞國	チゲリ	千八百一十七年生 千八百九十二年死	七十五歲
獨國	ドバリー	千八百三十一年生 千八百八十八年死	五十八歲

伊國	マルビギネ	千六百二十四年生 千六百九十四年死	六十七歲
日本	具原益軒	千六百三十四年生 千七百〇四年死	八十五歲
瑞國	ボンチット	千七百九十二年生 千八百三十二年死	七十四歲
英國	エムゲトウキン	千八百〇二年生 千八百三十二年死	七十二歲
獨國	ウォルフ	千七百三十五年生 千七百九十四年死	六十歲
獨國	ブルトメシバツ	千七百五十二年生 千八百〇四年死	八十三歲
佛國	ラマルク	千七百四十四年生 千八百三十九年死	八十六歲
獨國	オケン	千七百七十九年生 千八百五十九年死	七十三歲
英國	フーカー	千七百八十五年生 千八百六十五年死	八十一歲
獨國	ベンサム	千八百〇一年生 千八百八十四年死	八十五歲
獨國	ミユル	千八百〇一年生 千八百五十八年死	五十八歲
瑞國	アガシー	千八百〇三年生 千八百七十二年死	六十七歲
獨國	グレイ	千八百〇八年生 千八百八十八年死	七十九歲
獨國	フ、ミルレル	千八百一十二年生 千八百九十七年死(本年)	七十六歲
獨國	セムペル	千八百三十二年生 千八百九十二年死	六十二歲
獨國	ザックス	千八百三十二年生 千八百九十七年死(本年)	六十六歲
英國	バルフォール	千八百五十二年生 千八百八十二年死	三十二歲

是或ハ既往生物學者全數に比して、纔ク%ハ過ぎざる少數なぐんも、擧て銜々たる學界乃代表者あれば、庶幾クハ其班を窺ふに足らん。

翻て汎く生物界を瞰視し試みに渠等の壽命如何を推考せよ、俯首拱手これを久ふぞと雖も終も確應を得ずして止まんのみ、ばハランカスター氏の謂へりし如く、各動物の壽命程空々漠々確固なざるものなれなり、されどウハイマン的に解釋せば、アメモトの如きは不死の動物(壽命上)と云ふは惹ひて高等の諸動物も、体内の精卵三細胞は子孫に發育するものなれば、是亦不死の動物といはざるべからず、故に茲に所謂壽命なるものは普通の意味に解釋して、個体の生活年間を云ふもれと知るべし、兎ハ角も、壽命を調査するは最も至難の業なれども左に掲ぐるハ蓋し雖も不當不遠の類あふん。

- 家兔.....十歲
- 豚.....廿歲
- 駱駝.....百歲
- 綠州鯨.....四百歲
- 鴉.....百歲餘
- 狗及羊.....十歲乃至十二歲
- 馬.....卅歲
- 象.....二百歲
- 鸚鵡.....百歲
- 鯉.....百五十歲

これを歴史に徴せば、其他種々面白き談柄もあるなぐん、ハシポルドの愛撫せし鸚鵡ハ能く談話しされども人其意を理解し能はざりしと、蓋し既に滅亡は歸したる古印度語なりしによる、以て其長壽命たるを推し得べし、又千四百九十七年ラヂエテア於て捕獲したる一大尖魚ハ長さ十九呎

重さ三百五十磅ありて、次れ文句を刻たる首輪を箆を居たりと、奈ば千三百三十年十月五日、  
 第二世の玉手より始めて此湖水に投入せられざる魚あり、されば、確かに二百六十七歳以  
 上の高齡に達したるものたるや疑ひなき、又鶴と千年龜は萬年とは唯高齡長久の代名詞に過ぎざれ  
 ども、確がある調査によれば、龜は五百歳の壽命を保ち得るもの、如し、千八百二十一年魯西亞  
 首府の動物園に於て死亡したる龜は二百二十歳なりしと、又近來マウリチウス、スより英國博物館  
 へ出品せしもの、重量一噸ありて多分百五十歳以上のものとの鑑定なりしと。

下等動物もまた案外に長壽なるものあり、サー、ジョン、ダルク、エル氏の所有に係り、菟葵帝は、  
 五十年間生活したりと、又アリストートルの言に因れば女蜂は七年間保命し、ラボックの飼育せ  
 らる女蟻は十五年間長らへたりとさきと、多數は短命なるが如し、夫の五月蠅が僅々一日しか存命  
 せざるよりして、西洋の文學者は好で短命者の引例とするところあるが、渠等ハ其幼虫なる蛆の状態  
 へ於て、既に數週間生活し居たりしに氣付かざりし誤認に外ならず、抑も下等動物の多く短命な  
 るは夫々理由のあるを以て、生存競争優勝劣敗の劇烈なる生物界上に立て、防禦の器關を具備  
 せざる此輩いかに安穩に外敵を禽獸魚の鋭眼を避け得べき、不如、迅速に多數の子虫遺存を盡し  
 在ると致々勤め給ふあるが如く見ゆるあり。  
 動物は比し植物は概して長壽あり、且は高等顯花植物にありては横斷さるる決行すれば、殆ほ其年  
 齡を計算し得るを以て、稍確實ある成績を得るなり、今左に其二三の例を掲ぐ。

常春藤……………四百五十歳  
 扣鈕樹……………七百五十歳

シナノキ……………千百歳  
 水松(スイシヨ)……………四千乃至六千歳  
 落葉松……………五百七十歳  
 杉……………八百歳  
 榧……………千五百歳

樹木も之、特に歴史的顯著あるもの尠ならず、夫の阿善ミナルバの橄欖樹は我國唐崎の老松よ  
 りも彼地に於て持囃さるゝものなりとかや、又ブクニが世界と同齡と唱ふる榧樹も、今日尙綠  
 鬱たると、又狼が其下にて羅馬開設者を哺乳したりと傳ふる無花樹果も、能く幾星霜と堪へ凜然蟠  
 蜒せりと聞く、又千八百二十四年夫のアルデネスに於て切斷したる老榧は、羅馬開府の際既に巨  
 樹ありしと、又アッペーの水松(スイシヨ)と現に千三百歳セント、フラ、ホルンにあるも乃は三千歳以上の高  
 齡に達する居るといふ、又ロンバルデーの檜樹は四五十年前の實測によれば、高さ百廿呎、周圍二  
 十三呎なりしが、其初發時の遠く耶蘇誕生れ四十年前に於て該樹とフランシス第一世がバー  
 アの戦争後、落膽の餘り帶劍を纏きて繋ぎたるありと言傳ふるにわづらや。  
 吾校運動場の一隅に聳立たる巨松ハ其嘗て大槻庭にあつし時大槻の松として有名なる巨松をぞし  
 るあらずや、生物室の稍東北に當り彎屈せる榧松は、其嘗て明倫堂の庭前にあつし時も大差ありの  
 予輩の目撃せるところあり、既に小生長を遂げたる喬木の生長度遅緩なるを見るに付けても、巨  
 樹の年齢豫想外に大なるを推量し得べき。

如斯く植物の年齢ハ其命を奪ぬと同時に、或ハ奪はずとも多少歴史的傳案に由り、稍確實なる年  
 齡を知るを得れば其壽命も頗る正當に近於結果を得るの理あり、然るに動物の壽命ハ至はては前

述の如く特に困難なるを覺ゆ、ペーコン言はずや、動物を飼養して其天壽を完ふせしめんと欲せば中途に志て多く疾病に罹るを奈何せん、又野生に儘よ放任せば外氣寒暖變動に感じてあたふ天壽を妨害するを奈何せん噫到底正確なる調査を期すべからず」と、されば今日時代に於て予輩ハ唯多數の動物及植物を見て其最も好都合に長年月を活過せるものを平均して其壽命となすの外詮ありしと思考する者なり。

白山のいへつと

其二

皓 嶽 生

皓嶽坊白す前號ヨ於てハ旅行中の瑣談所感等總べて見聞のまゝ手當り次第に書き列ねたれども頃日彼是と事務多忙、加ふるに編輯期日切迫し、一々、豆大の脳味噌を搾り出さん之中々抄のゆく話にあらず、仍て左ハ其大略を腊葉紙如き乾燥無味の筆にて書け下すととなしぬ、見ぬ人は兎もあれ、讀む人ハ前後文体が何れと誤多々々云ふ勿れ

八月一日七時女原を出づ五味島、深瀬、桑島などいふ村を過ぎぬ、去んぬる年の洪水まで處々の巖間崩れて巨石砂礫、磊々碌々として平一面の石原となりたる、堤防の破れて丸木を渡せる、其中には衣川いかわあり、手取川に立往生せる杉の大木、幾本とかく丈競べをなせり、是ハ洪水ハ爲先に土を洗はれ食糧を得ざりしゆへなり、桑島入れば土藏造りの家のみよて、アナ立派と眼をムキ視れば、何れも黄粘土をもて、塗り、幾ツとかく窓を明けたるあり、雪降るとは烈しけれ

は、二階より、猶多く積れば三階より出入するとか、家々絹糸繰る音りまびすき、此間にて「カラス、ビシヤク」「テン、ナン、セウ」「ミヅ、バセウ」おごを獲ば、十二時白峰村に着す、市村教授の計ひにて山岸十郎右衛門殿と申す名門は前裁にて、午餉の御馳走に舌うちぬ、一時少し下りて發足す、山路益々崎嶇、行歩甚困難なるに、かて、加へて採集すべき植物としてハ僅かに三四種、慰み草のなきお逆比して足車乃重さは増しぬ、太陽ドンと遠慮なく焼きつけ、まば汗水の瀧をかせどもあたりハ一向涼しからず「ヒカゲ、ノ、カヅラ」のいとよき標本の獲たれども、何の御影をも蒙らず、兎や角、窺さつゝ六時半とハぬに、市瀬温泉、湯元お來りぬ、さとがと、峻嶺の麓とて、雲蒸々々を去て山の端より、飛騰し、前面、手取川の上支流、轟々と響け、鞋を解く間に汗も暑さも消去りぬ、宿ハ山田屋とて有名なる炭酸泉は側にあり、客室に入り荷物を下すや直ハ炭酸泉に到る、泉といへば大きやかに聞ゆれども、飲料用の炭酸泉は冷泉よて小き二尺平方位乃木槽を地中ハ填み、其底より湧出するものなど、無色透明にて多量の炭酸瓦斯を含むが故に、砂糖分のなき「ラムネ」を飲むが如く、味ハ甚美なり幾杯飲むと減るとにあらぬば、「ラムネ」のロハは此時なりと、吾一人腹の皮の光澤出づるまでありぬ、洗湯ハ山の手方十間程の處にあり、泉質ハ右の冷泉と殆んど同一にして、温度と普通の洗湯よりも稍高き方なり、滾々と流れ出で流れ去り、底も透して見るべく、石の間より炭酸瓦斯、沸々として絶へず迸發し、「さび浴すまば心氣爽快、百日の疲勞も醫するに餘りあり、憾むらくは、る深山の奥の其奥に隠れて、吾等都人士」の眷顧を屢々し得ざるこそうたてられ、夕食後本日採集したる植物を吸濕紙に挟む其品目は「シホデ」「ウリノキ」(木なり葉を碎

けは瓜の臭)「アブラ、ガヤ」「ハ、キツ」(栽培)「アカシヨマ」「フタリシツカ」「ヒカゲノカヅラ」(石)  
 氣あるもの)「コ、タニワタリ」「イノデ」「オニ、ヤブソデツ」「リヤウメン、シダ」「ミヤマ、ワラビ」「ヌリワラ  
 ビ」「ヤマソデツ」「ツダ、ヤクシユ」「マンサク」「カウゾ」(魚)「オニ、グルミ」「ノ、グルミ」「ミヤ  
 マ及ヤマ、ハンノキ 栗」クマシデ」「コナラ」「ウハハミサウ」(俗に、ヨシナニ稱し又「カマハ」即片葉と云  
 「マダイワウ」「オンタデ」(富士山には頂上近く)「コトヂサウ」「クカイサウ」「イハカンミ」「イチヤク  
 サウ」「ハナヒリノキ」「キヌタサウ」「ウコギ」「シ、ウド」「ヤブニンジン」「ヤマ、アヂサキ」「タ  
 マ、アヂサキ」「クサ、アヂサキ」「ナワシロ、イチゴ」「シモツケ」「クジ、」(苦參なり)「サイカチ」  
 「タニワタシ」「スチ、カンザウ」「ツリガネ、ニンジン」「ソバナ」「ホタルブクロ」「ミヤマ、オト  
 コ、ヨモギ」「カウゾリナ」「イヌヨモギ」「ノブキ」「マタ、ビ」「ヒサカキ」「オトギリサウ」「ク  
 サボタン」「アキカラマツ」「アカ、バナ」「モミヂ、ドコロ」「ナガドコロ」等あり、十一時半諸事漸  
 くと了ど、明日の天候を氣遣ひながら眠お就く、木日行程八里餘

二日六時發程、曩死に同道を約しける尋常中學校の豪傑三名と都合八人、少々雨の降を去かども、  
 したるともなれば、意にも留めず、人々皆御前峰の路を往けども、吾等は別山より御前に出  
 でんとの志望なれば、全く反對の方向に進む、夜來の雨にて草葉、露けく、憂き旅にもあふぬ  
 袖のみずしぼる鳥の鳴く音も聽かず、朝日の昇るをも見ず、たゞ河聲の遠雷かど疑され、密雲  
 の雨ると驚くの外、同行は談話なぐでと意も留るものなく、此途は「昇り」にかゝるまでは總て河  
 中の石原を行くのみよて興味も何もあるものでなく、やがて山路にかゝれば五里はほど登り專

門にて、若し登山とのみを目的とせんおは中々お不快ある途おんかし、吾等は幸にも登山之附  
 屬にて植物採集が肝腎の目的なまかば植物だにあらば登山は如何なりとも、心得可申、可相成ば  
 登山を拔死にして植物だけ採る新發明もがなごも餘程の望とみそ云ふべけれ、何は兎もあれ、山  
 路入りてよりと珍卉奇草夥多く、左顧右盼、應接、否、採集に違なく市村教授、島先生及予の三人  
 の一草を採る毎に品評會を開死、一木を折る毎に審査會を催し時の移るを知らず、總じて此邊りに  
 は植物の發生頗る旺盛を極死、何れを見るも莊觀なござるを云ふ「ヤブレガサ」「タマガハ、ホト  
 、ギス」の如き「サラシナ、シヨマ」「サンガエウ」の如死皆人目を驚くすに足る、其上此途の到  
 る處に溪流潺々として流れ或は巖石の隙隙より玲瓏、透徹、寒、肌を刺すが如き細流の湧出する  
 あり、渴じては鯨飲すべく、足疲とてと洗ふべく、實に天賦の莊快「お此山に萃まると云ふべき  
 か、

かくて愈登れば愈高く、路益急坂とあり、呼吸漸々速さを加ひ、日光漸々頭上よ來る、幾度びか、  
 羊腸たる坂路を上下して、字「畜生谷」とい瀆る溪澗にて午餉をす、此邊の前の「ヤブレガサ」  
 に代りて「ミヅ、バセウ」「バネケイ、サウ」「ケダイモシジサウ」の魁偉、驚くばりのもの、幾百  
 千とも限らず、水分多量の沼地お似たる處に、繁茂せり、何れも巨大にして一株を以て匣内を占む  
 るに餘りあり、「更に登て愈狭く、左右荆棘叢莽を以て障壁と立てざるが如く、風全く流通せず、剩  
 べ植物及土壤より蒸發する水蒸氣のみ充滿してられ、釜中にありといへる形容語も、くくやど  
 ばかりよ苦し、漸くにして八方開濶なる山上の平原、俗の所謂「別山の御花島」に出づ、恰も下界

を脱して天上に入り去が如く心身恍として爽快限もなく、涼風颯々、面を掃ひ遠望千里、山又山、河は、白線の蜿蜒するが如く、遙に平原、空際に連り、「カシドリ」哀鳴げに鳴て谷を超へ「クロアゲハ」高く翔りて雲中に舞ふ、雲の往來劇しく時に或は面を掠めて去る、うばかりの高原あれば、冬期甚だ長々、従て植物の繁茂すべき時期短たが故に、三伏の暑さは積雪融け去るや、百草一時に濫發し一時に開花し一時に結實するを常とす、今吾等の到着したる御花島は正に十分の開花期にてありき。紅、白、紫、黄、千態萬狀、各特種の盛裝を飾り、満山爲めに錦を敷く、中にも「ワスレグサ」(菅草)は名も似ず、時を忘れずして橙黄色は美花、冷を盛りと咲亂れざる、誰を「マツ、ムシ、サウ」は紫藍色花、愛すべく生ひ茂りたる、越の「ト山」シラネ、ニッジン」の覺束あげに生ひ雜りたる、何れか面白うござらんや、識ぬ人は博物學者を無情なり、あたふ花、鳥、を枯死せしめて喜ぶと譏るめれど、花鳥を觀て真に樂しむの博物學者おして、花鳥の眞の價を知るは博物學者あり、稽康といへども此樂みの知り得る所あらざるなり、されば市村教授は此處にて芳香馥郁たる幾株は「タクウキ」と發見せられ、大に喜んで採掘せざる、根は特に貴だが故なり、識ぬ人の花もなほ雜草として、看過し去らんも、博物學者に遇ひたればおと、斯くん珍重しらるるなれ、「かくて御花島に名残の盡だされども、五人の同行の疾くに、一ツ山を超へて彼方の小高處にあるを見しうば、初めて吾等の想はざる道草をとりざるを知り、出立しぬ、途すがゞ例によりて例乃如く、歩むとはいへど其實植物共に引かれて一歩づゝ、出づるに過ぎず、湯元より備來り一剛力君、大に閉口せざる、前途は悠遠なるを述べて、連々に時刻の後るゝを悲み、吾等に問

ふに道草を明日は譲りては如何を以てせざる、吾等うべなひは行かず、されど遅くとも携まぬ半は歩むと遂に千里の果て見えて別山の室堂は安着しむるは午後一時半なりた、皆々用意の辨當開けて饑を凌ぐ、昔は別山廻りをあゝる參詣者も夥多ありしが、今は至て少きより室堂も形ばかり残りて板の繼目、明るく、器具としては大死やのなる鍋一ツあり、一町ばかり後溜池ありて水を湛へ登山者の飲料とあす、雨水などの溜溜したるものなれば清涼可掬と、おもはれざるも、うゝる高山のところで有害の「バクテリア」を含むものなれば、各飲む、市村教授、「クロ、ウヲ」ありといはれければ「タモ」にて捕ひ、これに腹黒死者はあらで、いと赤き「キモリ」あり、興なくとて放つ、此間に驟雨屢々來り、風をへそへて、いととさまじく、四方は谷間より製するおし雲の早や脚の下まなり、風のまよしく揺られつゝ、下りて山隱すとおもへば、上りて日を覆ふ、爰より御前までの猶四里以上あり寒さは寒し、雨と降る、風を荒みて、日も低く、此堂より一夜を明しては如何と、例の剛力君發議す、誰も同意せず、板の繼目のいと、悪くてなり、霧るゝを俟ちて出立を、高山の常とて、高さ草木はかく何れも矮小、地に偃伏し、走莖のまふどれり、寒さ烈しくて花開くと遅く、麓にて、實を結べる者は、半腹にて開花し、室堂邊りには未だ蕾あり、故に順次に採集すれば、何れの植物帯も見るとを得べき物は、一日に花と實と合せて検査し得ざる、是亦高山採集の利益なり、室堂近き所は「イブキ、トノノヲ」「テガタ、チドリ」(蘭科植物な分岐を手指を撮りたるが如く)叢生し、「ナンキンソダク」「イチゲサウ」など少くも現はる、偃松、地に伏せて谷に連り、「ツガザクラ」「アヲツガザクラ」別山頂に達する途の彼是と處を撰ばず、二坪乃至五六坪は

るりも一面に繁茂し、踏むとの惜しきまで美ばし、愈山頂お達玄祠堂の前に休憩す、雲は本家、場所おればにや、時を得顔よ吹去り吹来り、眺望お束の間おで、直ちに十間先きも分かずありぬ、其束の間に飛驒など眺むれば手に取る如くありくと見ゆ其高き知るべし、谷合ひには白雪皓々として、堆積し、一さびまるべし奈落の底にも入らんくと足おのふく祠堂の後壁には黒々と十四五の姓名を列記したるあり、何者なると讀みれば、是れ吾等より二十日餘りも以前に、奈翁のアルプスモ物のと、とて、まじ消えあへぬ越の白雪踏み分りて御前に廻りし、一騎當百、オット當千の豪傑、瀧山、河原、大塚、永岡おんどの諸兄あり、吾も、と、思ひされども墨の用意おかりけるお一慮の千失おれ、姓名の終りお永岡堯と詠い堯の字の最後の劃をいこ長く上げ方お引さるは筆者の同君なりをを知るに足らざるか、祠堂のおらん限り盡きせぬ手跡を雲の上に遺されたるぞ羨ましけれ」剛力君と發議成り立たざりし恨みにや、頻りと前程を急がれしには流石の道草仲間も避易しぬ、されども、眼に映るものとして珍異おらざるはかく、何時の間にも、後れりて島先生と吾とを殘して人々の姿と見えたりぬ、道は唯一筋なれば、紛ぎる、恐れなく、時々大聲もて互に呼かしてゆく、三時半飛驒室堂の舊跡に着く、此處の在昔、飛驒より參詣する人の爲先設きたるが、今は來る人稀おかりにたれば自と壞たれしあり、是より行先きお山の裏手の阻傳ひにて土轉がりて歩むに難く、時々雨降りて身も自由ならざるお、草花のわらわらさるもの今を盛りと咲きされば後髪引のる、心地まて人の前程を急ぐにも心付かて觸る、を幸に根こつるもあり枝折しけるもあり、いと先でたしとれもは危るは四ツ五ツはごも採りに花名よりおふ黒百合(百合と

ごも、百合の属にはあらず貝母の属なり花深紫色)は雑草の如く生茂り「ハクサンチドリ」(蘭科植物なり花優美)處々に孤棲して物淋しげに咲いたるもおかし、「キンバイサウ」黄金の色をまて谷門に一段の見ばおあり、「ナンキン、コザクラ」愛を本場と咲いたるも、峰にも尾にも、韓紅の色濃く、常に見慣れぬ「クワガタサウ」(玄參科)の莖長く出えたるも珍らしく、「ベニバナ、イチゴ」の赤れと、「ナ、カマド」の白さと入る亂れて咲きまとりたるが中に、峻山特有の「エンレイサウ」(延齡草)姿美しく、莖の頂より大きやかなる葉三ツ輪生じて其が中心に白の花一ツ戴きたるがあら、「ミヤマ、ダイコンサウ」は「キンバイサウ」と色を争ひ、薔薇科の「オウグルマ」ハ福壽草(毛茛科)と、あやまたる、實は別山は名に「おひて百草の品多き、心なき人だにモ、杖をとりて見はてぬものを、まじで吾等が如き、時を忘れて人々に後をたるも、ことわりあり、「別山と御前峰との間は深谿あり、其底まで降りて再び御前に昇るおと、此下り坂り別山の油坂とて名高き峻坂なり十町餘りが程は五十度位より七十度に至る傾き、羊腸たる岩の細道を彼方へ曲り、此方に下り、十四五貫の身の重さを、一足づつ、投げ下すことなれば朝まだきよの大仕事お疲れにし雙脚は今や物の役に立つべきやうもなければ、さして轉るびて行くべきにあふねば怒聲おたりたて、勢ひつたつ、洞底の細流迄降り終りぬ、聞くが如くれば、彼の別山、祠堂後壁、記名は豪傑が此坂に來りし頃はまだ雪に覆われて道もなかりければ氣の熱らちたるハ吳座を尻に敷いて唯一息に滑り下りてもありと、おんばう、愈快なる慰みにてあり、なん、谿流の兩側には「リウキンクラ」(共に毛茛科)「キンポウゲ」(毛茛科)黄金の花開き、「ハクサンイチゲサウ」白銀の色、まじゆえ、谿水は雪解の車より來るおれば、其冷ささと足指を斷つの想あり、是れと

稍昇りて大平オホダイラと呼べる平原に出づ、御前峰上は陸軍測量柱遙く屹立するを視る「三ツ葉ワウレン」  
(黄蓮の葉三ツある物)「コメツ、ジ」かど採集す、した、かよゆ死て御前の昇り路より入る、油坂を下りしは  
かりを逆サカに昇るものなり、日ヒのやうく薄暗く寒氣一しを身にしみ、脚タビの、油坂にて已に既に辭  
職を申出でる程なれば、いつかお、主の命と聽ミらず、二歩ゆきて立と、まより三歩ゆきて岩根に腰  
打ちかけ、五色の伊吹の吹き分々をなま、同行八人皆「アー」と云ふのみ、後より熊クマが來りたりと  
も大蛇オホヘビが追まらたりとも、逃げ奔るべき勇氣とあらばころ、漸シを此險坂を攀ヒぢはつれ平一面の  
雪道にして、白山の中栖、御前峰の右前面は巖々兀々、天を摩サじ、夕陽斜めに映ヒて山紫色を呈ヒえ、  
室堂遙に見えて、心既に爐邊は彷徨ひ、乾坤寂として鳥獸の影を見ず、神氣自ミづ瀟酒、足自ミづ軽く、  
七町餘は氷雪も別に寒しとをねもはで過ぎ去り午後七時御前室堂に到着しぬ、此夕、天晴れて日  
本海一帯の風景ありくとと双眸の間に見ゆ、唯日漸く没して自然の大彫刻を見飽かざるを憾みと  
し、餘は明日に希望を繋ツぎおける後おで思シふば、此夕おる白山の眺望の初先にて又終りあり  
き、「剛力君飯を炊く間も待遠しとて市村教授は惠まれさる「パン」に「コンデンス、ミルク」を添へ  
て、舌うちあかし、やがて米煮へたぞと、もてあし、を、みれば、高さ處の常とて空氣壓の少き爲  
先煮湯の熱、不足トて米の半ばにへずあり、されども饑へたる時にしあれば、人はいざ、吾は何  
かは味なるらん、と葡萄酒乃美酒に皆々と共に腹ハぬくがせつ、焚火のいぶせきも、いといで十時  
頃眠る、他行の參詣者僅に五人計にて、さして狭しとをねばへざりき此日採集シ、植物は此行の  
骨子とも云ふべきものにて數も過半は此日に得しもれあり、吾等が白山植物採集も此日おて大方

其目的を遂げさるなり、いで左に其品目の右に漏れたるを補はん

別山

- 「ハクサン、フウロ」(花大く紅色)「メタカラコウ」(共に菊科、ツワブキの属に  
五乃至六なり)「ツワブキ」(人家の庭園に栽培するが、如き葉の光澤と有せず)「シモツケサウ」(タウチサウ)(ア  
レモカウの属に  
なして美)「コメバナ」(唇形科植物にして大葉  
麗なり)「コメバナ」(寺山などにも多くあり)「イワシヨブ」(アラヤギサウ)、以上花島、
- 「シホガマガク」(ツマドリサウ)「コゼンタチバナ」(山菜類に属する白花の花弁は  
キチドリ) (ハクサン、チドリ)に類する類)「ミヤマ、カウヅリナ」(別山頂に在る)「イブ  
すれども熟覽すれば大に異也)「ハクサン、サイ  
ゴ」(シヤクナギ) (頂上近きには盛なり)「コメバ、ツガザクラ」(キヌガササウ)「シユ  
ロウサウ」(樅、偃松、梅、榊)「コ、バイケイサウ」(ハルリンダウ)「ミヤマ、クワワガタ、サウ」  
(花形甲の織形うちなる形なるものも  
て名づく、紫藍色、甚だ美麗なり)以上自花島至別山頂、中より其他にあるものをも包含す
- 「チゴユリ」(ユキザ)「シヤウジヤウバカマ」(附近の山)「マイヅル、サウ」(タケシマ、ラ  
ン)「ナルコユリ」(ツバメ、オモト)「クルマユリ」(花赤き百合花にして)「ウバユリ」(單子葉  
て網狀脈絡を有す  
る例外物の一なり)「サ、ユリ」(御前の方にも多く白色の  
花なる花を有する也)「ツクバ子サウ」(クルマバ、ツクバ子サ  
ウ)「ウメガサ、サウ」(マンチンスギ)「カブトゴケ」(地)「ヒトツブクロ」以上半腹邊
- 「ヤマ、サギサウ」(アカツゲ)「ヤマボウシ」(ミヅキ)「ムシカリ」(ミヤマ、ガズミ)「  
コ、ヤウラクツ、ジ」(マユミ)「ホツ、ジ」(以上ヤマ、サギサウ)「コケモ」(ク、ロウス  
ゴ)「ツリバナ」(ヨブスマ、サウ)「タウヒレン」(ヒトツバ、ヨモギ)「モミヂバ、ハグマ」  
「ゴトウ、ヅル」(チャル、メル、サウ)「ゲダイモンジサウ」(ヒキオコシ)「ユウレイタ」

「ケ」「ラウリンツ、シ」ハクサンダイゲキ（本草綱目には Euphrodia jasocaula Boiss. の條に植物を記載し大戦を別り然るに松村任三氏植物名彙に E. pekimensis Rupr. の別名として E. obovata を記せり、然らば國説の所謂「ハクサン」ハ「ダイゲキ」ハ「タカトウダイ」ト全一品なるは事實にあらず、増く疑を存して世の本草家に質す）「カラマツ」「サウ」モミヂ、カラマツ」「ミヤマ、カラマツ」「トリカブト」「キ、ウツラネ」「ツル」  
 「ダウ」「コケシ」（列山より石に寄生せり）以上麓より半腹に至る

因云、白山植物を知らんと欲する人は、必ず別山より向ふべし、市瀬より御前に到りて植物の珍異なるを著しきを見ず、産地は景況を案ずるに足らざるあり、白山植物を語らん人必ず別山を廻るべし、否とせば、登山は甲斐はあらざるなり、

八月三日、午前四時半起き出で焚火にて暖をとる、屋外は昨夕に引り廻て西風烈しく吹き荒み濃霧蒸々、十歩先きを辨すべからず、時を経て雨降り、六合暗澹、として物冷しく、顔を出すべしと恐し、まして御前峯頂のばかりあふん、とれもへば、膽の虫、縮まりて身慄く人もありぬべしと思ひしに、何れも、さしる弱虫よあらざるこそ頼もしげき、七時頃、風雨を犯して御前廻りを始む、先づ高天原と喚呼べる尊き所うちすぎて本社詣で、陸地測量部の泊小屋を横見て六道地藏の舊跡に古、今、信者の賽銭の多少を知り、今の人の無情にしてかくばり堂宇の壊れたるうとおもへば物あはれなり、千蛇ヶ池之是なりと案内者の注意にて知りしかと峯より引續け雪水堅く閉ぢ込れたれば何れが其れとも見分くべからず、其氷の上を踏みて彼方に渡る、采女の祠といへるあり是も六道地藏と同じく名のみ残りて堂宇は失せよき、彼是たどりて奥の院は着たぬ、祠字の前に列りて禮拜す、周圍は石垣に「ミヤマタチ、ツケバナ」憐れげに花咲き「イワツメグサ」處

々の岩間に生ひぬ、富士山おとにても頂上近くまで此草を見しが、如何なる組織をや、うくも寒氣にふるとも、風と霧と愈々烈しく、眼に前なる剣ヶ丘さへを見せず、血の池、鍛冶屋おと云地獄は如何なる谷間にあるやふん、案内者の示すよき方角をげと知りうと、一も見る處をじ、地獄の沙汰も風次第の心にて笑ふまして遠き方の眺をば風のもてくる白雲ならでと眼お入るものもなし、やがて、本と來し路をたどりて八時五分といふに室堂お還る、堂乃周圍には「ヤマ、ガラシ」「イハ、タザラ」「クロユリ」「ナンキン、コザクラ」、松、など、夥しく茂り合ふ、是にて此の義務もザツトすましましりまは九時二十分同行八人何れも息災無事下向の路へと急ぎける、「道草根性勃々として復た起る、「イワギキヤ」の花のみ大きくて莖も、葉も、いと小さきかためたは、彌陀ヶ原へ來りて有名なる雷の鳥即松鷄の一羽の雌鳥が五羽れ雛を伴ひて、心静に濃霧の中を其處、此處と、ありとつゝ、樂しげに餌をわざりたる、ソレと言はしものてず、四方より取圍みたるお、親鳥と三羽れ雛との、かふき命を拾ひえて逃げけるが、一羽れ雛は吾の「タモ」にて取伏せられ、他の一羽は圍れ中よて生捕られぬ、吾ハ親鳥を獲んとて、いさまく後を追ひふれども、羽お人間に悲しさ、遂お飛び翔る方向を濃霧の内に見失ひて茫然とイむ一行の喚る聲に心付々て本道に走せ還りぬ、僅に七町餘の霧を犯して、斯くの如し、まゝ五里霧中にありたんにと、いかにや、と書物の形容語を實地に徴し、いとおおし、うい、さておは、信者は神使として尊みはる鳥を、無慘にも取り去るとの無情さま、爰お至りて博物學者の情知らずと譏らるゝも一言の返すべきおし、後鳥羽院が「白山の松の木蔭まかくるいて、おたりに棲める雷れ鳥かな」と詠み給ひて、神鳥も、



物變りゆく世の常として、博物學の標本と云名義の下に、親子四鳥の別れを今目前に觀るも是非ありし、「マナゴ」坂(真砂坂?)よて「ウスユキ、サウ」「ヤマハ、コ」「タテヤマ、ソウギ」「カハラナデシコ」「ヨツバ、シホガマ、ギク」などを採る、市村教授此坂にて滑べられしに小石の碎けさるゝて足の拇指は腹を破られぬ、鮮血したゞり出で大に當惑し、ガ藥品など擔ひし例の笠舞君の尋中の諸豪と共々サツサと先へ行きたれば、如何とモすべからずやうなく、手拭を裂きて緋帶に代へ、堅結びて血れ出づるを塞ぎやうく進みける、剛力君はいと鹿爪らしく見てあざしが、心の中よハ雷の鳥捕ひたる、冥罰眼面、恐るべし、と想ひけんのと、後にて皆々話合ひて笑ふ、其より御前のく御花鳥を過ぎ「フシグロ」「タテヤマウツボグサ」など採り殿の池どなんよべる水溜まを道は側よし畜生谷に入る「キバナ、ノ、コマノツメ」(「スミレ」の一種黄花のもの)「オホバ、ミヅ、ホ、ヅキ」「ミソガワサウ」など採集し七ツ坂、別當坂餓鬼が喉、獅子が鼻、おど恐ろしげなる名所を霧中と夢中に打過ぎて、十二時過ぎ中室堂に着き晝飯す、此堂の一ハ慶松室堂と稱し今我校在學する三部三年の一名物、慶松君の祖先か未だ越前に居り頃、大の白山信者あて、他の信仰者の爲めにこて此處に室堂を設けしものありとあり、我らも茲に憩ひて、一息つきぬ、其御恩は、ひとへに同君に鳴謝する所あり、「爰より五厘坂(?)剃刀の窟などを經て茶釜潜りとか云へる處まで道は中央の石によりて一群の「イブキ、ジャカウ、サウ」を發見せり、是は江洲伊吹山にありといへるものなるが斯る處にて得たるも珍らし唇形科植物の性質として一種可愛の芳香を放ち、花亦小にして麗はし、其他「シラカンバ」「キノレイクワ」「ブナノキ」「チヤバナ」など別に珍らしかぶねども慰草にと採る、中にも「トチバ、ニ

ンジン」(竹節人多)は少しく眼を惹きぬ、十ツ坂、鳥居サシヲ、一ハ宮、等を飛ぶが如くに急ぎつ、名高き長坂の二ツにとりつきぬ第一は梯子坂、第二は半藏坂(?)とて共に別山は油坂に劣らぬ峻坂にて左へ曲り、右へ折れ、段かとおもへば岩角も出で、終りとおもへば、猶つきづ、幾度か汁を拭ひ腰を伸ばして漸く市瀬湯元社務所の向の入口なる瀧つ流れの處に出づ、皆蘇生れ心地して、水を飲む、御前より市瀬に來るまで僅に此水一あるのみ、別山より路は稍々平夷なりといへ、「水のなきとは大に彼路に劣れり午後三時半再び山田屋に來る、例の炭酸泉、腹ふくれていと心地よし、いで湯に浴して二日間の疲れを流す、八萬四千とやらの毛の孔々一時に開けて、惡氣皆去るかと思われ心地よき加減は猿は眞似して山路を走りし人ならでり知るべきにあらず、さて晚餐と云ふに心付れたる事あるをあれ其の生捕ひし二羽の雛の内一羽は路にて敢かく絆切れたれば今ハ唯毛羽と皮とのみあきば剝製標本となすにハ事欠け、いで其肉を調理して世の人の味ハ事、稀ある鳥の初物(ハツモノ)せんと語り出でければ其のよと直に同意せられぬ、鳥先生と吾とは調理掛とかり竈か杉の板と包丁とを命じて、人知れず解剖を、やがて肉のみ取り出でぬ、こハ此邊りの人々、神鳥として尊びけるを、今吾等取り殺せるさへ沙汰の限りあるに、其肉を喰ひたるとの知れさらんには如何又村民は感情を害するやうんとは老婆心より、のくは秘めたるあり、市村教授爲先に肉を洗はれ、鍋と漿とを命じて煮る、臍骨等ハ其儘「アルコール」中に仮埋葬し、板と包丁とは元の如く、洗ひて返す、下婢は何事をなし、や更に知らず、肉煮へされども其量極えて少く、人二三片宛お過ぎず貴重なる知るべし、さきど別段の風味もなし、尋常一様、雉の肉と略々同じ唯少し

臭氣の著しきのみ、後に到らん人の重ねて捕ふる事なかれ、其が爲先吾等代りて風味しとなり、也宛かころを給ひぞ、食後二日間の採集品を一々吸濕紙に挟む、品種の多きとて九時半頃漸く終に各々話して寝に入る

八月四日、七時半、湯元を立出づ、土産にて白山ヨモギの干去るもの、檜の楊枝など購ふ、是より歸路の悉く元と來りし途なれば植物も採盡したり、風景も觀盡まはり、何の望みもかくて唯先へ先愈と急ぐのみ餘り無聊あればこゝで島先生と吾との謠曲を、先生は謠ひ吾は怒鳴る、正午白峰に着き、例の山岸殿方にて復々晝飯を喫す、家苞にとて名産大極上と銘打ちたる「信濃柿」を需む、午後六時半女原に來る、前に泊りし宿の、陸地測量部御役人様殿が御泊りにて明死間なしと云止むまなく、兎ある農家に頼みて泊るとかきしぬ、一羽は雖は此處まで命ありしが、未だならはぬ旅は疲れまや此夕、先だちし、はらかの後を暮めて、まかりぬ、いと哀なり、「此家の夜具の如何にうしたりけん、寝入よりより、何處ともなく痒さと甚だしく其上暑さ加りりて、えいねず一、これにはほとく困トはてに死

八月五日午前六時半女原と後に見て歸路を急ぐ、山の寒さよ引換へて暑さいやまゝにまゝ、汗水滴たりて心地わるし深瀬まで「ナツ、バキ」れ花を採る、十二時鶴來着午餉す、市村教授足創癒えざればとて茲より腕車を馳りて還りませり島先生、杉本園丁、笠舞君及吾れ四人は依然膝車を驅りて行く、歸路の事とて、かのつと足速にあり、休むとも少く、日輪は今を專度と惜しげもなく吾等が頭上に其熱線を投ぐるととて、苦しさ一しは甚だし、されど、こは吾のみ(？)かりし島先生

は一向平氣にて、何處か暑さぞと云はばかりなる脚の強さには感じ入りぬ五時少し下り、何事もなく芽出度學校の博物室に歸着せり一同互に無事を祝し携帶せし用具を仕未して、たのがじ、西、東へと別れけり、

皓嶽坊白す、採集せし品目は以上掲載せしもの、みに限らず猶他に調査を要する二十餘種あり、頃日略ぼ完了したり、何れ次號に於て全植物の分科、交互の區別等を載せて其欠を補ふべし長々と冗談仕候て諸君の時間を浪費じ、段は平に御海容可被下候

讀書雜誌第二

四十大臣物語

浦井恒堂

西曆十五世紀の前半に於て土耳其文學中頗る著名なる History of the Forty Vizirs と云へる昔譯を集めたる者出たり(英國 W. Gibb 氏譯 Redway 1886) 獨逸のハウフ氏若くはグリム氏等のメーメルと匹敵するよ足るベチールとハ土耳其の大臣を以て四十人のベチール代るべく物語をなせるを擬し彼のアラビアン、ナイツに彷彿たり此書の編者を Sheykh-Nada と云へとは勿論匿名にしてシヤイクの子息といふ意お過ぎず蓋し眞の名に Ahmed ならむと云ふ次の一例を以て其體裁を知るべし

昔王ありて榮え玉へり一日遊獵の爲先城を出で終日獵暮して歸を急ぎ給ぬ折路傍にズルウシユ(土耳其古語にて僧侶又は世捨人)ありて大聲に叫びけらく余は甚だ貴重なる訓誨を有す何人あて

も一千セクイン(我四百五拾圓程)を出さむよりの之を授けむ如何々なにと呼びければ王の之を奇として馬を停せ、デルウシユモ向ひ給はく抑も汝の授けむといふなる誨と、如何なる事にや、デルウシユ答ふ大王之を知り給ひむとならば先づ一千セクインを與へ給へ然る後之を告げ參らすべし王益す之を奇とし左右を顧みて請求れ額を與へし宛給ひしにデルウシユ之靜に之を算して袖に納せ、儲容を正し王お告ぐる様大王若しある事を爲し給ふとせば必ず先づ其結果如何なる事と立ち至るやを熟考し給ひて後始て之を斷り給へ余の所謂誨といは是のみさふと計りいひ捨て立ち去らむとしければ王の侍臣大に笑ひ且つ罵りていふ如此と何人も熟知する所豈半錢をも値せむや、嗜無禮者目小物見せむとひし先さまがど王の之を制し給ひ欣然として得る所あるが如く歸城の後此誨の句を宮門其他日用の器具等に刻せしめ以て自ら戒め給ひさ話變りて此大王の隣國に王と大王の仇敵にして日夜窺を窺ひ大王を亡さむとて其工夫に餘念なかりしが未だ其機を得ず百方苦心の末一策を得たり乃ち假裝して大王の御用を承る鍼醫を訪ひて甘言之を誘ひ毒を施さる披鍼を授け大王の治療を承りたる時此毒鍼を用ゐて大王を犯さむことを説き事成らば一萬セクインを以て之を賞せむとす此男元來貪慾の質ありければ一萬セクインは恩賞と聞きて前後を忘却し容易に之を承諾し其後日夜機を待ちしが時至りて大王微恙に罹り玉ひしかば此鍼醫をして惡血を除かまめむとして彼を召さればり彼大に喜び走りて王に許お出で例の毒鍼を用て王を刺さむとし王の腕を握りしう不圖傍なる侍臣の捧げたる洗盤を見しお其縁お刻したる句あり汝事を爲まよ先ち先づ其結果を考へよと歷々讀まきけり彼此句を見て大に感し竊に思慮ふく今余毒鍼を用ゐるは大王の死

疑ふべからず余の罪免るべからず生命ありての物種にころ余にして死せば一萬セクインあるも何にかせむ危き哉余將に姦賊の術中へ陥らむとせりと急に毒鍼を收せ囊中を探りて他の鍼と取出去王の前に進せり大王彼の舉動と異み玉ひ向ひ給はく汝何故に始の鍼を含まるや鍼醫恐惶謝して曰く彼の鍼端に塵埃の附着せるよより之を止めしのみ王勵聲叱して曰く否々他に秘密あるべし速に語れ然らざれば死立に至らんのみ鍼醫是に至り如何とも爲すべからず意を決して詳に始終を語り且罪を請ふ大王其速に善お歸れるを嘉し之よ名譽の衣を賜ひ且つ敵の約せる黄金を與へ給へり大王後左右に語を給はく彼のデルウシユの誨は何ぞ單お一千セクインの値のとならむや實に一百万セクインの價值ありきと

學者の七つ道具

昔の辨慶の七つ道具は世人の口を噂炎するともろなを今余は學者乃七つ道具を擧げむと蓋し常に學者の座右に備ふべし者あり但し學者の七つ道具おあらずして余の七つ道具あるやも知るべからず

(一) ウエーベル氏萬國史 歴史の諸般の學術と關係あるを以て何人と雖も必ず多少の歴史的智識を要す例せばある英書を讀むとせむに必ず歴史的事實の引證あり其際歴史を知ると知らざるとお依り理解力に著しき差を生ずるよとは日常諸君の經驗する所なるべし故に余の此書を擧ぐるは決して専門的歴史研究を就さていふよあらずと知るべし此ウエーベル氏歴史は三種あり一を Allgemeine Weltgeschichte für die gebildeten Stände) と云ふ凡て十五卷他に索引四冊あり第一卷と

り第四卷までにて古代史を論じ第五卷より第九卷まで中世史を叙し第十卷以後近世史を述べて普佛戰爭に至る(一) Lehrbuch der Weltgeschichte (二) 卷三(三) Weltgeschichte in uebersichtlicher Darstellung なり蓋し獨逸文萬國史界の兩大關といふべきと此ウエーベル氏とシニコッセル氏にして共に頗る有名ある者あり而してウエーベル氏は其表題の如く専ら教育ある社會を目的として書き Schönscher 氏は其表題 Weltgeschichte für das deutsche Volk といふ通り専ら普通人民を相手として書けり故に學者の参考用としてウエーベル氏を便とすされど氏は萬國史は索引共十九冊の鴻卷にして價も百五十マルク即ち七八十圓なるを以て到底一人のプライベート、ライブラリーに備付るは六ヶ敷事なれば余は氏の教科書を以て最も便とす此教科書とは大學教科書をいふにて普通我邦にていふ教科書と異なり是を上下二卷より成り上卷的一〇〇〇頁下卷的一三〇〇頁の大冊にまて上卷に於て古代及中世を論じ下卷に於て近世史と述へ上卷に全部の索引を附し下卷に獨逸文學略史を附録とす此人は三十年餘獨逸ハイテルベルヒ中學校長として歴史教授を兼ね最も經驗豊富を以て教師及生徒用書籍を著すには甚だ適當なる位置にあり此書の初版は一八四八年に出でしか盛に世に行はれ獨逸の中學小學教師は必ず此書一部を座右に備ふる事なり隨て此書の發賣高も夥しく不絶訂正出版の舉あり余の所有せるは一八八九年版にて第二十版なり勿論之を通讀するに及ばず常に几邊も備へ隨時參考に供すれば足れり此點に於て未だ多く此書に優る者を見ず價も比較的廉價にして二冊十八マルクあれど古本ならば五六圓にて得らるべし氏の文章はベツケル氏の歴史の如く流暢ならずと雖も其長所は其記事の普及せるにありて政治歴史は勿論文學哲學美術工業風俗の

變遷に至るまで毫も漏れずことかく又其性質極めて公平不偏にして決して政治若くは宗教のゆる黨派に僻せざるを容易に他書に於て見るを得ざる長所とす殊に各頁に完全なるマージナル、ノートを施せるを以て一見搜索せんとする條を見出すべく頗る便利なりとす氏の第三の著ある摘要の歴史教科書としては其体裁を得たるものにあらざこれ元來此書の目的は専ら講義を聽問する書生の備忘録とあすよあれば普通参考用としては小に過ぎ其目的に叶ふこと能はず

英文の萬國史の詳なるは全く之れ無し是れ決して英國の學術獨逸に劣れるが故にあらざ英米兩國と獨逸とは歴史教授の方法を異はせる爲あり獨逸にては小學普通教育を卒業すれば直に將來の方向を定め實業に従事せむとするものは直にレアルシユーンに送り高等教育を受けむとするものはギムナジウムに入るおれは我邦の尋常中學校と高等學校大學豫科とを併せたるもれにて此學校を卒業すればウニベルシテートに進入する定なり而してギムナジウムにては萬國歴史を授くるも反ち英米の教育法にては専ら力を英國史又ハ米國史を盡し傍ら佛國史獨逸史の如き國々の歴史を授く故に英米に於ては稍や高等なる萬國歴史を編む必要なきなり

(二) 必要なるは百科辭典にして余は Brockhaus Conversations-Lexikon (一) Meyers Neues Conversations-Lexikon für aller Stände の二者にして各一方に割據して相競争して降下し一方に訂正新版をなせり各十九冊宛にして天地間に於ける凡ゆる事物を説明し必要欠く可らざる書なれども共に價百圓に近く普通の参考書として不便を免れず通常の参考用として

坐右に備へんよと小辭典の方を便とすブロックハウス、マイエル共に *Kleines Conversations Lexikon* と云ふブロックハウスの方ハ二冊マイエルは三冊共拾圓内外にて購ぬを得べし兩者兄弟が難く弟たり難しと雖も各其長所短所を有せるを以て其目的に依り大に其効用を異むす即ち文學歴史地理參考用とては必ずブロックハウスを要し理科學參考としてはマイエルを推さざるを得ずブロックハウス最新に出版は一八八八年にして第四版なり元來英獨兩國の百科辭典の大に其性質を異にしエンサイクルペディア、ブリタニカの如き實に完全無欠のものなきともと學者の參考用を目的としたるを以て其説明高尚は過ぎ初學者は解し難き節も少からざるものと云ふが其題目僅少おで迷惑すること少からざるは反し獨逸の百科字典も其名コンバアサチオレスの示す如く普通人民を目的として編纂せし者あるを以て如何なる事柄と雖も載せあるが英獨兩國のチエンバア氏のエンサイクルペディアはブロックハウスを學びたる者にしてブリタニカとは大に其趣を異にせし此書は十冊にて價四拾五圓あり *Beetons Illustrated Encyclopaedia of Universal Information* も亦可なりこれは二冊より成り上卷は地理歴史傳記を論下卷と理科學文學美術に關す各其好む方を分ちて購ふを得べく又ポケット用として獨逸に *Kuschner Taschen Conversations Lexikon* あり英に *Cassell's miniature Cyclopaedia* 及び *daw's poet Encyclopaedia* あり共に字數約二萬を收む甲乙を判するに難ききてもローれ方を以て便なりとす

(三人名辭書にては *Lippincott Universal pronouncing Dictionary of Biography and Mythology* を以て最も可なりとすリッピンマットは米國フィラデルフ、ピア府ある書肆にして編纂者はトーマスなり  
 通例トーマス人名辭書といふ大本上下二冊合せて二千四百頁あり又合本一冊の者あり  
 (四) 地理辭書の同誌タリッピンマット會社編纂の *Complete pronouncing Gazetteer of the World* 一冊約二千三百頁を可とす要するは獨逸にては獨逸人名辭典の詳細なるものあれども一般人名辭書及地理辭書の宜しき者あり是れ前述のコンバアサチオレスの内に含有せるを以てなり故に大會話辭典を備ふるとは別に地名辭書人名辭書を備ふれば必要なきと云ふ小辭典だ々にては不充分故以上二者を備へざるべからず

(五) *Haydis Dictionary of Dates Relating to all Ages and Nations for Universal Reference* も亦必用欠く可からざる者よして著しき世界の出來事法律制度等を集めたる者にして *Le Janin Vincent* の編纂に係り一千余頁の大冊にして一八九五年までの事實を集めり英米の通評に曰く公私文庫に於て先づ第一は備付ざるべからざると云ふエプスタ大辭典次にヘーヅン氏辭典なりと以て其必要を察すべし  
 (六) *Brewer Dictionary of Phrases and fables* 是は苟くも英書を読むに必ず一部を備へ以て坐右の珍とすべし舊版は廿三版よして一〇七六頁なり一昨改正第一版を出せり頁數は約四百を増せしは過ざれども書籍の形も大となり大に訂正増補を加へたる事著し

(七) 地圖の最も完全なるは *Andreas Allgemeiner Handatlas* よして地圖百二十葉と最も詳密なる索引あり英國出版にてハジヨムストンと云ふれに到底之と比すべくもあらずポケット用としてはフエリッブとバートンロミニューは二種あり余の經驗に依ればフエリッブは方遙く優れ其表題は *Philip Handy Volume Atlas of the World* あり

書籍の大きさ

我邦の書籍は大ききものと半紙本美濃等の區別あるに過ぎず近來に至りて菊版などの稱あれども一定の稱號あらず故に新版廣告等を見るもたゞ洋装美本などと計りて如何なる体裁あるや知ることを難し既に洋装製本盛行せる以上を矢張り歐米は如く種々名稱を附さば極めて便利なるべし歐米に於ては其印刷用紙の大ききと製本に依る種々の名あり先づ印刷全紙を中央より二つに折り日本の二枚即ち四ページとなす時は *Quarto* といひ之を又折りて八枚即ち十六ページとなす時は *Octavo* といひ十二枚即ち二十四ページ折れば *Dodecimo* といひ十八枚即ち三十六頁となせば *Octodecimo* といふ是をより以下折り方に因りて種々小きき形を得べく總てポケット、エヂンヨシといふなりオクタボ、ゾオデジモ等の皆羅何語八、十二等の意よりして日常用あるよ不便なるを以て通例 4 to 8 vo 12 mo 18 mo 24 mo 32 mo などといふ今ある洋書を檢せむに四枚目八枚目をぞればページの下部左若しは右は A B 又は 1 2 などの符號を見るべし是を製本師の見易きた先は附まざるものよて其符號より符號までの枚数を算して其オクタボなるや十二デジモなるやと判じ得べし然り而て昔は印刷用紙の大きき一定ありて其種類も Royal と Demy (佛語の *denier* (half) より出て *denier-royal* 即ち小ローヤルの意なり) 及び *Crown* の三種に過ぎず且テミオ氏の最も廣を用ひられなり然るに一方には製紙機械發達去て如何なる大ききの紙をも製出し得べく一方には印刷器械改良せられて如何なる面積の紙面をも印刷すべくありければ書籍の大きき

種々雑多の者とあり來れり故に形狀の前に二々其用紙の名を附して區別す即ち *foolscap*, *crown*, *demey*, *medium*, *royal*, *super-royal*, *imperial* の如く凡て此種の名稱は英語にて *water-mark* と云ふ即ち紙中の「透し」模様より出たるものと前後の大ききに因りて降しざる者となりクラオンは王冠のスカンあるためデミイは前述の如くクラオンとローヤルの中間の位あるに依るが如し殊に面白なりフルス、カッブにて是は元と以太利の *foglio capo* 即ちフォリオ形の紙といふ譯ありしが何時よりフルスキカッブと誤り其より其スカシにボンチ畫け人頭と帽子を用ひることとなりフンハイム獨逸讀本の如きフルスキアワブ、オクタボとす今通例の書籍は大ききを擧げり次の如く

長寸分 巾寸分

長寸分 巾寸分

32 mo = royal	32 mo	4,4	3,1	16 mo = demy	16 mo	4,6	3,7
15 mo = royal	18 mo	5,0	3,5	f.c.p. = f.c.p.	8 vo	5,6	3,8
8 vo = pot	8 vo	6,7	4,4	L.p.	8 vo = Large post	8 v	7,1
8 vo = demy	8 vo	7,5	4,4	M.	8 vo = medium	8 vo	7,9
Demy	12 mo	6,0	3,8	S.B.	8 vo = super-royal	8 vo	8,4
Small crown	8 vo	6,0	4,2	I.m.p.	= imperial	8 vo	1,00
Crown	8 vo	6,3	4,4				7,1
Large crown	8 vo	6,9	4,6				

以上は皆普通の体裁にして長さの方巾より長さ方あるが之に反玄巾の方長く所謂横帳の体裁なる

ときは其大に依り Oblongato 又は Oblongato 呼ぶ定あり  
驕る者久しからず

奥國のアーチデユーク、フレデリック第五世（一四四〇年より一四九三年まで獨逸皇帝）奥國の爲  
めに題目を作り甚だ得意とあり傳へて後世に至る曰を V D I O O と之を解する曰く

Austria, Est, Imperare Orbi Universo (羅甸文)又獨文にて

Alles Erdreich Ist Oesterreich Unthelhan 即ち

奥國は全世界の君ありと而して普國のフレデリック大王の例に諧謔を以て之を解して曰く

Austria Erit In Orbe Ultima

即ち將來奥國は全世界に於て最下等の位置にあるべしと罵り得て妙といふべし

憐愛と貧困

昔羅馬に行はれたる諺に曰く

Sine Genere et Paacho friget Venus

(Without Ceres and Bacchus freezes Venus)

セレスと羅馬神にして農産物其他土地の産物の神なりバックスは酒の神希臘のゼオニシユスに  
同じベナスは人の知る如く憐愛の神あり即ち酒と穀無くむば愛の神凍ゆとの意あり是と同じく英  
語の諺に曰く

When poverty comes in at the door, love flies out at the window

戸より入る窓より逃ると其速なるをいふあり

瑞西と雇人

瑞西の國國小に人口多く動もすれば人口過多の患起る故に古來瑞西人は外國へ出て人に雇はる者  
多く殊に中世時代の終りに於て各國の封建制度倒れ常備兵起るや盛に瑞西人を雇ひて兵とせり特  
に佛國盛よして彼の大革命に除ちチニョレリの宮殿を固守せしことは諸君に知る所なり故に諺  
に曰く No money, no Swiss と即ち此スキッスは雇人の義にて金なくば誰も其依頼に應せずとの意  
あり又佛國旅館に之必ず揭示して曰く Demandez au Suisse と即ち瑞西人に問へとの意にして此  
瑞西は英語のホテルのポーターをいふ即ち旅館の門戸に番人にて旅客の求先に應じ買物を整ふ市  
中見物の相談に應じ車馬の賃錢流車時刻を始末何事も知らざる事なく外旅國客の爲めは非常な  
重寶ある者なりと云ふ

尊號及稱號

Autocrat は希臘語にて專制君主の意なり今日まで獨り魯國皇帝のみに用ふ

Chalif 阿刺比亞語相續者の意味よりモハメットの死後其相續者の用ひし名にして回々教國最上  
の主權者を云ふ一五一七年土耳其人埃及を占領し最後のカイロにカリフと同じく三十八年に死  
せるに依り其より此號は土耳其皇帝のみに歸せり

Czar 魯國皇帝の稱ふして羅馬のシーザアより轉せるあり

Duke 羅甸の dux (leader) より出づ戦時に人民の將として之を率ひ戦に赴きたる獨逸語

Emperor 羅甸の Emperor となり出づ大將の意あり  
 Kaiser 獨逸及奧國皇帝の號あり魯國のツアーと同しくシーザルより出づ  
 Khan 蒙古の君主なり成吉思汗は如し元 Provincial chief の意あり  
 King 父の意なり獨逸の König へ König より出づ是は Ohnudi 即ち family より出づ國王は人民を  
 率ひて戦に出でしめり  
 Queen 母の義なり  
 Sultan uler の意にて土耳其皇帝の號なり普通の説にてはパエチッド即ち英語のバヤゼット  
 以來此號を用ひしといへり但し是には異説あり別に述べし

滄浪陳言

滄浪

人を見えけんねたしといひつゝ。我がほしたる清子の草子。とくやまてむとまきとやめて。千年の齡を得ばり紀氏の日記。何れもこのことわりを示さる。いでや此世に生れては。作り侍る者。常磐に。堅磐に。かたられと祈り。立て侍る事。天地と共に傳たれ願ふ。人の常ある。況して。陳人陳言と名のるが。新しだが上も新しかれと頼む。亦さぞあまなんかし。

○ 琴

まるづの樂器の中、琴こそまことの大和手振あれ。秋まあかゝぬ夜半。遠く近く。風のまに〜。

調べの此れか彼れうと推し測るゝ程の。はかなくこひしきの増さる。或は。菜種櫻のころのの暖さゝく睡を催はずよ。五ひら六ひらの花諸共に。青簾ゆり動の春風又連れ。高に低き。まかど聞き取らるゝにもあらず。聴まえにもあらず。ころも空にこの世ありとしもれもほぼぼなるに。其れしづべの小止みそれば。残りをしづかなさ取りませて。ことしへなれおもしれ胸に行き通ひつゝ。又其のまこえぬれば。樂のじり天上の様繪がたなされ。いほが我知らずねむれる。何れをいづれとモ定然のねつ。大和た振と琴にこそ留光たれ。上綱の琴ひき玉ほぬは。玉の盃底をたあるべし。

○ 横笛

横笛はさして悲しむ音ならねど。催せし顔なりや。秋の夜は月のいとあかきに。雁さへ鳴り渡りて。荻の上葉のさやぎもしみわたるに。遙々おくりこせる。あまま上手あふぬすくのしき様に。おぼえず窓れしあけ。其の方れ眺かたやらる。されど夏の最中。柳葉のそよもいはず。汗ぬぐひあへざる程小。近くに吹きなせるはこゝろ苦しくてわろし。

○ 月 琴

名さへをうしげあり。夏の最中。晝の盛もすぎ。かはほり飛びかふころ。前裁よ水うちなぞし。風鈴の心地よげなるに撥軽く弾丸おせる。暑さも忘れ果て。竹の葉れ上の水のことおきて。秋うとれもひかざる。垣の外お人のさち聴くも實にほとと。しかべの少しうきさるを上つ人おといか。

○ 尺 八



この調べおまり沈めり。何を吹しても。露もろこびしげあきぞ恨なる。いほにてもあれ。憂ひある折は。こゝろもとだれにて。世れ中いとわく。いてなきおもひも引き入るる。様なるこそ。おやましきくるしき限なれ。さつれ酒の宴あそぶ。皆人うかれうち。のたげあき振まひ共も出で来あんはほ。間近くよころとまして吹きすすれば。頼みも静まりて。はだぬぎしも襟かたわらせ。あぐらぬも膝あはし。ひるぶるに耳のたむくる。げもあらまほしきこゝろぞする。春雨れ夜。時雨のぬへあそ。涙れとさめ人あらめや。

○琵琶

琵琶弾きは光くら法師こそ似あてしけれ。かあしき凄き怖ろしきをぐりを。明かぬ目おしり。聲をたててひきなせる。とけき武夫のこゝろも碎けぬべし。上手からぬ琵琶こゝろ世に聞き苦しけれ。琵琶の雨の夜を殊に身にみみておぼゆる。

○箏 樂

箏篋のうらましき音にわれど。雪のいとしるき夜に。神々しけ神の廣前よ。たかまゝとうち響かする。天へもすみ昇る心地して。及ぶ者なく貴とし。さくやのある家に吹死あらずと。髪も振ふ計りおくくし。

○三味線

いやしとはいへおもしろき限ありや。こればうりたるづの音をあす樂器はあらじ。上手のひきこるは。浮死し調ハ我身も空に昇らん程にねをえ。しづとさるらあはれに浦悲去くあり行き。奈落の底

にしづむ様おもはれ。おかしさハおもはずよふひのねとやかねて。姫君上鶯達まで。さもとを口よわてや陸ぶし笑ひ給ふめり。絲むきも醒れ。こかしきさもうき。よろづかの音にまかせはつるずあやしき。酒れ宴あそに。花やかなる唄女の。おもえろき聲して弾き出せば。稀代は剛れ者も浮かれたつれかまき。下手あるハ騒がしきばかり。耳おほえわへず。されど上鶯達の手にし玉ふりいかにや。男のしのび音も。春雨のゆふべかきあふす。亦優にやさし。四季いほにつけをかし

○明 笛

明笛と遠くよりこゝろ聴くべけれ。音近くてといと高うくのしまし。秋の時雨に濕めり勝のれとして。學れ窓を音づる。しじりつとゆみ。涙をしるめり。尺八ほどにはあらね。沈みえ調なり。月琴とあそぶ吹きて。いとをかし。

○オルガン

深う習はずてひだ得られてをか。稚幼きわはの。紅葉は様ある手してひきこる。のどやかにやさし。夏の火の様な雲の西お焚ゆる夕。うやるあるに學校の前を過れば。しづか響ける。たもはずに足曳さ止る。歌もど唱歌ぬりこそいとつたつけれ。

○提琴 胡弓 胡琴

清樂の中。提琴よそやさしくゆかけれ。上手のすりたる。全たく引きとられ。我よもあらず聞き耽る。胡弓ハ提琴を大和振にあせるあり。胡琴は音賤やし。合せてのをかしけれと一つにていあふまほしかず。清樂はすべて雨の折こらよけれ。

ピアノ。ヴァキリンなどあれど。上手のを聴のねは能く知らず。  
 すべて樂ハ徒然の折。憂いしき折。怒れる折。よるづにこゝろを清光。氣を伸ばす者あれば。をとよ  
 も亦聊かこゝろ得ざる。玉の杯底ある耳あふめや。ましてをむあゝの深きねやあ。和琴弾じ。こる。ゆか  
 し。此の世の者としもなし。かの仲達の百萬の兵士を。己一人にて笑之中に退々し。孔明ハ樓門  
 たしあなて。靜かに琴をなん彈せりし。笛またへあるらその。狼の牙をれがれし。古の賢しき人々  
 の。あゝろを行き世ふたちてひとり琴書を友とせし。いづれか樂をず。たざる。

文苑

越乃あかわ雪

清定

雁

越の海こえ來る雁ハ聲さむし占守れ鳥ハ霜やれくらむ

馬上雁

ふまあへてかまどにいそく我としも知らてなくむかまのもるこゑ

千鳥

友千鳥沖へもるうあかくこゑをいそ山ちかくかくるしらなみ

竹

さらりとして笑てなんぬいりなけれともあくとしもかたまとのむらさけ

田家秋夕

ゆぬ日うけ竹の林よくれそめていとよきははなやも伏やも



花のたみ

千木れや 雅雄

月れ夜ひとり郊外大桑橋上に青山白水をなかめて

幾そのよ迄も。妻戀ふこ。なれし男鹿の。聲のせて。招くを花に。ほゆいけく。ゆとり月。

かたぐふし。

月明如晝

袂をよたて。吹く風の。誘ふにまか。舟うたて。くも井に水に。すむ月を。あふきほおまほ。

あかめけり。

月入孤園

芦間れしきれ。羽のたに。いけに雪のへる。根を草。ゆられて波に。立待に。月のかけこそ。

くさなれ。

蘆岸秋晴

軒の花に。かせみえて。かよふ虫か。琴の音か。月をよこさる。かり金れ。影はこもとに。

かちにけり。

月下白露

つゆは宿れる。月あふ。桐れ一葉の。うつ散りて。虫は音絶し。ませれ中。聴きこる得れ。

あだのみゑ。

閑居夜靜



霜夜比戀衣

此麗山人

影かたそき乃月高く 千木をさへ先に色見えて 散るや紅葉のぬかけきい ちへへ籠むる宮垣と 八重も光くりて西へ行く を川の水はたえくくに せかれて秋のちも影を 穂のちも残を ち香芒 まねく袂も霜かれて むすぶせむ無死身なるらよ 汲む御手洗の水よりく みどりの衣をさらわれし 奈の木栢の影やらむ 濡れし落葉をすみそめと 染むるち寒き木栢に ねく衣を去られ叢からす 騒し死聲もかつやとて 神代なからを忍はする 静けきもりの異より それうあらぬり小夜擣衣

をを浮舟の現つし世と 渡るに難き丸木橋 音をしるへやれを霜に 跡をのこしてたどり行く

菱殻の さすもかひなき吳竹の 繁みか蔭のしり折戸

見柄に あたり淋しく二もどの かい星の柳影やせて

行影の 月も辱ぬたはれ漢の そめきの聲は聴ゆ也

『とりを恨み 紅葉を已か心とや 鞍の前輪にすかり筒

別ををしましきぬくを 霜夜とありてうち初にけり』

三枝の 半かへけしを簾もれて けり乃燈のかけ青く

鴛鴦の をこしま近きそて垣を 左に衣をかいいした

石綱の またうら若た女か眉の 物や思へる重氣あり

『人はさころも聴くならぬ 已か心のそれあら 我にもあふぬ此の頃と 世の霜のれに似もや  
 くて 胸の思ひの草茂と いひてかへらぬ事乍と さは謂危皇帝のおほ命 恨みまつるに有らぬ  
 とも くも立ち惑ひ風すさふ 鶏の林の下くさを 散らしら露と消果し 君を戀しみ神かけて  
 ちよを一夜ふたくえつ、 ちとせ住まむと契とてし 心淋ひまくうとまれて 中々つかき世れな  
 かみ ならふふとてと無けきとも いのち待つまのあり家とて 結ふかり庵の假初と 思ひま程  
 に春の暮れ 秋も更行く小夜風に 君か形見と身に纏ふ 衣れたてのいと寒く ねられぬまゝの  
 手ささひに 打さ衣の濃紫 縁の色を見かたに 猶も昔のーのはれて』

聲もなごにしめまつ、 いふとりはや々さ席を 立つよと見えて法の火の なひけりやかて  
 みにはしむ かもの鐘の音空澄みて ころぬく月を横様に 飛ぶるり金のふさつ三つ

吹雪夜を 相客と岐蘇の生とそ 花 樵 人

青塚のゆきおま白き雪ふみ哉

雪を掘つて 主人大根を饗す哉

氷をる命婦のひ杓あわれを哉

子巡禮お士官もの云ふ雪野哉

冬川お鍋入れてある坊が背戸

鯨突た野武士は果と申まけり

寒月や河瀬はする池のおも

豊 泉

寒梅小釣瓶かけたる寺の背戸  
落葉多き裏寺町の霰のな  
巡禮の親子時雨る、古社  
水仙の鉢にして氷る石ながら

樂水  
笹舟

旅僧の文錢つなく年は暮  
灰塚に狐鳴り寄る小夜時雨  
曉の富士見る船の蒲團かな  
屠ふるへく師走れ牛の太り哉  
零丁の身かな紙衣小硬りなし  
掃火焚く苦船黒に霰夜うき  
跳ねうへる霰大なり鬼瓦  
沈む日に汐吹きかくる鯨かち  
士の果と申して白足袋なり  
一獨居れ炭とくすぶる夕るち  
冬籠火鉢に奇古の好みあり  
寒月や抜き放ち見る劔の冴に  
征衣脱げとや淀の浮寐鳥

水仙や富士と對して唐机  
酒一斗李詩集を得て冬籠る

復孫露人先生書

村上 函 峰

孫氏、字士希、霽人其號、清國金陵之人也。博涉諸氏、頗精經義。往年官游于我崎陽。函峰先生乃與之屢論難討究經義、此篇即其一也。今請諸先生、錄以供會員之瀏覽云爾。紫溟識

村上珍休謹復孫露人先生案下。僕客冬應聘來此。承乏教諭。先生夙在教職。日接下風。何幸若之。頃者介松山嘯雲。請觀高製。而先生却微拙文。僕不顧淺陋。呈舊稿一篇。乞正。先生幸不鄙弃。稱許過當。殊增悚懼。且見教以治經之方。反覆數百言。識見雄卓。引據該博。敬服々々。但來諭中有「一二可疑者。欲舉質之。而執筆踟躕。已而以爲長者辱教。奉答遲疑。恐背厚意。故不願盲昧。敢陳鄙見。來諭云。五經皆无註。非无註也。不過訓詁而已。求如朱註之簡鍊明晰者。千百年后。无復一人可以比。蓋謂漢儒傳註。不如朱註之簡明也。僕竊以爲尊說似不明治經本末。自有五經以來。諸家傳註。汗牛充棟。獨漢傳宋註。最明確。是實公論。非僕私言。但其傳註有詳略。有疎密。固難優劣。然先漢后宋。理當然。且漢儒重師說。受授不苟。確有淵源。決非出憶測者。宋儒雖務立異。至訓詁名物。不能脫其範圍。是漢儒傳註之所。以不可廢也。若夫朱氏之說。則究義理。驗踐履。固冠衆說。然或有浸淫佛老。而陷空理者。或有主張意見。而失本義者。我邦先儒太田錦城云。漢學小醇而小疵。宋學大醇而大疵。旨哉此言。僕嘗謂漢宋傳註。各有

長短。去其短。取其長。則古今傳註。皆聖經之羽翼也。况於漢宋傳註乎。蓋學者學聖人之道也。其言合聖人之道。則芻蕘之言亦取之。不然何有於漢宋諸儒乎。語云善者從之。不善者改之。是治經之本義也。獨在先生不期治經本末。概右朱註。左漢傳。无乃趨流而委源乎。是僕之所以不免疑也。更有大疑焉。來論又云。秦火后。經之存者。不過什一。至漢漸得遺經。然未免舛錯。及宋儒起。去古愈遠。亦无從整正。讀五經。間有不可解者。每憾其无精註。嗚呼。先生之言何容易也。夫五經非无精註也。註釋多而讀者或眩惑。不能精究耳。若五經正義。五經大全。康熙欽定四經。三禮義疏。乾隆御纂三經。貴國歷代帝王。皆立之學官。為之臣子者。如何不服膺而敬遵之。其他自郝京山九經解。朱竹佗經義考。迄通志堂經解。皇清經解。中諸家傳註。雖出於一家私說。要皆有補於聖經者也。蓋唐宋以來。諸家註疏。絲分縷析。愈出愈密。或失於精。不失於疎。所謂无精註者。果何所指。若夫註釋多而不能精究者。抑有故焉。世之治經者。汎讀傳註。而不研究正文。博涉旁說而不熟察本義。宜矣。白首兀兀。於正文本義。无一所獲。豈不可憫笑乎。然精究咀嚼。窺奧旨。亦何容易。僕志在焉。愧不及耳。嘗說似五經為不可必講者。推其意。則謂四書有註精。五經无精註。暫束之高閣。殊為駭人之說。而抑為不屑之教誨耶。僕賦性謏陋。不爛辭令。言涉忌諱。先生若為可教。請舉一二要旨。見論則可矣。伏承先生歸國之期在。近。其欣喜可知也。僕不日携嘯雲過尊寓。奉謝且陳別。一月念五村上珍休頓首。

種櫻說

垂東仙史

見睨而消者雪也。然雪也有時乎。不朽矣。世描亦種義士復讐之圖者。必寫窮冬之雪景。然則雪亦藉忠烈如義士者。長不澌盡矣。悲雨襲至。忽然委地者花也。然花也有時乎。不朽矣。世談花者。必稱大石櫻。不必在花之麗與芬也。然則花亦藉於義士。而長不滅矣。嗚呼。忠孝節義之凜乎。亘萬世。千載之下。能使人欽仰不已者。有如此者焉。宜矣。世人見雪與花者。猶接義士之遺澤。感慨不已也。余性愛櫻樹。壁間必揭以櫻花幅一軸。庭園必栽以櫻樹。每仲春花時。至標藥吐芬。貯蠶布寫。譬之桓桓武夫。奉命於闕下。昔者茂叔愛蓮。淵明愛菊。其相知相愛者。豈偶然哉。夫菊也。性隱逸。酒灑。故知淵明清節。蓮也。性綽約幽雅。故知茂叔淡泊。而櫻也。性和穆冲澹。是以知義士節烈。嗚呼。人知花者。常有而花知人者。不常有。可勝嘆哉。屬者知友某。贈以櫻樹二株。謂曰。此是昨春得之於嵐山者。子有花癖。乃敢贈之子。幸添靈園之一致。余狂喜殆乎。欲躍。斯卜日。倩園人。栽培之後園。以謝其厚意。吁。如某夫人知人者歟。時維乙未桃浪下澣。

筆筒銘並序

石田黑子軒

筒以竹造。形為八稜。堅六寸。徑三寸。強可以容筆十數。管八方。彫山水。意態宏逸。氣韻可愛也。為之銘。曰。維机上友。厥材維筠。毛穎所宅。石穴為隣。鑄彫極密。氣韻逼神。有水激洌。有山嶙嶙。於戲其值。不當一縑。貧士而得。藏而可珍。茲可以貴。茲可以親。

次永井禾原滄上雜詠韻

蓉湖漁史

遊遍八紘何等緣。冠纓挂去有腰纏。觀風文字收囊底。結客交游在酒邊。歌唱揚州二分月。燭輝松水一

江烟笑予豪氣猶如昨。夢逐長風萬里船。

木蘇岐山曰。音節雅和。不入輕佻是應制之佳者。

篠原

風楓想見錦袍鮮。日落霜繁古墓前。却老駐顏非我志。英雄回首靈神仙。

又曰。着論親切。令齋藤氏首肯地下。

秋懷十五律

狂骨

禾落千山滿眼愁。蒼茫忽覺一身秋。白楊哀雁籠頭月。鐵笛寒風城外樓。尺素不來南國杳。朔雲無際暮天浮。芙蓉折得欲誰寄。江路無人空少留。

西風入枕旅魂驚。懶寫雲箋向短檠。春盞綺愁秋更結。花留幽恨月徒明。五更哀角戍兵淚。千里寒鴻孤客情。借問天涯猿鶴侶。青山何日得將迎。

森肅夜來霜氣新。涼颼如水動蕭晨。天涯自吊苦吟客。世上果誰同病人。書劍十年空曠屈。風雲何日得龍伸。仰看千里浮雲裏。一鷗擊秋凌九夏。

燈青劍白夜何其。秋氣催人入酒悲。塵土拂衣身忽逸。風霜入筆句初奇。胸懷鬱結誰能解。心事冥茫只獨知。孤淚揮空飛似玉。乾坤秋老愴英姿。

元氣堂々六尺軀。十年落拓滯江湖。未蓬青眼迎狂骨。猶有冰心在玉壺。淚底女兒哀別易。秋邊風月入詩殊。流行坎止命焉耳。莫使夢魂勞客途。

回頭半生引長噫。彈指匆匆物象移。猛虎毒蛇三尺劍。盲風輕雨一篇詩。殘杯獨向燈前酌。孤夢無端枕上遲。傲骨尚堪霜雪苦。秋風何意鬢成絲。

壯士悲秋難自寬。醉來擊碎水晶盤。胸中熱血爲詩嘔。燈下悲歌看劍寒。青眼料人吾久鑄。朱絃撥淚賦空冠。中宵肅寂寒帷看。搖落庭柯月影單。

俠士臨難豈避危。直拋身命固非痴。頻摩一劍思仇復。未碎孤琴果爲誰。天若有心天亦助。我元無罪我奚疑。須留心赤耀千古。何必生前求已知。

唱罷一篇行路難。當窓靈嶽拂雲看。眉間天近星河注。屋角夜深風露寒。可有紫龍離洞窟。豈無白鶴下瑤壇。天風浩々吹人骨。蒼涼乾坤俯仰觀。

誰道詞人氣力無。狗屠回首卽吾徒。徑將詩膽向剛士。便取冷容酬俗夫。一代文章遠世習。半生學術笑吾迂。詩成轉覺乾坤窄。獨立蒼茫望帝都。

回首中原腴肉生。幾回欲作不平鳴。高懷秋拂衆星爽。和氣春籠群動萌。筆下風霜神鬼哭。語中霹靂海濤傾。流年漠々孤城客。一夜幽情夢不成。

觀去也知人事輕。江湖太半是蟲蟲。世餘缺陷獨排我。愁向醒中難觸醒。滿腹詩思杯底注。消魂風味燭前橫。中情獨熱雙眸冷。仰看長庚凝水晶。

賦命窮通付彼蒼。倚樓孤坐念行藏。高人自古將天合。韻事何曾與道妨。身後浮名同畫餅。眼前風物好文章。南華一讀秋天下。世態人情得自忘。

坐將幽獨守天真。了得寂寥前生因。日月千秋挂清景。江山萬古葬詩人。草頭露湛幻人世。松上鶴啼清

我神。八極逍遙無限意。浮槎徑欲問天津。  
夢騷神駒試縱遊。一鞭直到崑崙頭。暗雲未披九州晚。怪雨正闌白晰秋。脚下一條沙漠捲。眼中萬里水  
河流。蓬萊不識那邊是。杲夕扶桑旭日浮。

偶感

君峰外史

堪驚客裡歲月移。白露清秋暗可悲。弊褐在身何足道。菜根有味聊忘飢。平生抱志無人識。殘夜讀書有  
月窺。却恨多年名未遂。空將感慨入新詩。

書感

落魄經秋二十年。弊袍短褐有誰憐。功名謬我如流水。壯圖收蹤似淡烟。萬卷讀書能何事。半生所勞不  
當錢。人間幸有杜康在。相伴窮途爲宿緣。

秋夜對月

庾公樓上景偏饒。誰識幽人詩思焦。萬里西風秋瑟瑟。一天明月夜寥寥。山河分影霜痕冷。桂瑤滴香露  
珠跳。料得年年三五興。好占清勝在今宵。

雨夜聽蟲

更殘點滴繞檐檻。澹夕青燈影滅明。一夜幽人夢難看。愁聞秋草暗蟲鳴。

秋夜聽砧

霜華冷處露華清。九月寒砧擣月明。此夜淒涼天似水。千聲喚起玉關情。

月下看雁

西風一夜不堪愁。空對長江瑟瑟秋。水澗天低月明處。數行新雁下蘆洲。

雜詩六首

香陽

美人出南國。清艷梅花姿。陽春未遽到。幽香世莫知。風餐仍雪虐。寒節空自持。偶有高士過。忽去復何  
之。溪水自瀟瀟。山雲故遲々。夜々松柏聲。月下勞相思。

妖艷薔薇花。接夏更吐覆。綠條籠烟濃。芳姿紅映肉。誰知葉底刺。可窺不可觸。桃李競春園。憮折從流  
俗。君子意自遠。風裏憶清淑。月明彼南山。白雲滿香谷。

搖落庭樹葉。秋心寄籬菊。艷々幽香浮。澹々玉靈宿。雪花助我美。霜氣何森肅。蕭條寒月光。空照華女  
哭。松柏縱同調。回顧奈影獨。抱琴聊徘徊。掬淚難爲曲。

孤蘭秀雜草。幽芳獨自持。誰人欲行摘。臨風有餘思。節物一何促。得無搖落悲。秋氣自西來。涼風引霜  
吹。未惜吾鬢白。轉憐彼姿萎。日暮獨徒倚。予懷殊未涯。

澹々玉露美。草間疑星羅。中宵立月下。對爾道心多。江海何渺々。山嶽何峨々。爾生何獨微。微露寄寒  
步。孤清向天地。一命任風過。朝晡且莫憾。尙優混泥沙。

微々草間蟲。苦吟天地心。歌枕得秋意。不須床下尋。燈穗伴人落。歲華共愁深。聊將水魂凝。託夢寄山  
岑。風露湛草木。列宿光相臨。浩々萬象涵。悠々太虛參。

記夢

文苑

缺月荒涼照破屋。寒蟬聲絕庭木肅。腥風一陣若有人。壁間鬼立忽吹燭。若遠若近影欲無。側身含睇倚蘿幄。吾有牀頭奪命龍。鬼兮休侮窮途哭。叱咤電閃怪血飛。群妖驚叫響幽谷。蹶起推牖無所見。星河西落夜寥邈。不知此夢吉耶凶。徑將往問君平卜。

十月廿三日扉上清音亭清集此日曾者岡鹿門村上函峰浦井蓉湖北方心泉木蘇岐山諸先三十餘人吾亦與焉酒間率賦。

飛樓半天俯城市。衆星一夕欄角逢。塵雨未妨雲外興。清筵却見紫氣濃。溪流澌々簷端響。松花紛紛々庄上封。靈嶽縹緲神搖曳。鳴鶴來往風笛中。酒醋落筆龍蛇走。雲烟勢勃紙上籠。坐上道人啓玉齒。傳語點檢白雲蹤。主客圍燈共青眼。一瓶菊花淡朦朧。高會猶未見燭跋。休說已傳夜半鐘。知君明發乘清輿。東湖一舸挹芙蓉。

送杉本天倪東上

清風明月金城秋。滿路紅葉送游子。游子此去將何之。馬上玉鞭笑東指。仰看天半芙蓉峰。一痕白雪紫雲裏。羨君超々鸞鶴蹤。嗟予落落燕雀伍。白日青天壯士悲。劍下彈別琴思苦。曾將青眼相將迎。談天論詩移日晷。世上小兒誇輕薄。誰得斯道真骨髓。東亞文憲久荒莽。要君警醒拂妖蠱。發揮河嶽英靈氣。此筆未可委泥土。屋梁落月餘獨夢。知君已渡龍頭水。關河千里催離情。孤吟空對風白美。

批評

本誌第十七號概評

(文中字傍に△△△を附したるは前評者よりの借用語)

紫 溟 漁 郎

吾人豈不致て批評眼の明ありと曰とん。これ名ハ批評に藉ると雖へども、其實一瞥の略評又過ぎず、唯前號を一瞥して我心よ浮べる節々を陳じ、そのまゝ、茲に鄙見を添え、我心の疑團を訴へ并せて大雅先輩の高教を仰ぎ我誤謬の蒙を啓迪せられんことを期するれみ。批評の定義、責任、影響に至ては本誌壇上の老將業に己に反復開陳し盡くされて餘蘊あるおし、吾人后輩漫りに黃吻を弄して寔々するを須みん。言ふ迄もかく批評ある者が、文學の製作に對し、一方に於て殆んど全く製作其自身の價值を定むると同時に又、他方に於て作者自身の價值をも左右すること少からず。從て其失敗の單ハ審美的の缺陷に止まらずして道德上の缺陷に流るゝを免れざるあり。去れば假令ひ作者と評者ハ多くは場合に於て同一ならざるにせよ。批評家は少くもかの品定せんとする文學ハ製作に向つて幾分の趣味と同情を有せざる可らず、否誠ニ趣味同情あるのみならずして、一指を此に染むる者あつざる可らず。吾人の狹識淺見あるはかて此蓄積餘裕ありといはん。これ吾人が前號の批評否一瞥を試むるおわたりて、兢兢心膽を寒ふし手足の措く所を知らざる所以なり。去れと思ふこと曰いぬハなぞ、世繼の翁めりすおはあかぬぞも、餘り腹のふくる、心地するもこのもまたことに非ざるべしと思へるまゝ、已むなく秃筆を驅る事とはしつれど。彼支那流の批評(?)は如く、強ひて意を傾け言を悉く、美辭譽詞を掲げ、はてハ散漫要領を失し、讀者作者をまだ去も評者自身をも併せて、五里霧中に迷徑せしむる如きと、吾人ハ全然取らざる所なる



と同時に。現代の評家が名を策勵鼓舞に托して、極力瑕を打ち疵を攻めて酷薄と究り先、遂に文學上何等の貢獻をも致さざるは、仮令ひ一種時世の反動あるにせよ、全く批評の實を得たりといふ可らず。此の如きと僕の又首肯し能はざる所なりとす。去れど批評の眞意義が寧ろ后者も存する事蔽隠可らず。蓋し批評の之を過酷と失せるも飽迄精宏ありざる可らず。眞實の極往々酷烈に失する者あざばか。吾人が今前號を云々するに當りて、后者に傾くの觀あるは勢又已むを得ざるに出でたればなり。吾人も寧ろ惡まれ子とあり、多小提撕憤悲の功を擧げ、併せて自己の疑團を釋き、博雅の高示に接し、我謬見を叱せざるを得ば何の幸榮か之を加へん。名を概評に藉ると雖へども敢て責任を逃がるゝ非ならず。いざさらば全幅の責任を瘡せざる雙肩は荷ひて前號を一瞥せむや。

## 論說欄

本欄が從來他欄特ニ文苑欄の、華麗絢爛あるに比して、頗る寥落の感なき能はざるは、深く本欄の爲め憾ととする所にして、又實に本誌の弱點などといはざる可はず。此點に關しては前評家山本君と感同ふすと雖へども、其原因の考察斷定に至ては君と相反馳する所あるを悲む者なり。君は曰ふ「此一ハ學生未だ専門的の學理を蘊蓄なきと、他と教師諸君乃多數が、本誌に對すること餘り冷淡なり」とに由るものあるべし」と言誠に一端の理を述べずとするも、未だ以て本欄落莫の眞因を扶摘し。善後の光明を與へたる者といふ可はず。君の言の如く我同窓の多數が一般に専門學理の蘊蓄なきは勿論あるも。吾人は又強ひて是等専門學理考索の餘瀝即所謂學術的論文——彫鏤の如何を論ぜず——を渴望する者非はず。本誌の所期蓋又此一面には止まざるべし。吾人は寧ろ慷慨の文字、熱誠の涓滴、能く時弊を穿ちて滿校の耳目を風動し、彼等を去て斐然として畏れ、翻然猛省する所ありしむる如き有爲の論文を歡迎せんことを欲する者あり。現代學生の風潮は如何。道義の盛衰は如何。吾人が社會に貢獻すべき大任は如何。吾人七百の同胞英氣鬪なるや否や。辰章校は能く醇良なる校風の下に活動せるや否や。這般の問題を提へ同胞多血の青衫能くその炎々たる赤心を吐露して、勵聲疾呼狂瀾を未倒し禦がんとする者あらば。當り本誌の所期に協ひて本欄の異采を發せのみならず、吾人を利するものと尠少ありとせんや。往年の第一高校校友會誌が光炎萬丈天下能く當たる者なしと稱せし所以の者、主として此一片磨すべからざる英勵風發の大活氣の全誌面に磅礴飛躍したるに由らずんばあらず。我同胞幸に此間の消息を玩味し給はば、思半ばに過ぐる者あらん。又本誌の所謂學生の學術的論文は於て、從來歐文の趣味を帯べる者即ち歐文の論文、翻譯、批評、解題等の絶無稀有な状態なるに至ては本誌の爲先學生諸君の爲先、誠にお長大息すべき者あり。次に前批評者の教師諸君乃冷淡云々に向ふては吾人絶對的反對の意見を有せる者。教官諸君の論文可く即ち可。吾人は敢て其高教に接するを拒む者に非ずと雖へども、獨り本誌が教官諸君の論文に依て填充せられ、依て以て本誌を輕重するゝが如き吾人の實は忍ぶ能はざる所。否又何乃面目ありてか他と對峙して頭角を抜くを得ん。吾人は切に諸君を望む。希くは勵精一番滿腔鬱勃乃虹霓を吞吐して、光采を發揮し。自ら奮つて、人に依らず。教官諸君は待ち其勞を煩はすこと毎號一二編位止まるに至らんことを。

天才論……………大島教授、

先づ Talent と Genus との區別を論じ、韓圖の言を藉て天才の何たるを論斷す。次回を待ち更ニシヨペンハウルの言に依て天才の説明を與ふべしにて筆を擱かれた也。所謂達意の論、文理井然一糸亂れず、讀者をして容易に天才の概念を得せしむるに足る。これ一は問題の平凡にして旁引の單純あるに由るべしと雖も、吾人の實に先生の高教に向ふて多謝せざる可ざる也。去るに吾人の不肖なる此明教に對して一點の疑なき能ざる者あり。吾人は固より彼 Genus が殆んど絶對的の資質即ち所謂先天的を曰ふ可き者に屬し、到底他の模倣を許さざるべきならず平凡の輩が如何に勵苦するとも Genus の位置に達し得べし者非ざる事を信じ來りしに、今や先生の論に依て益々其然る所以を確かたぬ。然るに先生は本論の劈頭に於て「人各能あるに非ざる、勉めて達能者之を才と曰ひ、不能者之を不才と曰ふ。才は天に與ふる所、學んで得べきに非ざる、勉めて達すべきは非ず。云々」と論破せられたるは、吾人の全く解釋に苦しむ所。若し先生の言の如くなるんには、心意の作用何者の一として天より享けて絶對的なきざる所あらん。從て Talent も絶對的あり Genus も亦絶對的なきとの Conclusion と容易に抽出し得たるべし。斯の如くんば Genus の特質と Genus と Talent の間差夫那邊に存する。されば吾人の疑なき能ざる所以ありとす。次ぎは先生はカントが美術界に於ける、大才小才の差別を、性質上の差別に歸せざる、學術界の偉人に、單に量に於て凡庸と異なるものとし、依て以て學術界に於ける天才を否定せしこと。換言すれば彼は天才を技術界に限り、天才の技術、特に美術に法則を與ふるの才を以て科學若くは哲學

界には天才あるべからざるを主張せしことをば。極力反駁せられたるに誠に至當の論斷吾人の佩服して敢て些の異義を挾さむべし所に非ざるも。先生が本論の大立物カントを目して學界の大天才と稱されたるは、吾人が其意を解するに苦しむ所、特に本論の所謂天才の定義は依て彼の天才を疑ふを禁ずる能ざる者あり。彼の材原事業の果して本論の所謂天才を以て律とべし者あるか。果して后人は模倣し企及し能はざる所なるか。吾人は敢て彼カント希世の曠才を否定し、學界の大勳を貶する者に非ざる。吾人は彼れが獨斷法を棄て批判法を取り、先づ認識の經驗を基くや否やを釋ね、能く近世哲學は二大潮を統一して近世哲學をして此の一生面を開のしめざるを回想すると同時に。彼が八旬生涯の歴史は、精勵慘怛誠に刻苦の跡をもて滿されざるを忘る能はざるなり。畢竟彼の眼識學材の單に研鑽の結果、彼の事業又必ず超然不易他人の模倣と企及とを拒否する程の者に非ざるなり。曰ふ迄もなく彼韓圖の學は所謂批評的折衷的哲學に過ぎず。即ち從來存在せる反對の諸説を取り來りて、兩々相對照して以て之を折衷したる者にして、彼ベークン、デカルトの二大泉源より發し來れる潮流は、滔々歐洲の學界を横溢し、末派愈々多くて、竟に朝宗歸一する所を知らざるの反動よりして彼を生み出せる者と曰ふべく從て彼の哲學は畢竟次の三種の折衷に過ぎざる也。(一)知識の實體に關してはライブニッツ唱へたる獨斷説と、ヒューム唱へたる懷疑説とを折衷す。(二)知識の起原に關しては、ロックの經驗説とライブニッツの合理的とを折衷し。(三)心外實體の實在に關しては、デカルト、ベルクリーの唯心論とリード諸氏の實在論を折衷せり。カントの有名なる著書、純理批判とは是れ即彼の哲學にして又は一編れ方法論は外さ

ず。カントの哲學の其包含する所多分故に、之を統一せる又難し。乃ちカントの苦心も到底を  
 の哲學をして永久に持續せしむに足らず。果然、彼の死後に至りて、哲學界は又々亂れて麻の如く  
 なるを免る能はざりき。斯の如き彼を果て萬世に超然として不易の眞理を唱へ出でたる、孔子、  
 釋迦、ソクラテイス、アリストートルスと比肩して千載に照赫し得べきや。仮令ひ彼は非常に  
 快腦を有し、非常の堅忍ある氣力を有したるも、彼は到底本論の所謂他人が企及摸倣し能はざ  
 る底の天才を有せしと信ず可らざるなり。もし彼を以て曠世の大天才と稱し得べきならば、天才  
 は左程高價の者に非らず。又古今の遠き東西の廣るき其類少うらざるべく、天才を求むることも  
 容易に業あるべし。要するは彼と東洋流に言へば亞聖以下賢者に列に立つべき乎、非乎。斯く放  
 言し來れば彼にして彼の論あるは又別に恠しむ可はず。従て本論にも多少影響する所あるべし  
 と信ず。敢て先生の高教を仰かんことを切望の至り可堪へざるなり。淺識不肖の身を顧みず喋々  
 漫りに冗言を陳じて、古賢を非議し、先生を瀆す罪死も亦何ぞ及ばん。先生吾人をすてず、吾  
 人を憐み、大叱を垂きて此蒙を啓き結ばし吾人の幸榮何者か之を加へん。吾人の先きに蒼顏淵然の  
 一箇有力ある心理學者西田先生を失ふと雖も憾也。今又此學殖深遠ある先生を得たり。誠は以て  
 吾人れ意を強勵する者あり。吾人又何を憂へん。吾人の唯僕指して次號を待ち、先生の高論に  
 接せんことを樂むのみ。

高橋君の……辰章校風の現在及過去を述べて將來を新來諸君に望む。

慷慨の文字、能く辰章校の徹實を貫穿する一篇警鐘は聲。吾人之此種の論文が將來續々本誌に現  
 われ來りて、醇良なる北辰校風を發揚するに至らんことを切望して止まざるなり。人若し君の論  
 を取りて直に龍頭蛇尾結末不振の訴を起し、若くは初光徒に壯言大語しるるも拘らず。幽靈立  
 消の姿となり、畢ひに何等の結論要領を提供せざるを以て君を責むる者あらば、吾人は一言君の  
 爲めに雪冤の勞を取るを敢てせざ。蓋し此間多少の事情裡面に存するを耳にしればあり。吾人  
 乃暗劣尙且つ今日青年元氣不振と、教育の不振は向處て管見なればあらず。水清ければ大魚  
 棲まず。規律は人材を養成所以れ道に非らず。現今の教育が先づ規律を以て青年に臨むは勢萬々  
 己む可らざる者ありと雖へども、決して教育は眞髓を得たる者とは曰ふ可らず。規律は畢竟人材  
 を平凡ならしめ、平均ある人物を作くり、卓越の英志を伸ぶる自由を失はしむ。吾人は是に於て  
 端なく故新島中村福澤諸先生を追想するの至情禁ず可らざるなり。諸先生の熱誠を注いで人に教  
 へ、萬目亦之を集まり其一言一行を私淑したる者、是を以て新島先生ありて同志社の士氣振ひ、  
 中村博士ありて同人社盛んに、福澤翁ありて慶應義塾俊材を出せしを知らば士氣を振ひ、青年  
 教ゆる所以の道辯を費さずして明ある者あらん。もし丹心を人の腹中に布た、精神的に人お教  
 ゆる大教育家起つあらば、何爲れぞ彼忌むべし區々の規律を要せんや。今日の精神的大教育者を  
 渴望する誠に大旱の雲霓も雷あらずあるあり。オット僕と今批評をもの一つあることを忘れた  
 り。君れ此論美文に有らざれば固より修辭上より彼是嚴密の注文を爲すべきにあらねど、兎に角  
 善く言へば一氣呵成、悪く曰つば鍛鍊を欠くの結果文辭章句れ上いかゞした所も少のらざれど。  
 よの餘り贅せざるべし

潮來の……ラ、フエイト。

先に埋木翁の契沖阿蘭利以來、本欄之落莫否空虛の恨涙又咽びつゝありしに、今や又潮來君のラ、フエイトに依て光采を放つに至りしは、誠本欄の爲に祝せざるを得ざるあり。潮來君は昔も聞えし往年東都文壇の良將、その快筆もて、この快男子を描く、行文いかで快あらざるを得べき。本號に於ては先づラ氏の系統より説き起し、其卓越の資性を叙し、孤劔に杖たて米洲獨立の快事を援け、萬辛を嘗先盡して、遂に回天の偉勳を奏し、六國の相印あつぬ凱歌の錦衣を纏ひて、歌吹湧くが如に巴里滿城の士女を迎へられ。笑て古園の山河に俯仰し。旺ある威望を荷ふて己頃の國政に參し。一百七十有五年にして再び佛國議會を起せる、氏が初期歴史の半面を以て筆を擱せられたる。吾人はラ氏が將來如何にして佛國革命の風雲を處するかを次號に待ち、併せて彼の眞面目を窺ひ、彼が畢生の事業を知らんことを欲す。吾人今此文を誦し些の疑なき能はざるものあり、即ち潮來君は佛國が米洲の獨立戰爭を助けたる事情を以て、單に佛人れ義俠心と愛自由平等念の二者に歸して更々に其原因を他に求めせざりしこと是あり。吾人を以て見れば以上は條件たる寧ろ第二原因に屬し。主動根本の原因とも云ふべきと、佛人が英國に對する敵愾心と、復讐根性の深きとを存せざんばならず。彼佛英二國が呼ば、答へんドバーは小海峽を隔て、國せし以來既に殆と一千星霜の久しき、Two Nations として其雄を争ひ來りしに。當時一千七百年以往は互に西班牙位相續戰爭、埃國皇統繼承問題、若くは七年戰爭等の歐洲大爭亂に加はり。干戈を以て相

見ぬ、兩國の嫉視攘奪其烈を極めたり。然るに佛國是より荐りに利あらず。遂に之を内みえて其海軍滅裂に歸し、英國獨り海上權を握りて世界に跋扈し。之を外にしては英兵の爲めに、東印度の富を失ひ、西北米の領土を呑噬せられ。力盡き勢窮まり數奇燃ゆるが如き恨を飲むお反して英の獨り覇を天下に稱して、威を四方に信ぶるあり。果敢の佛人いりてか袖手黙過すべき。心竊に報復を計りつゝありしに、時偶々北米ある英國殖民地が英政の非を怒りて、民心の激昂甚した者あるを見て。佛人以爲らる奇貨措くべきと。即之に乗じて北米の民心を煽動去て以て獨立の決心を固めしめ。江戸に警を京都に取らんとせし事又蔽ふ可らざるなり。斯ら如くして起りたる獨立戰爭は對し佛人 能く傍觀の地に立ち得る者あらんや。況んや北米名士の荐りに佛は驕心を買ひ、雄辯なる遣佛大使フランクリンの舌を枯らして佛の民心を鼓舞し、切に救援を求むる者あるに於てをや。吾人は佛人の米國を助けたる主因實に此點ありと信ず。ラ氏の劔を提げ米洲の山河に投じざる者誠に謂ふしとせんや。敢て高批を仰ぐ。

雜錄欄

此欄は本誌中從來文苑に次で精采を發ち來りしが。本號特其旺盛なるを見る。浦井恒堂先生の……讀史雜感。

この篇本號中尤も有益に、尤も有趣ある文。快妙切實の事を記するに、先生獨得なる快妙達意の筆致を以てせられ。文平簡おして情長く。些る閑辭虛章なく。先生摯實の風采と精鍊の眼識躍々紙上に飛動する者ありて。吾人の多言ハ誠先生を累すに過ぎざるなり。本篇收むる所の品題

をべて十有一。其中「露帝の稱號デア」、「三國同盟」、「奇運」、「歴史的知識の必要」の諸目れ如  
死は殊に吾人必要の知識を教へ、併せて先生眼識の一般を窺ふに足る。是名の雑談ありと雖へ  
ども其實悉く深淵なる先生れ學殖より溢露せる者。其吾人に教へ、吾人を啓く所の者。他の千言  
萬縷豈に能く之を加ふるを得んや。吾人之每號先生の有益なる高示に接すること、感謝の情先  
づ胸お迫まり、未だ嘗て先生の本誌上と於ける大勳を思念せざんばあらず。實に本誌と先生に依  
て光榮を發ち、先生に依て重きを爲し、本誌の今日ある一に先生れ賜なりと曰ふも亦諛言に非  
ざるあり先生の勳績永く本誌と朽つる事なく、又決して忘る可くざるなり。不知全國各高等學校  
中雜誌部長として先生の如く其職に尽瘁せらるゝ者夫いづくよりある。吾人の先生れ精苦に對し  
ても誠に懶眠を貪りて本誌に尽くさざるを得ざる者あり。徳ある者は言あり。誠ある者は其澤極  
まる所あり。本誌は現はるゝ先生の一斑は先生の全豹を推すに余ありと曰ぬべし。吾人は唯先生  
の自愛自重又永々本誌を提撕せられん事至囑の情に堪はざるなり。

市村教授の……一日半の近郊見聞記。

此篇未だ先生を窺ふに足らずと雖へども。吾人之之に依て益々博物學の趣味あり、必要あるを認  
めぬ。吾人は此に深く先生れ懇切なる明教を謝さんぞす。兎に角近來本誌に於て科學的分子の漸  
く加わり來て、殊に本號の如く燦爛を極むるに至りしは、何乃悦か之に若かん。尙理化學的消息  
の續々現出するに至らんこと望蜀れ情に堪はざるあり。諸君よして本誌ハ獨り文學を談すべき者  
に非ざるを解し給は幸甚。

皓嶽坊の……白山のいへつと

門々繁苛に陥り彫琢に過ぐるの弊ありあれど。自然を寫つすに叙事精細能く其微を穿ち、而かも語  
句は麗に注意し。一般に章法の秩然たるは誠に悦ぶべし。吾人此篇を推して本號中の白眉中に置  
くを憚らざるべし。是等をや文學理學の隔壁を排して其調和を計ると曰ふべく。又此種の事を記  
するに此種の文体は尤も妥當を得たる者と信ず。文の妙所を曰へば四十二頁ある「對岸一對地文  
學上の階段」……斯くも種々の道草を採るよとて「そたりの一頁と、四十三頁の前部と結末  
の邊にあるべく、殊更最初のケ所ハ輒ち亦坊が苦心れ跡と見るべし。文の疵所を汗せば、「無頓  
着の様子」、「正直正銘は肉脚」、「苦茶を無茶に呑みて」なぞれ駄洒落の俗語を用ひて、文体れ均  
一を破られたるあり。是等の句とて面白かざるに非ざるも、彼文体に点綴せられてはいか  
いはしき限あり。坊よ以往努力奮勵、ラスキンラスキンの堂に上り、矧川の奥に達し、皓嶽坊の名をまて  
皓嶽と共に高くらむも又快なる哉。吾人の刮目して次號の皓嶽坊を迎へん。

島助手の……醫王山地方植物採集記事。

君が熱心なる勞と、其學の忠實なるを稱する外。別にいぬべし事とあり。  
垂東仙史の……先師松田先生れ靈を祭る。

文簡にして能く先生の一生を悉くす。這般れ文其勢又止むべからざる者あらんかきど、是誠に純  
乎なる漢文直譯体の純ある者、吾人の寧ろ漢文として此文を接せざりて悲む。君の手腕を以て  
漢文は屬しなば、文苑欄上必ず一道れ光輝を放つに至りし者あらんぞ、惜哉。文中二三措辭頗る穩

當を欠く者あり。特に結尾の「蒼苔悽愴として夫れ來まうけよ」の如きに至ては、何人だか幽靈がア一怨めしきでも曰はて出さうの光景なり。君以て如何となす。

文苑欄

此欄中歌俳は二評は學兄杉の下蔭君の筆にかゝる。此二点丈は紫溟が責任を脱るゝ所。否誠に瘦肩此重任に堪はざるなり。諸君幸ひ宥してよ。

某元來世の人のみだり筆に任せてよしやあしやと人のもれせし文歌さては發句かぞを批評す然るを日比誠よいましき事に思ひ居侍候もこれも研究乃一助として己を得ざるものとの由にて學乃道にいたり深き人々さへ常もこれせざるれどさ、傍觀のみ致居り勿論自のら進で此わざにたづさはらんかど、は夢も見侍らざりしに先日君に輕卒にも約し候てはいかでの今どかりてもごも有らんかのが心に快のふずは思ひ候ものうら左の如くに物一つ世の人皆のすたる忘評多罪の文字を書くさへ罪得らん心地しておろろしともれろろしうかん

紫溟兄

杉の下蔭生

花廼舍君の聽衣(これハ擣の字落ちたるもれと存せられ候は可なりに覺候歌の方こそなほ勝る心地致候每號必ず君の文一二相見え申候が常に歌よは劣るやに覺候併し甚く御熱心候へば御上達程思遣ふれて誠に心にくく覺申候尙字句に就て申候と高くとかすのと對したるは如何ハしく覺候

高くといへど低くと對しうすかと受候へばはるくとり申度候然れども高くとかすのと對せられぬ譯には御坐なく候へ共聊穩當なふざる様覺候故に斯く申迄は御坐候又さ迄で詳しき事ハ不用と御存候へ共御參考迄に申述候以下も其御心にて御覽被下べく候さそふよやの下わらんの三字あらまほしく略せられしは作者の巧の意とい存候候共ありし方中々にをかしく感申候わられ里の女かどあるは何にや物足らぬ心地す版に誤さどよてもあるよや後のわはれの三字亦くも哉に候むざんよ至てハ實よむざんに覺申候

福井喜彦君は「七月某日大堰川にて云々」凡て長歌にて反歌あふば必ず題ハ并短歌と書く例は候に無く落ちたるもれと覺候長歌短歌共にをかしく候君も斯道專攻者故誠ハ調もあがり考もよかしく候が時々新体詩を譯せられ候為共おれの方には餘り感申さず候何れありとも一方ハ全力を注がれ候は、其こそ誠に恐るべきものと覺候併し字句に就て愚見を申候ハ、そよきてとあるは如何やよきは多く草に用ひ又柳などにも申松の如死には未だ例を見ず候に況して瀧瀬瀨の音にのよへばと有るかたよは益々をかしかふず候此もよろしとはなけれどもさやきてとして如何と覺候なつとも思はずのもの字亦くも哉と覺候いさぎよき心しれり解あがさし反歌にてはらひけむハ、かゝるは如何跡、えてとあるのふにハ勿論今は奇き事なるべく又尤も鶉舟ハ普通夜のものなれば斯くと想ひ出して讀まきたるなふん扱此之畫の景なれば夜のかかり奇と讀合したるハ不穩當と存候同じく畫の物にてありたしされば敢てよまどにわあふねと大堰川今かうぶねれ跡たねてとなり

では如何「海上月」といふ題にて「先づも云し如く長歌も古今集千載集等に至りては此題乃如き書様とはなりにけりされば當時の雜誌等にも斯る様のもまゝ見ゆ免れど某の尙萬葉風の書きさま望むになん扱て此長歌もをうまう候がたゞ少く長すぎし如く覺候一二誤あれども活字の誤植あるは明に候へば略し捨てされどよだひとのよしとよく見し秋の夜は何に依て云はれし覺申さず候反歌の難きいとめてたゞ候尙福井君に金玉は作多かふんと存候が益文苑欄に光采を添られん事兄より御勸有之様願はしく存候

短歌の秋の千草の一時に咲出たふん心地して誠にをかしくいづれをとときて折らん様も無御坐候されど聊る不審の有之候は山田清定君の外か濱云々の歌に候詞書の文しげる云々と物まけるの何かの誤植あらんもうたふちをあり安方の浦は候扱うたは如何なる鳥が判然せず夫木抄定家卿は「陸奥は幸都は濱なる呼子鳥鳴る聲のうさふやすか」と云歌を歌出し、處謠曲「うさふ」中にありこれに大和田建樹氏左の注をを入れ候

拾葉抄「或説に云うたふといふ鳥の名に非ず雁の子を親の呼ぶ聲を云はれ其故に雁は砂の中に巢を作し子を産み置て我さへ其所を覺ざる程に隠し置くは獵師の捜さん事を恐るゝかりのくて親鳥餌を與へんとて空より其子を呼ぶ聲人乃歌うたは似たれば雁をばうたふと名づけたりやすうさといふ巢の中に子を養はれやすか居侍ると云事にてやとらうさといふ也」といへり親れ子と呼ぶと云よりて呼子鳥とはつけたりうたふと呼ぶ鳥と同物ある意にはあふず又一説と善知鳥とも書れて異名「うな鳥」と云とも云へり是も同抄に出たり

さればうたふとは雁の如くにはあれども又左の如く議も有之候

新撰歌枕「そこの濱と云ふ處にうさふやとらうさといふ鳥の侍るが此濱の砂子の中へ隠して子を生まみかけるを獵師母のうさふが真似てうたふ」と呼ばばやすかたとして這ひ出ると取るやと申其時母鳥來りあなたこきたへ付さあぞ鳴也其涙の血の濃き紅あるが雨の如く降也或歌に子を思ふ涙の雨の血にみればいかかさものはうたふやとらうさといふより取り人此血を掛くりれば損お侍る故に血を掛おとして蓑笠を着る也といへり歌に子をねも涙の雨の蓑の上にくゝるも悲しやすかたの鳥とよめり

以上は如くみてうさふの如何なる鳥あるのは昔に某が知らざるのみならず世の人皆を定めがてにすたるものに候安方の浦といふ名も未だ聞はず其一代集中にも讀みこみ歌あき様お候されど此鳥の事より斯る名の浦も出来りやも計難く此二者は山田君の實地目撃せられし事あれば偏に御教示を願度於事に候越のあゝ雪と如何なる意の題なるか解し難く候三吉野の歌之誠も巧に取あしめる歌にて流石に山田君の熟練の程見られ候されど詞書は金崎神社にて此感あまゝの如何に難解浪枕の歌のめさむればは如何にまゝ思へども師とする君と慕ふ歌の時代との異なるに隨て用語も異なるは勿論なれば山田君より見ればこれにてよろしきなるべし花廼舎正義君の歌の別に難さなき處も見出申さずいづれもをのしく候か中に案山子と十日菊花の二首勝れてめでさく覺候兩兄共惜まらずに玉詠を示されんこと斯學の爲に願處は御坐候兄より可然御願申候

松下雅雄君の熱心には殆んど感入候さすど手際に至りては首肯すると能はざる處多く候先づ花の

下伏が何の意か或は蓮月尼夜<sup>おほほほ</sup>の歌の意かとも思ひ候も意味不通聞かまほしく候尙  
 松下君に質問致度と「たか機」秋の草等の四句は候此は何体の意かこれ君が創められ一種の新  
 体詩う其にてもをかりかゝらず句に至て巧の處も相見之候愈共此にて一首づゝかと思ひ候へば甚だ  
 物足らず候憶測とるに君は今様の考ならん然れども更に其体を備ず予の寧ろ此を長き新体詩中の一  
 句と見る方可ふんと思候前々號もりの君が句皆如斯く感候國文學專攻者たる君に願ふ處の字句  
 の巧なるよりは寧ろ調の得たるに候巧なる句ハ門外漢にても時々吐き候も眞其体固有の調ハ專  
 門者に非れば容易す得たるべきも此にて之無かるべくと存候今一層の御奮發あらん事願としく  
 候、櫻園主人の譯詩ハ原文を見る暇無之候へば今何とも評し難く候譯のみにてハ一通面白く候さ  
 れど主人ハ願處は譯詩より長歌を多く見せられん事に候即譯詩より長歌に於て主人ハ手腕も相見  
 ば隨て某等も面白く感申候然れども同時に發生時代は於ける新体詩を以て完全なる養育を得しめ  
 健全にして無缺而かも潔白ある壯丁とせしえられん事も勉められん事願としく候

一望君の「零余子集」の序は一讀二讀遂に三讀致候へ共解する能とず尤も零余子の解よと既に一望  
 君と某とは異なるらく候某ハ普通の訓ニ隨ひぬかど(むかどとも云轉也)と讀みしモ序中嵐の落  
 朝○ち○る○零○余○子○を○わ○れ○み○と○わ○れ○ば○他○物○の○様○も○思○え○れ○候○ぬ○の○は○嵐○の○朝○に○必○し○も○落○る○も○の○に○て○は  
 御坐なく寧ろ暖ある日中に落る様に見受候且俣ぬかどならばさかからに失せんことをとて  
 あるも叶はず候朽ちんと何ぞか申度く候故に此序は終に某の力には及はず候他人に御命  
 被下度候俳壇ハ秋竹君去りも後如何にあり行くかと聊か案ト居候ひしも益々熾なる有様なるハ實

喜ばしく候殊に一望君の進歩には一驚を喫候句はいつれをかしのらぬ無之候が中ハ木魂君の  
 「山に見くへる」と「歸路」との二句笹舟君の「夕鴉」無禪君は「秋風や」一望君の「秋風や」一夜長」と二日  
 参や」「野雪隱」の四句勝れてをかしく覺候本校俳壇には尙此外比較的老将球江續はて豊泉傘嶺鐵  
 骨等の諸將あり諸將にして幸に一臂振ひ給ハ俳壇の益盛大に赴くや期して待つべく優ハ五高俳  
 壇ハ牛耳を取り得べくと存せし候以上

村上教授の……能登紀行。

文氣雄渾、詞句洗鍊一辭も苟もせざる所、又以て先生の深淵を窺ふに足る。能北八十里程の怪景  
 仙域誠に咫尺に髣髴として、飛躍の狀態を可らざる者あり。圓熟妙手の老手に非らばんば曷んぞ  
 能く斯の如くなるを得んや。吾人の多言の徒らよ老先生を瀆きに過ぎざるなり。古來地方山川の  
 美多く文人騷客の唱和に依て後始て世に顯れる。蓋し能與秀靈の觀光此文に依て漸く天下に風  
 動するに至る者あらん。山川の靈出て以て安んじて可なり。終りに一言すべきは、印刷校正の疎漏  
 誤植多くして、此名什を缺損せしと吾人が深く憾とする所あり。

浦井講師は……人狐説。  
 事實既で不怪奇文又いで人を悦ばざるの理あらん。吾人之對して虞初新誌を讀むの感、  
 んばあらず。文己に刀水翁の定評あり吾人何爲れぞ深く賛するをなさん。

詩壇



石田黒子軒……………詠詩百絶。

敦盛吹笛圖は五首中の佳作。蒼丞相稍誦すべし。他の三首すべてこれ凡調何等の奇趣妙味あり。勿論酷評を下さんとす。如何様にも曰ひ得べからんも、僕ハ敢てせし。他亦し君に向ひて全きを責むるは其所ありざればあり。是等の詠史諸題ハ孰をも曾て一古人に依て詠唱せられざるはなく、此中の或者の如きは、殆んど反覆數唱一盡くされた。左れば是等の品題ハ向ひ別に新趣味を添え、新觀察を施すに非ざらんば、其陳套見るに堪えざるに至りぬべし。去れど敢て新奇と銜らへるとに非ざるあり。次に全章の結構趣味を離き、成句の上と吟味するに。日本武尊の轉句、憎他海上龍神惡、險澁極りあり。第二首の結句も随分覺束なげあり。第三首の結句、賦新詩の事實吾人不敏にして未だ書史に見聞せざるを悲む。果して是何の謂ぞ敢て問ぬ。第四首則蒼丞相の起句、妖氛の二字甚だ穩かからず此字ハ決して斯る場合に用ゆべし者に非ざると信ず。又結句は轉に對して宛も竹に木と接ぎたるさまにて可笑しげなり。去るにて月明に秋氣をさのする意か。その頗る牽強と曰はざる可らず。第五首の承句散遍とハ不都合否究し果てざる文字に非ざらずや。

鈴木牧馬……………丁酉九月辭東都偶賦。

起句亂五更の三字頗る險澁。轉句何ぞか面白かふねと意義に於て差支あり。此四高を卒業せしとてまさか錦衣ももあるまじ。失禮ながら君の詩尙稚氣満々なり。

秋月庵……………憶亡友。

先づ誦するに足る者。斷絃一句全章を振ひ、頗る力有り。去れど是等ハ調想は此題に普通なるべき事として、左まで驚くに足らざるなり。絶句に被風摧の文字を用ゐらるゝと餘り好まざること非ざらず。次ハ轉の一世高姿ハ字穩かからず。讀者或ハ誤て一代英姿と解する者も無きに非らざるべし。蓋し君の意ハ生前英姿あるべし。一世高姿とは一代の雄を指す義あり、輕しく用ゆ可きにあらず。

北村香陽……………古詩四篇。

香陽の詩固よ以上諸氏の作とは日をも同ふして語る可なりにあらず。少くも君が北辰詩壇の牛耳を取るは吾人の公言するに憚らざる所。去れど吾人は香陽の技量に向ふて是より以上ハ贅辭を興ふる能ざる者あり。今香陽の古詩四長詩篇を對して、以上諸氏の作に於けるが如く、一辭一句の末まで精密ハ批評ハ渡りなば日暮れ紙盡くるも終るべきに非ざらず。香陽亦た吾人の喋々を聞くを欲せざるべく、否誠ハ吾人の力能く可ざる者あり。去れば茲には唯大体の鄙見を陳ずるお止むべし。四首中、出郷吟と寄三浦先生の二篇と秀作なるべく、憶岐山先生在能州ハ失敗ハ作なるべし。今后者失敗の作に就て一言せんに先題ハ憶岐山在能州ハ憶れ字極えて妥當を欠けり。是等ハ宜しく寄懷云々とあるべし所あり。詩中一夜太卜傳の一句折角の箇所ながら前後何等の響をも惹起す能はずと茲ハ一大頓挫を來たしぬ。岐山を以て嚴子陵に比せられたるハ、頗る配合を失ひたる者にして異稱の感じせらるゝあり、頓挫の原因全くこゝに存すと曰ふべし。次に所以望彼美も随分恠ましく思はるゝなり。香陽の詩一般に辭句の絢爛見るべし者あるハ拘らず。全篇の

關鍵骨子曖昧纖弱にして振はざるのこれ香陽の未だしき所以。若し香陽にして大に研精鍛鍊努力を加ふる者ならば、一道の光明を認むる事至難の業よあらざるべし。彼古人の大作詩篇を讀んで、容易に其一辭一句の解釋を下す能はざるを、全篇に脈絡貫通して而かも辭句の妙律々意深く味遠く、到底言説に盡し難きに依る者にして、自ら后世詩人と其趣を異とする者あり。

## 批評欄

前評者山本君、暢達の筆致、快敏の眼識もて滔々評臨去つれ、簡明にして能く其肯綮にあたり。大体に於て殆んど全く吾人の意を得たるの悦ぶべき。唯其中二三の點に於て君と意見を異にせしハ吾人の悲む所なりとす。即ち第一論説欄、第二批評欄、第三附録欄是なり。論説欄に關してハ吾人先さお略愚見を吐露しざれば今又反復せざるべし。第二批評欄に於て君は河滄浪乃批評乃定義「文學的美術的製作に對しての善惡美醜の判斷」を駁して、批評は決して善惡乃判斷を司する者非ざらずと否定せられたるの少く其意を了するに苦しむ所。吾人は見を以て之を見るに河滄浪の所謂善惡との文學製作其もの性質、換言すれば製作其者の着目、主旨の善惡、潔汚、正邪、有功有毒を稱する者あるべし。果て斯くの如くあらんには余ハ徹頭滄浪と異みせんとなす。蓋し山本君ハ善惡の意義を誤解せられたるには非らざるが。次に又滄浪が廣川郎の言を駁して、理想と現實と一致せざるものなりと言へるをば、君又之を駁して理想と現實と一致すべしと論斷されたるハ吾人が全然君と相背馳する所ありとす。現實ハ人世の連續あり、理想と人性の爵位あり。若し有限の現實と無限の理想を包容し得べくんば、終世萬古現實と理想の衝突のなかる

べく、從て此浮世は樂天人種の占有となり、もはや極樂天國の必要あざるべし。吾人此問題に對してと多少の愚見もあれハ今はこれにて口を噤じ、他日閑暇あるを諸君に供して高批を仰ぎのみ。第三附録欄中君ハ播水不眠兩坊の「七國光り春の旅」に對しその初二頁の觀察よりして直ちに、この文体の共進會又見るに足らずやうお評し去つれて、一言此達筆能文の坊等に向ふて同情を表せられざりしハ、少くも憾とする所あり。勿論吾人と雖へども、此紀行の起首ハ余が其達筆の妙にまのせていこやなりが此の弊に陥へり。毫も修刪推敲を加へずして、痛く文体の整齊を欠りりと思ひ、感な死にあらざるも、此性しき關所を踰りて讀みもて行くは從ひ益々趣味の溢れ來りて頗る人意を動かすに足る者あり。少くも吾人は此健筆なる兩坊に向ふて一片の同情と贊辭を捧ぐるに踟躕する能はざる者あり。去つ乍ら山本君にして彼ヶ所に對し彼の言あるは固より至當れ事にして、よれを以て君を責むるは極めて酷あるを知る。吾人の唯多忙の際君として彼全文を讀ましむるの違なかりしを憾むると同時に、或事情の爲め彼紀行の再び本誌に出版せざるはと悲しむ者あり。

## 雜報欄

露子の吊中島金熊君は吾人一讀又再讀、悲風四に起るの風情ゆりき。杞憂、荆棘、糞土れ諸片の寧ろ雜報欄に入るの妥當を信ず。此外別に曰ふべしとあり、去れど本欄ハ誤植特に多く、其中紫溟郎の第二高校告白文の如きは尤も甚しきを見る。これ畢竟印刷若くは校正の疎漏と曰はんより寧ろ原稿蕪雜の結果あるべし。以來幸ひに沈慎留意此弊をがらんことを。終りハ一言すべき

ハ本欄ハ其名の示めすが如く雜報を旨とする者なれば。苟も學校の出來事なる以上の細大洩れなく此に網羅し尽し給へんことを。是又三祈れ情に堪えざるなり。本號と多少此点に於て欠如せるを免ざるべし。

附録欄

豊泉……………本翁横斷并西國順禮紀行。

君が瑰麗の筆を以て此壯遊を描け、多く吾人を樂しまし然たるハ深く謝する所なり。去れど忌憚かく言はしめば、君が此文體なる此種の事を記するには頗る不利なる者あまて、君が苦心の割合には讀者を感せしめ、妙味を擲せしむる事少なく、酷に曰へば往々倦怠を招き卷を釋てしむるの憂あるが上にも、事實上勢已むを得ざる者あるよりして、切角の文體といふはしき瑕疵を生ずるを免れざるあり。吾人は等紀行文に就て多少の意見あまては孰れ君が文の完結を待たて又た云々する所あるべし。

風柳庵主人……………温泉日誌。

圓熟の筆、渾成の文、一点稚氣の吻、險澁の跡を留れず。内容の波瀾を此舞零の日子を叙して、而かも能く此波瀾ある文字を成し、讀者をして恍然蕩平身うの境に臨み、その事を接するの感に酔ひ篇を終るを覺えざらしむ。君の妙手誠に敬服するに堪えたり。吾人は此篇を推して壓卷の高作とあすは憚らざるあり。文間に点綴せる俳句見るべき者甚だ多く、錦上管に研花を添えたるのみならず。直に鋭く寒景を精寫して、本文の關鍵を妙あらし然たるが上にも、文亦爲先大に振

へり。

兩州の萩咲き分つ徑かな、

車を下り側細道に桔梗折る、

空車蜻蛉幌よとまりもあゝ、

夕寒を我わび車夫の涼去がる、

醉へる君瓶の草花何とか見る、

乃如きは僅に初一頁に現れたる者なれど以て全篇を類推して君が風骨を想見するも足る。吾人の此点に於ても此篇を以て遠く豊泉紀行文れ上に置くんとする者あり。特に百四十一頁ある君が温泉にて逢ゆる七十三春秋閱しよる某老人乃悵恨談人生いと短かくしてはうなきをはあきを覺ゆると曰へるに對して述べよる感慨のわたりは、僕が再三四誦して而の一片乃妙趣去る能はざる所。君の確りに一種の人世觀を有する人。幸に努力自愛せよ。吾人は深く此篇に接したるを榮とする者なり。

吾人謫劣不肖の身を顧みず。山鳥の尾乃いと長々まき、あてごもあく放言を擅にし來りて、大雅先輩を瀆辱し罪殆んど謝するに辭を知らざるなり。あはれ暗夜の鐵砲を御見すてなを、一片は高叱是正を惜まねば吾人の幸甚何者の之お加えん、呵々。

雜報

新年辭

落花流水と歎せし舊歲は昨も暮れて。旭光照々と喜ぶ新年は今日に來りぬ。嗚呼昨果して嘆ずべきか。今日果して喜ぶべきか。松柏青々たり。河水滔々たり。而して我身亦異なる所を見ず。云ぬを止めよ。鮮光天下に滿座と。云ふと已先よ。往者い及ぶ可らずと雖。來者は則ち遺憾なからし先んこ。年々歳々日月を馳逐して。惴々焉。忙々焉。而して日出で日没し。年去り年來と。五十の悲歎と喜愉とは後は積。棺我を迎へて。青苔我を資ぬ。己ぬる哉於戲人生。是の故に古のを聖賢は。常に心を以て物外に超然とふし。迷雲排開して。真如に參。萬象を脱して。容與天地の玄化と往來す。天地亡びずむば我亦亡びず。落花流水は。花

の落るあり。水の流るゝなり。歲暮歲來り。歲比暮るゝなり。歳の來るなり。故に曰く。造物我に於て何かあらんと。屑々たる群小。行々として心を形の役となし。五十年終る無明の夢を脱する能はず。學に志す者。深く反省せずして可ならんや。新年は來れり。新年は始まれり。天を仰げば雲無心にして來去し。地に俯せば草空々を萌す。鳥日出て餌に向て飛び。日暮れて時を求めて還る。安今年の新しきと。舊きとを知らんや。嗚呼形と忘れよや。北辰會員諸君。心を樂めや。北辰會員諸君。忘形樂心。天地此に悠るるか。

雪景色

而して日出で日没し。年去り年來と。五十の悲歎と喜愉とは後は積。棺我を迎へて。青苔我を資ぬ。己ぬる哉於戲人生。是の故に古のを聖賢は。常に心を以て物外に超然とふし。迷雲排開して。真如に參。萬象を脱して。容與天地の玄化と往來す。天地亡びずむば我亦亡びず。落花流水は。花

墨田の雪。東山の雪と。ことごとくしくもてはやす物好は。粹とり通とかいふにうぶまし世界見ずなるべし。とづかよ蓮の朽ち残りの莖を埋めし白きもれに。さりとは宇宙の眞美の悟るべしやは。枕草紙よみほらん人。清女う一夜の勝を

争ひし古事の。をのしと思ひ玉ぬらんも。この雪國ならぬ故にこそと。笑ふ人のわりと知りまさずや。いで山岳を埋むる北國の雪げしき。及ばぬ筆に歌いむのち。雪の降ふんとする程の空げまきころいとくをかしけれ。さしてくるかふぬ凍れと見ゆる雲は。洩るゝくまなく打ち廣ぐり。をちあちの峯々。うそ綿ふまをこれたらん如くまで。雲れ行きかひひたと止まらず。大空苑が死せしが如く。折々きこゆる鳥の聲と。沈みながら。暗を縫ふ螢火の心地してすごし。風も吹死やみぬと見るまもなく。ちふほふ松杉の青葉も白たものまひ降る。鷺毛か。綿々。直ちにさゆると鷺毛にもあらず。うけて冷死の綿にもあらず。さていさどおもぬ中。漸々厳しく降り來り。松杉と白さあひより青たが見ゆる許り。はては小鳥の翼れ凍えやせむといふとし。仰げばうす墨引ける大空は。重なりく降り頻るにさびかよとかちがさく。あるはずぐにかち。或いまひ下り。或は斜に。或の横に。少あり。大けきあり。遠くを

見やれば。降るこそ、のみに非ざりなり。四方の山々もとや頂よま白みろ光。心がたにや。見るが中よ白され増さり行く様を。道行く人の。傘打ぬる。袖たたく。下駄うつ音の聞ゆる。早や道も行死なやむ計なるべし。實も松杉は全く白きに變り。只鳥のこまる毎も。雪のおちて。瞬く間青を顯はるゝ耳。隣り向の破きはてま小屋と。巧みによみされて。中々ふみやびおまめかしく。さたならりしも珠となり。見苦しかりし毛銀とある。雪の光りをおし包めば。はや日暮れぬ。窓よを洩るゝ灯火乍見やれば。夜光珠眞珠を數限りもかく輝き渡る日の光に打振りつらん如し。天地全く死して常世も行死らん如く。聲高く文を讀めば。我聲も我驚く。ねなんとする頃に二三尺余りありおけり。あなてれ朝乃ぬりなふんなど思ひ残してあん。童べのよるこびさるぐお夢おさるき。まづ窓おし開けば。造化の力こころ怪しく奇なき限なれ。日れ光たはとさすに。昨日ありし小屋のさき失せ。松杉

ハ。棟梁の材たるべき物の泣て泣て泪濁すべき  
 限かゞずや。され共無情の草木ハ之お對して又  
 無情あるべきの理あり。有情の人間を生垣とな  
 すに至りとは。さて悲歎に堪へぬ事共ならず  
 や。蓋一天の人に性を分佐や無差別平等からざ  
 るあし。生垣の杉の生垣にされず。十丈の材と  
 ある事の必とすべき。猶人の性れ欲を儘にあ  
 して俊英とあるべの必とすべきが如し。余輩  
 是よ於て常々生垣主義の萬般に擲聲えて眉双を  
 愁ふるを覺えざるを。兎角日本人は島國的根  
 性に魔魅せられ。生垣主義の痛弊ありと。大陸  
 漫遊歸來者の痛歎する所。乃余輩亦た大痛論し  
 て此生垣主義を痛破せざるを得ず。水清ければ  
 大魚住まず。木喬直なれば萬黨繁はず。大綱を確  
 保して小織を放任し。優遊閑々の中に化を致す  
 ハ。政治の大道なり。嗚呼生垣主義れ人よ。試よ  
 鬱々蒼々棟梁の材森立とる大山林に遊び。而  
 て后野人の生垣れ蠢々佗儕常に泣くが如たを眺  
 め。然して後に自個の心情を反省せよ。嗚嗟。

山も靈山かふぬばなく。見守るまに。心丹田  
 は澄みて天地萬象の玄化我と融解し。水瓶取り  
 出で、傾れば。かむばしき香りの心を洗ひ。無念  
 無想無我無一。飛びかふ鴈百舌。さてはからす  
 も。いづれか一念解脱の種なざるべき。嗚呼怪  
 しきかも奇しきかも。雪の神一ふびの穢土に  
 降まして。きこなきもみにくきも。直に光明  
 八射の權化とあり。心深く眺れば愈々明か。天  
 地の諸象の本体を認得て。煩惱即菩提。生死即  
 涅槃の樂境雲の如くに湧き起る。されば雪國の  
 男子ころ世に幸多き者かれや。冬としいるば。日  
 に。この良師に向ひ。我心と直し我思ひを正  
 して。無我の境に逍遙す。嗚呼雪や雪や。汝あ  
 ば我はづれをか師とし事へむ。 (河滄浪)

### 生 墻

世よ哀れあるは生垣れ杉とりあわれあるとかし。  
 伸むとすれば截られ。伸むとすれば截らる。歳  
 暮れて雪の降りける折柄とは云へ。儼然雪を映  
 じて縁滴るの慨なく。處々赤き枯葉の目に立

### 實彈射的

十一月十七日大學豫科第三年の演習射撃は、上  
 野練兵場に舉行せられり。此日朝來、風寒を、  
 天翳せり、霰又と始めて降だる。去れと赴々一  
 の壯士はるで脚蹠逡巡するを爲さん。午前六時  
 馳せて本校靜勝館に集まり。武裝凜々しく、前後  
 四隊に分れて進發す。やがて八時より實彈射撃  
 の開始せられ。銃聲永く秋風を動かえて枯林を  
 入りて快日臨許りなま。當日の出席者すべて八  
 拾一名、實彈ハ各一名四發宛あして、二十を以て  
 満点とす。依當日成績の稍良好ある者を擧ぐれ  
 ば次の如し。

點成績級	姓名	點成績級	姓名
18 一 醫	原田 永治	16 二 同	仲尾保太郎
16 三 三	永松 文一	14 三 法	笠井 雄吉
14 五 三	神澤 唯治	13 六 同	糸井仙之助
13 七 醫	慶松勝太郎	12 八 三	伊藤亥佐千代
12 九 三	高木 清吉	12 一〇 三	大森 篤次

11 一一 藤 教篤 11 一一 三 岸 喜鑑

(以下略之)

### 丸山氏ノ書翰

丸山環君ハ昨夏本校を卒業して、帝國大學に入  
り今現に獨乙文學科を研鑽せる者。舊臘中本校  
學生某氏に寄せられた同氏の私信中、諸君の一  
考に供すべき者ありと思ふるまゝ、左に其中の  
一二項を録す。

- 一、高等學校に比すれば大學は余程苦しく候  
各高等學校卒業生は孰れも皆語學の力乏  
しく候殊に第四出身ハ獨乙にのみ居候
- 一、本年ハ各科大學入學者ト總計七百余名ホ  
て就中文科は百余名獨乙文學は八名細別  
すれば第一一人第二二人第四三人第五二  
人外ハ撰科生一人……獨乙教師フロレン  
ッ先生は既に二回論文的作文をのせ候  
第一シレルの「ロイナル」の hint act

Content.

### 第二日本新体詩の發達及變遷

昨日モ、教場にて突然白紙を渡たりシレルの  
Dout Car Ion の In halt を譯せと命せられ

大閉口致し候若々御校三年生中獨文志望者あ  
らば傳言せられ佛語をも學びおろ獨作文を  
もかきおれよ云々

### 運動者するも乃四十人と運動せ

### さる者四十人と此体力統計表

(岩崎柔道部教師寄送)

月暈して風するを知り、礎濕て雨とるを悟る、機  
一發するや靜者と常に其の体を看破了す、岩崎柔  
道部教師の劍柔端艇に運動する者と、更に運動せ  
ざる者四十人の統計、固より大象の一脚に過ぎ  
らざる者、是を以て全体を揣摩し得ざる者は心靜  
かる者に非ず、心知了して身之に従はざる者意  
志確立する者に非ず、見よや、嚴々たる無聲堂、  
激澗たる蓮湖、長へは諸君を招けり、行々や行い  
て飽くまで其心身を煉磨せよ、

第四高等學校生徒身體檢査統計表

大學豫科學生體格統計表

明治三十年八月三十日調査

Main data table with columns for physical measurements (身長, 體重, 胸圍, 肺活量, etc.) and health status (強弱, 體格, 視力, etc.) for various groups of students.

醫學部學生體格統計表

Header section of the medical department student physical statistics table, detailing measurement categories and units.

Table containing detailed statistical data for the medical department students, organized by measurement type and gender.





大學豫科學生運動者統計表

府縣別	人員總數	劍術	柔道	端艇	ステニ	弓術	合計	百分比例
東京	二四	四	九	七	一	一	三三	九二
富山	三〇	四	五	二	〇	〇	四一	四六
朽木	二	〇	一	〇	〇	〇	三	五〇
京都	一六	四	五	一	〇	〇	二二	五六
長野	一八	二	〇	二	二	〇	二二	三三
新潟	三五	二	九	六	三	〇	五五	五七
石川	四二	二	九	六	七	五	六九	八〇
長崎	一	〇	一	〇	〇	〇	一	一〇〇
岡山	四	〇	一	〇	〇	〇	五	一〇〇
福井	一九	一	一	〇	〇	一	二一	一〇〇
兵庫	二	四	二	三	一	一	一二	五三
島根	三	〇	一	〇	〇	〇	四	一〇〇
北海道	四	一	〇	一	〇	〇	五	一〇〇
高知	五	一	〇	一	〇	〇	二	七五
徳島	三	一	〇	〇	〇	〇	二	六〇
熊本	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	三三

府縣別	人員總數	劍術	柔道	端艇	ステニ	弓術	合計	百分比例
愛媛	三	〇	〇	〇	〇	〇	三	一五〇
滋賀	三	〇	〇	〇	〇	〇	三	三三
岐阜	二	〇	〇	〇	〇	〇	二	五八
静岡	五	〇	〇	〇	〇	〇	五	六〇
鹿兒	三	〇	〇	〇	〇	〇	三	一〇〇
島兒	三	〇	〇	〇	〇	〇	三	一〇〇
佐賀	三	〇	〇	〇	〇	〇	三	一五〇
大分	二	〇	〇	〇	〇	〇	二	一五〇
三重	九	一	〇	〇	〇	〇	一〇	四七
神奈	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
川奈	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
青森	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
大坂	六	〇	〇	〇	〇	〇	六	一〇〇
廣島	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
福岡	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
香川	四	〇	〇	〇	〇	〇	四	五〇
愛知	四	〇	〇	〇	〇	〇	四	二五
山口	四	〇	〇	〇	〇	〇	四	五〇
山取	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	二五
鳥取	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	五〇
和歌	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
山歌	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇
茨城	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇

通計	千葉	秋田	山形	奈良
三〇三	五	四	三	一
四九	一	〇	〇	〇
四七	一	〇	〇	〇
四五	〇	〇	〇	〇
三三	一	〇	〇	〇
一四	〇	〇	〇	〇
一八八	三%	〇	〇	〇
	六〇〇			

大學豫科各部運動者人員別

各部人員	一都二年		二都二年		三都二年		法部二年		同農科	同理科	同文科
	人員	百分比	人員	百分比	人員	百分比	人員	百分比			
劍術	四〇	四〇%	二二	二二%	三三	三三%	二九	二九%	三	三%	二
柔道	九	九%	九	九%	二	二%	二	二%	〇	〇	〇
端艇	六	六%	六	六%	〇	〇%	〇	〇%	〇	〇	〇
ステニ	一	一%	一	一%	〇	〇%	〇	〇%	〇	〇	〇
弓術	三	三%	五	五%	〇	〇%	〇	〇%	〇	〇	〇
合計	三〇	三〇%	三三	三三%	三三	三三%	二九	二九%	三	三%	二
百分比	七五〇		六六一		九二四		七五〇		三三四		二二四

同農科	三都二年	二都二年	一都二年	通計
二	二五	四	〇	三〇
〇	四	三	一	四九
〇	三	六	〇	四七
〇	四	六	〇	四五
〇	四	二	〇	三三
〇	二	〇	〇	一四
〇	一九	〇	〇	一八八
二%	七六〇			六〇〇

先學年大學豫科試驗成績

府縣	人員	劍術	柔道	端艇	ステニ	弓術	合計	百分比
新瀉	二	一	〇	〇	〇	〇	一	五〇%
大坂	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇%
岡山	三	〇	〇	〇	〇	〇	三	三三%
山梨	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一〇〇%
富山	二九	一	二	〇	〇	〇	三	一〇%
福井	一七	二	二	〇	〇	〇	四	二四%
石川	七九	八	六	〇	〇	〇	一八	二二%
府縣	三三	三	六	〇	〇	〇	九	二七%
人員	七五	八	六	〇	〇	〇	一八	二二%
合計	三三	三	六	〇	〇	〇	九	二七%

醫學部學生運動者統計

長野	朽木	福岡	山口	靜岡	廣島	鳥取	奈良	鹿兒	三島	香川	北海道	秋田	山形	岐阜	通計
八	二	一	三	一	二	二	三	一	三	一	一	一	一	二	一七
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一五
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	四
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三

醫學部各級運動者人員別

各級人員	醫學部先學年試驗成績				劍術	柔道	端艇	ステニ	弓術	合計
	一年	二年	三年	四年						
通計	一七	五	三	四	二	一	〇	〇	〇	三
一年	五	三	二	四	一	〇	〇	〇	〇	七
二年	六	二	一	三	〇	〇	〇	〇	〇	三
三年	五	一	〇	二	〇	〇	〇	〇	〇	二
四年	四	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	一
合計	二〇	六	三	十	一	〇	〇	〇	〇	三
百分比	二〇%	六六%	三三%	五〇%	一〇%	〇%	〇%	〇%	〇%	三三%

備考

一大學豫科先學年卒業生九拾九名及七新入學生  
 百五拾壹名ハ本表体格統計ノ内ニ入レスシテ  
 先學年ニ二年生三百〇三名ノ統計表ナリ

一本表中運動セサルモノトハ劍柔端艇弓ノ修業  
 或ハ練習セサルモノヲ云フ

一 壹人ニシテ種々ノ運動法ヲ兼修スルモノハ各部統計ノ内ニ加ヘタルナリ  
 一 大學豫科体格統計表中劍柔端ノ員數ヲ偶數トナシタルハ修業者中稍繼續修業者ヲ選ヒ統計シタルモノナリ  
 一 本表中体格統計ノ差トアルハ最大ノ平均數ヨリ順次小數ノ平均ヲ減シタル差ニシテ〇ハ増加ノ印△ハ減少ノ印ナリ

送シエームス、ムルドツク先生

人生愁嘆多く而も別離の情より甚まきは莫し、我師ジエームス、マルドック先生聘に應じて當校に至り職を英語教授に奉せらるゝや、實は甲午の歳あり、白駒匆匆、茲に三年矣、恍として嘗て昔の如し、先生の諸生に教ふる諄々として嘗て解る無く、周歲一日の如し、初め學生の間文又侍するや、鳩舌語難一字を解せず、而して今は則ち僅に英音を操るを得る者、豈ふ之を先生の賜と

謂ふざるや、先生性磊落不羈、人に接するに未だ嘗て城府を設けず、骨稜洒落、往々纏を絶たしむるものあり、其の引証説述必らず近きに於てず、是に於て乎、險題難問未だ意を用ひず、而も釋然として求解す、之を夫の章句の間に徴逐し倍屈攀牙益々會得せざるものに視ば、未だ日を同して語るべからざるなり、時維れ天漸々寒く、草木黃落して嚴霜方に至る、是の時に當て、先生將に冠を掛けて颯然として本校を去る、嗚呼落月屋梁の嘆何ぞ禁ざるを得ん、千行涙下らんとして、九腸旋回す、茲に有志相議し、滿校の同士に謀り資を募り金を釀し、先生に贈るゝ日本刀一口を以て去、永く其の恩徳に報ず、當時文あり先生に贈る記して以て同學一覽に供す、

(垂東)

KANAZAWA,

December 10 th. 1897.

James Murdoch Esq.

Dear Sir,

we are exceedingly sorry that you have sent in your resignation and are to leave our school in a few days. when we come to think of the warm connection between you and us, which has lasted for so many years, our sorrow becomes still deeper. It was four years ago that you first came to our school as a professor of the English language and literature. In this long interval, you have taught us with the utmost zeal and kindness. It is owing mainly to your kind efforts that we can now speak and write the English language without many errors. It is also through your strenuous endeavours that we have become acquainted even with the styles in English literature

which are elegant and vigorous. We are, indeed, deeply impressed with the greatest care and kindness with which you have exerted your self not only to the advancement of our knowledge but also to our discipline. when we come to think as to what enthusiastic encouragement you have given to the improvement of the athletic spots of the regulations of our school, no ward can adequately express our thanks. Herewith we beg to present you with a Japanese sword as a token of our thanks, and we most sincerely hope that you will do us a favour by your acceptance of it. Now you are going to leave us shortly, after which we regret extremely that we shall not be able to receive your most valuable instruction. Though you and we will be in a great at distance from each other, yet we will ne-

ver forget you. Please remember us wherever you go, and watch how the seeds you have planted will grow. Praying for your health and prosperity.

We remain, Dear sir,  
your most obedient and  
faithful students.

N. Nakamura.  
T. Araki.  
Y. Kasai.  
S. Tanaka.  
and others of  
Daishi Kotogakko.

### 秋季陸上大運動會記 (三休生)

#### 運動準備

時維れ十月中澣天清く氣澄み、金氣漸溼たるの時滿校の勇士劍を撫へ脾肉を歎ず、扣所の四隅喃喃偶語するも乃我其運動會談議たるを知る、

果せる哉、是れある哉、一大榜示は貼出せられたり、今之を轉載して以て其由來の梗概と告げん、長空纖翳なく碧漢更に崇高、秋氣肅殺として霜色人を襲ふ、利鏃骨を穿ちて驚砂面入り、胡馬は朔風に嘶て征夫腸を斷げ、嗚呼噫々此の好時期此の好會節、男兒豈に徒に悠々閑過すべし、の時あぐんや宜しく軀幹を鍛鍊し元氣を涵養し稜々たる氣骨以て大に鬱結たる磊塊を澀ぐべしなり、生等茲に例に倣ひ來る天長の聖節をとし運動場裡淡烟低々曳て疎蕊離々、瘦影秋徑を交りて蘆花飛ぶれ處に於て秋季陸上大運動會を企圖せんとす、學校の壯丁健兒颯爽たる英氣を鼓舞し大に技を校し、術と競せよ、若し夫れ夕陽西に没し東嶺月を吐き、乾坤玲瓏清氣水の如しの時に當りて半千の壯夜が、左盃古蟹酣醉淋漓意氣軒昂虹霓れ如く、劍を抜きて舞ひ席を蹴て躍るに至ると

道好漢以て、共に當世を談ずるに足るの士と謂はんと、滿校の諸君奮ひ來りて以て生等の意を副へしめよ、謹白、

を占充場に面して左には來賓席役員席會員席右小方つて醫學部衛生部等の設け整々として、諸般の位置井然として畫するが如し、

十月念五、發起者校を度々以て諸般の準備を從事し、十一月朔全校を通じて業を罷む、レストレス、イユース、は一ヶ月前より小立野練兵場を連りにトレーニングに汲々たど、運動場裡亦壯士の相練技するを見る、待ち設けたる天長節は來りぬ、是の日天甚だ麗なふ、而のも氣温に風物轉々笑ふが如し、遇々大喪の期は會するを以て、式を擧げず、午前八時より直に運動に着手せり、見渡せば、運動場裡環狀の柵垣を吾其の競技の場たるを知る、旭旗翻々として幾旒となく醫王嵐に翻り、數十の精銳が紅白綠黃と思ひく、

#### 賣店及び造物

の布帛を附し、其の間に幹旋するを見る、霜葉點落たる尾山廟畔、數丈の巨榎の下、數十の幔幕張り渡し、る牙營の中校長川上閣下泰然として座

前述するが如く本年の適々宮中喪期に際するを以て校長よの注意もあり凡て質素を旨とせるを以て、之を前年に比するときは、稍々寂寞さるの感なれ能はず、會場お入らんとするや、例のアーチは時節相應の菊花を以て黃白紅紫相交へ運動會の文字を點出せるもの之を往年と異なるを、賣店餘興の如きも左程花々しきものなし、唯法二屋及び三部學生の催になれる、コフイー、ハウス、稍々其の光景を添ふるのみ、之を先年のパン行商、花簪ペドラー等の頭是なき兒童や、妙齡の淑女を泣かめたるの慘に比せば鬼の心にも渡し、る牙營の中校長川上閣下泰然として座請ふ夫れ真正の運動に移りて、如何も意氣壯

んに活潑々地の舉動ありしかと、以て這般の末を得たり、技を憫殺するに足りあんか

開會

時ハ來どぬ午前八點鐘、衆座に就き席悉く定る、

準備係高聲三呼競技者相繼ぎて現はまぬ、

第一回、二丁競走、ベルハ、鳴りぬ、十數の競技者紅、白、青、黒、思ひのまに、鬨によりて位置

を定め、前身半バ傾きて足趾上りぬ、蹴出しては

戻り、此の間心動き氣促す、刹那銃聲一發空に轟

き、砂を捲きて颯爽鐵馬駕し、須臾にして白、衆

に抽て奔るの靜の足の動くを見ず、背後風生じ、

咄嗟ウインニンダ、ライオンよ入の、之を高梨恂一

氏となす、

一等(白) 高梨恂一 二等(桃黒)武田正壽

三等(赤白)秋澤貞猪

以下第五回ハ至るまで、等しく是れ二丁競走、健

脚風を拆けて、腋下熱散じ左の諸氏は名譽の桂冠

第三回、二丁競走、

一等 山口 重作 二等 新井清三郎

三等 倉茂 範行

第三回、同、

一等 榎戸 利吉 二等 藤井 静一

三等 佐々木嘉哉

第四回、同、

一等 吉田 哲雄 二等 佐々木菊若

三等 橋本喜久三

第五回、同、

一等 吉村 盛男 二等 關野 謙三

三等 關口通太郎

第六回、提灯競走、(二丁)

固是れ乙種競技に屬す、萬一のチャンスを企圖

者、賞を風前燈火の危死に獲得せんとして、其の競

技者れ多きスプーン、レースと伯仲す、走ること

半周衆均しく踞し、手を焼くあり、身を屈伏て風を遮るあり、忽と起ち、身を屈して走る、賞これ多し何々急卒するを要せんと沈着靜歩するあり決勝點をさる一間提灯を投じて歎ざるあり、觀客の頤を解きて等賞は左の諸氏に與へら

第一等 吉田 幡誠 二等 平澤象二郎 必らず獲矣、之を誰との爲す曰く信夫山本氏は

第三等 伊佐 壽 四等 藤井 静一 なり、

第七回、同、

一等 番場 友平 二等 本間 等 一等 山本 信夫 二等 慶松勝太郎

三等 芝田 徹心 四等 佐々木嘉哉 第十回、四丁競走、

第八回、戴囊競走、(二丁)

提灯競走に繼げるものは戴囊競走となす、數十の技者一聯、囊を戴て出づ、尖角塔的の頭骸を衆

を顧みて得色あれバ、圓頂縮衣流のコップを頭

を抱へ胸を拆ち、脚の速あるに依頼するが如し、

須之鈴鳴鏘々、轟發を俱に衆均々奔る、是有る 第十一回、二丁撰手競走、

三丁撰手競走の至りぬ、精銳屈強の士鐵腕を扼

第十三回、同、宮崎小太郎 二等 浦井 踏次

し、滿身の力を下腹に鳩め、一心不亂に銃聲を待

一等 宇佐美全賢

待、蓋しスターの遲速は以て全屈の輸贏を決

二等

すべけをばかり、銃は響きぬ、觀衆の視線は盡く

第十四回、柿拾(二丁)

競技者に集注しぬ、唯見る奔るよと半周、山口氏

累々たる柿實之を掌中におさめ之を墜せば則ち

の獨り衆を抽いて奮走すると、瘦身救黒勇士、

功あし、而して今回之更ふ之と胸腕に支ふるを

一步の一步より近く、將に前者を駕せんとす、衆

許さずを以て頗ぶる掌の大なる者に非ざるは

は汗を握りぬ、彈指發止メタルの山口氏の脚

勝ち難し、果せる哉御揃の掌大子連かりき此の

輝きぬ、

等賞者ハ、

メダル 山口 重作

寺崎 新策 二等 二宮直次郎

第十二回、スプーン競走、(二丁)、

永田 茂穂

機か伴り熟り會か吾得て之を知らず、然りと雖

第十五回、六丁競走、

モスブインレスの如死の熟練の手腕を以て機

今回は八丁競走の設なし彼よりえて之を視ば蓋

熟に應ぜざれば能はず、永松氏の勝を博したる、

し易々たる輕技耳然れども是れ蓋し肺量の大と

抑故あり、而して長脚子の功亦與て力あり、

永久の脚力とを有せざるべからず、記者適々事

一等 永松 文一

おぼ技者お負くること多し、顧みて決勝線を眺

二等 市川友次郎

れば紅旗既賞品授與所の下にあり二等旗亦既

は人手お墜つ唯獨り青髯秀魁の士汗に浴し氣を

イギニアナリき、

嘯き走る頗る苦しげなり、鈴の鳴りぬ等賞者

一等 佐伯敬二郎 二等 南 大曹

は左に如し、

三等 武田 正壽

一等 橋本喜久三

二等 松原 武

第十九回、戴囊競走、(二丁)

二等 高橋 亨

一脚のモノポリー附かる赤澤氏の茲に戴囊に於

第十六回、提灯競走、

て勝を博しぬ、氏の体形の長短宜しに吐ひ頗

一等 今井祐三郎

二等 公莊 雄篤

ぶる高澤氏に類似するものあるを見る運動界の

三等 高瀬 修良

四等 酒井 政吉

驍將請ふ自ら重んぜと

第十七回、同、

一等 赤澤欽次郎 二等 梶川 重藏

一等 安田 力

二等 渡邊九壽松

三等 島 峰 徹

三等 久保 捨藏

四等 梶川 藏重

第廿回、同、

五等 米澤 稔

筋骨逞しく而も白哲肥美の一丈夫の卓然衆を排

第十八回、四丁競走、

して進めば、豊眉巨眼の士齒を斷して之お迫る

佐伯氏當日は伎倆と吾人喜で永く當校の運動會

一陸又一陸勝は宮崎氏は手に落ちぬ、

誌に記銘せんと欲する所あり、氏ハ十字軍中、ラ

一等 宮崎 稻作 二等 大森 篤次

イオン、ハート下の獨り衆目の注視する所とあ

二等 保坂 正治

りさるが如く實に本日競技者中のセントラル、

第廿一回、竹馬競走、(二丁)

第廿一回、竹馬競走、(二丁)

鳥鴉歩するが如く、馳走すること能はざる這般長谷川氏獨り盲目旗拾に特技あり今回亦一等賞の技は、少時の經驗巧妙あるもの、時々觀衆婦を獲たり、彼れ衆に語て曰く、吾常に技に先ちて女等の咲笑に値するもの、

一等 田中 秀夫 二等 中島 擴三 眼を約す、進退必らず之に由る、是を以て常勝たざるなまこ、頗ぶる 誇色あり村田金太郎先生 傍に在り、ハ、ア其れが秘傳りと頗る悟れる所

二等 渡邊九壽松

第廿二回、陸上艦隊、

由來此の技は盲目旗拾と縁類なるものなきべ他 二等 長谷川福平 二等 佐藤勇次郎

深く徹せず曾我部氏突進意に従て遊戈と而きて 三等 宮井 勇

一等旗を握る轉瞬の間に在り、衆手を拍て笑ふ 第廿五回、幅飛、

蓋し機運半に在り、 杉本氏修身清瀾兩脚頗ぶる彈力あり是を幅飛竿 飛獨り盛名を擅にせる所以あり、田宮氏一フー

一等 曾我部俊雄 吉野 賢輔

二等 松原 三郎 番場 友平

第廿三回、スプーン、競走、 一等(十七) 杉本勉吉 二等 佐伯敬一郎

一等 朝倉陽之助 二等 蜷川 行道 第廿六回、竿飛、

三等 藤原 敏夫 四等 渡邊九壽松

第廿四回、盲目旗拾、 此の技ハ障害物と俱に常俗凡人の得て希ふ能ハ ざるところ、往年安藤豊氏美名一校に遍かり死、

今ハ杉本氏能く其れ衣鉢を襲ひ、聲譽隆隆たり、 一等 宮崎少太郎 二等 鈴木仙二郎

榎戸氏は足趾繩を排し身を浮せて跳躍するの 三等 半田 亮吉 四等 橋本與三次郎

狀愛嬌ありとて觀客の喝采を博しぬ、さはれ等 五等 永野 八郎

賞と杉本、澤田ハ兩氏に歸しぬ、 第卅回、二人三脚競走、(二丁)

一等 杉本 勉吉 二等 澤田堅太郎 想起するのらみ佐藤信安等山直彦貳氏の技大ハ

第廿七回、高飛、 衆目を惹起するもれあざしことを田邊生野の貳

長島氏嘗て技を竿飛に演進んで安藤氏の壘ハ 氏技精の熟せる同一人の歩するよ似たり、其の

摩し、たりしが今ハ高梨氏と高飛に競ひぬ、さそ 足並みの見事なる賞養の辭に窮する位なり、

がハ高梨氏、柔道部ハ大將とまで鍛ひ上げし脚 一等 田邊 輝雄 二等 宮川 勇

力もて優に他を壓せる見事なりき、 一等 生野 團六 二等 高澤辰之助

一等 高梨 恂一 二等 長島 清松

第廿八回、四丁撰手競走、 三等 高 茂 樹 石川 亨

嘗て韋駄天とさハ考父の日を追ふに喩へられ 第卅一回、戴囊撰手競走、

ハ佐伯氏は驀然猛然奔ること銃丸の如く、直視 赤澤山本の貳子無念半にきて冕を墜ハ宮崎氏獨

すれば金光燦爛メダルは既に氏ハ胸に輝たり、 り眞先ハ前むハ彼の囊は傾きぬ首を傾けて落

メダル 佐伯敬一郎 さハらんと苛は刺那咄嗟高澤氏は之を抜いで勇

第廿九回、提灯競走、(二丁) 益々振ふあはれ無雙メダルの氏の胸を飾りぬ

メダル 高澤辰之助

狀恰も埃及のマンミの如き、奇狀笑ふも堪へ

第卅二回、二人三脚、

たゞ、 一等 中野深 二等 阿部政二郎

田宮氏元來豪強不逞の士氣能く衆を壓し、力能く他を排す氏の贏得せる技遙に下にあり、

第卅五回、一脚競走、(一丁半)

一等 田宮 春策 二等 柴田 秀生

荒木 三郎 赤澤氏の斯道にかけては兼ての豪の者、一間半れハンデイ者ともせず、双手をふる事車輪の如く、須臾にして一人くと衆を抜き、顧みては

第三十三回、六丁競走、

昔時蜀照烈趙雲長を評して曰く滿身都是膽とは

れ移して以て我佐伯氏を評すべし、嗚呼颯爽さ

の掌中より入りぬ、

る勇士白馬を跨りて劍戟を挟み鬚鬢として三軍

一等 赤澤欽次郎 二等 柴田 徹心

を馳騁すれば士卒靡服も、向ふ所生草なし、

三等 山下 齊治

一等 佐伯敬一郎 二等 寺崎 新策

第卅六回、一分間競走、

三等 伊 佐 壽

二間半のハンデイを有するも平然氣を吹いて意

第卅四回、サックレース、(一丁)

に介せざる山口氏故ありて休技せるを以て、勝

此れ技は今年始めて行われしものなり、ズツク

ハ例の氣速者なる田宮の太郎春策氏のもれとあ

製の囊に入り、之を頸部に釣り、仰けさまに出發

る、

線は伏す令起り齊しく起ちて跳進むものとす、

一等 田宮 春策 二等 吉村 盛男

此れ間二部三部諸氏の寄附に成れる餘興千鳥競

部氏と記されぬ遺憾々々、

走あり數十の艸童れ決勝線を背後に陣取たるは

一等 阿部政二郎 二等 南大曹

韓淮陰が背水の計にや傲へる、倏忽般々たる銃

三等 塚本 省三

て奔れるさま、東西反對に路を取りければ蜘蛛

第卅八回、旗取、

の子を散らすか如く、河千鳥の飛びかよふ如く、

整然亂れず旗幟精明幾旋とかく南風に翻るに是

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大將、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば

の大将、知慮も深澤新一郎殿、矢庭を鑑みれば



一等 阿部 元松 二等 森源 之助

秦 又四郎 第四十四回、提灯競走、 秋澤 貞猪 一等 前田 松苗 二等 小島 亮吉

第四十一回、障害物競走、  
障害を跳躍して進む勇氣の凛々かば宮

三等 北 豐 吉 四等 細川 覽一 五等 尾 崎 齋

村氏得意の所天晴一方の旗頭、移して以て社會 第四十五回、六丁撰手競走 萬般に試みばとは記者の痴言とや、 戦て而して勇益々振ふ嗚呼佐伯氏の謂乎、

一等 宮村 降次 二等 田中 秀夫 三等 佐々木久二

メタール 佐伯敬一郎 第四十六回、武裝競走(二丁)

第四十二回、片脚競走、

佐藤家太氏中屋重業氏ともに斯道の老将今や亦

片脚の驍將渡邊鑄氏一さび去けて此の技復見るに足るものか、唯江間氏あり少しく愁眉を舒ふるに足る、俄然倭焉無名の勇士あり、旗を奪て將を馘す之を阿部氏とあす、

ともよ去る、吉田氏今年始きて此れ技を擇ぶ、氏はれ命世の奔波將軍、危殆哉機一髮氏の勝線み入るや、竹花氏の奮然踵を接して氏に迫るあり、

一等 阿部政次郎 二等 山下 齊治 第三等 本間 等

吉田 哲雄 二等 竹花 武壽 田鶴濱又三郎 第三等

第四十三回、竹馬競走、 一等 筑紫 末雄 二等 關口通太郎

第四十七回、來賓競走(二丁) 鬚髯々々張翼徳の如き、炯眼方類許禱の如き、鳳

眉秀目源廷の如き、千差萬別中原之鹿それ誰の手に落ちんり、砲聲般振一勇士あり衆をぬく常に二三間飛ぶが如くして決勝線に入る、

メダル 田邊 輝雄 生野 團六 一等 加藤師範教官 二等 塩井文學生 三等 山口縣官 四等 渡邊尋中教官

第四十八回、柿拾(二丁) 一等 谷 欽太郎 二等 高梨 恂一 三等 布施 正彦

第五十二回、スプーン、競走、 一等 酒井 政吉 二等 寺崎 新策 二等 龜田 伊門 四等 倉知 與一

第五十回、二人三脚撰手競走、

第五十三回、障害物撰手競走、

先に抜群の伎倆を以て能く功を奏しける、

宮村氏流石は達技、草鞋うがちて一目算にかけ

田邊、生野は二氏と難兄難弟まで衆評の喧しだ

出せば、阿部氏かどとどと、霧地につけ行く、ア

森、阿部の二氏は今や雌雄を校むべ境にたち

ハヤ網に至る機々、阿部氏獨特の此技にやあら

ぬ、田、生は二氏すばやくもスタートにて一間も

咄嗟、二子相距る二三間、阿部氏到底望なきを知

ぬきたれば森、阿の二氏力落しけむ兎角著れた

里たりけむ運動を中止しなればメダルの宮村氏

競走のなかりしと殘惜しかりた、

のものとなりぬ、

メダル 宮村 隆次

第五十四回、擔荷競走、

昔者東方氏喜んで此の技を擇む、蓋し格段に素

養からんはわぶず、踏蹴蹠亦是れ笑柄的の技

第五十七回、職員競走、(二丁) 職員競走の甲乙二種に分ち之を撰擇せしむ、甲

種にて運動的の人士之に加り、乙種には非運動

的の教官之を擇ぶ、是日大島教授陸軍歩兵少尉

のユニフォームを着し、競技委員より、自ら進で

甲種をやらぶ、其の蹶然土砂をけけて疾風如

く優よ一等賞を獲得せられたるには、傍より

ある某の御商賣がらと賞せしも尤なりけりし、

一等 大島 教授 二等 宮川助教

第三等 岩崎 書記 四等 福見助教

第五十八回、職員提灯競走、

一等 福見助教 二等 野田(忠)教授

第三等 山川 教授 四等 宮本 教授

第五十九回、一哩競走、

る状勇ましとモ勇ましかり、

一等 尋中 森田 二等 同 吉川

第三等 師範 大島 四等 工業 佐野

職員競走の甲乙二種に分ち之を撰擇せしむ、甲

種にて運動的の人士之に加り、乙種には非運動

的の教官之を擇ぶ、是日大島教授陸軍歩兵少尉

のユニフォームを着し、競技委員より、自ら進で

甲種をやらぶ、其の蹶然土砂をけけて疾風如

く優よ一等賞を獲得せられたるには、傍より

ある某の御商賣がらと賞せしも尤なりけりし、

一等 大島 教授 二等 宮川助教

第三等 岩崎 書記 四等 福見助教

第五十八回、職員提灯競走、

一等 福見助教 二等 野田(忠)教授

第三等 山川 教授 四等 宮本 教授

第五十九回、一哩競走、

メダル 宮村 隆次

第五十四回、擔荷競走、

昔者東方氏喜んで此の技を擇む、蓋し格段に素

養からんはわぶず、踏蹴蹠亦是れ笑柄的の技

第五十七回、職員競走、(二丁) 職員競走の甲乙二種に分ち之を撰擇せしむ、甲

種にて運動的の人士之に加り、乙種には非運動

的の教官之を擇ぶ、是日大島教授陸軍歩兵少尉

のユニフォームを着し、競技委員より、自ら進で

甲種をやらぶ、其の蹶然土砂をけけて疾風如

く優よ一等賞を獲得せられたるには、傍より

ある某の御商賣がらと賞せしも尤なりけりし、

一等 大島 教授 二等 宮川助教

第三等 岩崎 書記 四等 福見助教

第五十八回、職員提灯競走、

一等 福見助教 二等 野田(忠)教授

第三等 山川 教授 四等 宮本 教授

第五十九回、一哩競走、

こはマルドック先生例年の寄附とあす、われも

自重して我劣らじと競走す、一回二回次第

に人と減ぢ四回五回頃に至れば僅か八九人のラ

レナーを見るのみ、此間松原氏身を挺して先よ

あり衆以爲よく一等賞之其れ必ぶず氏の有歟と

第七回に至り氏又迫りて腫大の人物あり、睨目

搏を振盪こと數回、あれや決勝線に入る松原氏

と相距ること一二尺、彼を新一郎深澤氏と爲す、

一等 深澤新一郎 二等 松原 武

三等 永岡 堯 四等 橋本喜久三

五等 高橋 亨

第六十回、各級選手競走、(四丁)

赤 大學豫科 第三年 吉田 哲雄

緑 全 二年 佐伯敬一郎

黄 全 一年 櫻戸 利吉

紫 醫學部 第四年 田中 吉六

赤緑 醫藥科 第三年 武田 正壽

黄緑

全 二年 甲谷 三吉

紫黄 全 一年 佐藤 男次郎

斯く列記を來れば孰れを是れ當日の大立物、中

原の鹿の高材疾足の士之を獲ん、佐伯氏は是れ

武勇三軍を冠す、而も戰頗る倦む、精短力と貯ふ

るの士は曰く手に唾して功名立ろふ成るべしと

満身の霸氣虹を吐いて天日翳す我亦竊お望を赤

の吉田氏に屬す、サイナル、ガンは轟たぬ、暴亂

ある黄の田宮氏ハ初週の半までは大手を打振り

コーダくと馳せ行けば、赤の吉田氏を初週の

三分の二許の所に於て猛然衆を排して進む、蓋

し少しく激せるなり、第二周に於て其二分之三

周に至る比び、赤は吉田氏之衆の先に在り、而し

て寺崎氏又大に衆を抽く、決勝線を距る三四間、

緑の佐伯氏渾身の氣を鼓して奔るふとハリチー

ンの如き、メダルの氏の手を歸しぬ、

一等 佐伯敬一郎 二等 吉田 哲雄

三等 寺崎 新策

此の日の天陰にして而もいど物靜かに秋風の体  
 又冷なるなく、安穩に終了しぬ、競技終結せる頃  
 は天漸々暮れ星斗爛々たり、衆齊しく圍陣を作  
 る、一士あゞ壇に立ちて雄辨滔々四邊を驚す、曰  
 々運動會の無事終了を祝せるあり、巨觥滿引衆  
 盃を掲げて齊し々起ち校長閣下の聲に和し第四  
 高等學校運動會萬歳と三唱し、此より酒宴に移  
 り、酒酣に起ちて舞ふものあゞ慷慨悲陰するあ  
 り、顔酡し耳熱し、放歌天邊に戻る、其の散會せ  
 ると午后五時頃ありき、



劍術紅白勝負記事

嚮きに斯道の熱心家佐藤、近藤、藤田、諸氏乃  
 上洛してより以來、一時秋風落木の觀ありと  
 雖も、猶稻垣、中村、等、諸氏の銳意后輩を誘掖す  
 るあり、況や、押原氏來り、中桐氏入りて、更な幾  
 多新進の駿逸を加へてより、英氣頓々迸發し來  
 り、時の末枯なると正に反比を考へてあり、此時  
 不方りて紅白技を角し、新舊親を暖め、以て枯槁  
 落莫たる此世道人心に一個の興奮劑を與ふるも  
 亦快心の至からずや、時の維れ丁酉の冬十二月  
 四日午后劍術紅白勝負は我無聲堂よ於て行はれ  
 ぬ、只見る堂の南北二旒の紅白旗翻る處、堂々陣  
 取りたる一百の健兒、知らず何等盛哉の快事か  
 ある、未だ陣具の響く音を、鼓鉦の轟くなすと雖  
 も、而かも一導れ殺氣ハ堂内ハ滿ちて、腥風今も  
 も吹き凄まじくあり、折しも公會堂乃鐘、遙に響  
 く者二、之や開戦の合圖ありけん、源氏の方より  
 兵一騎、我こそハ秋田山城守と呼ばる聲の下  
 より、マツタと出る長髓彦、我こそハ平家の一  
 門無官の大夫植木の入道隆太なると應じけり、  
 扱てハ嘗て時習察の役賄征伐に特殊の勳功あり  
 し門を以て、今回殊に先鋒を仰付けられし者乎、

其掛聲其構へ方、何ぞ其れ滑稽なるや、植木入道  
 は厭くまで荒暴、秋田氏之飽まで自若、されば遂  
 に白の勝は所となり入道が大得意の大上段を拜  
 見し得ざるとして残念、是より紅白各々入り代り  
 立ち代り戦險様凄まじく、小篠氏(白)にいたて  
 嶄然圭角を現はし、一躍して清水氏を敗り、再奮  
 せ、意氣軒昂斗牛を衝き騎虎の勢を以て本保、湯  
 本の諸氏亦皆胴薙ぎせらる、平平家の諸氏壇の  
 浦は未だ遠きに何ぞ其振はざるの甚きや、時  
 しも咳嗽一叱、顯はれ出でたるを之れハ山陰の  
 奇騎兒大島君辰之助ありけり、小篠氏如何に勇  
 りと雖も疲憊彼が如くにして焉んぞ新英滿々た  
 る大島氏に敵するを得んや、大島氏今や連戦連勝  
 の奇効を樹てたる小篠氏を倒して健腕正に鏘々  
 の聲ある時、佐々木氏如何ハ苦戦するも、いかで  
 の制し得べき、宮井氏に至りてハ徒らに英進の  
 氣を走せ、常小胴の御留守とあり大島氏ハ爲先  
 に胴を打たれしは固より其處あり、然るも田中  
 (秀)君なる剛敵現はれて大島氏亦意の如くから  
 ず、田中氏ハ常に胴に欠點ありしも辰氏此急處  
 を衝くを得ず、反て田中氏に小手を落され無聲  
 の嵐と散り事ごとく惜し死限りならずや、是よ

り一勝一敗紅白相半ばし、長谷川氏(紅)に至りて活氣更に一段の英氣を沿來り、劍端氣を漲かして龍焰茲に吐かれ、終始御腹の一天張、而も此癖處を、防ぎ得ずして上村、中西、尾崎、増井、の面々等しく皆長谷川氏が劍れ鏽となし、事、遺憾も亦甚しうらや、されば今迄幾分が銷沈れ姿にあま、紅隊の愛に大に勢氣を増し、南々喋々の聲、再び堂に溢るゝに至る、而かも茲に至りて長谷川氏は以て戦ふの氣力竭たさりとて、ホメノ、兜を抜きし事吾輩の長谷川氏其人の爲お惜まざるばあ、於是齋藤、保坂、の新手となして勝は保坂氏、歸して出でふる大の男、是がイーターとして寮の内外に隠れもなき今西君なりなり、氏が体格と氏が箸も巧ある手を以て敵お向ふ、天下何物り制し得ざらん而かも氏と徒らに平然として構へ、時お体を以て敵を押し、時お奇響を發する外は何等の奇腕を震へしを見ず、從て常は機先を制せられ、遂に氏をして歸去來を歌ふの止むを得ざるに至らじ先ぬ、此様を見てありし田宮氏ハ、絶へずやありけん、禮もソコ、に討て懸るや、亂打急擊の如く、氣激する處心膽穩ならずと雖も、氏や遂に此一天張を以て保坂氏を取らぬ、然れども此の不

條理ある太刀といつてが能く正々堂々の栗本氏が鋒先に敵ま得ん、打ち下す太刀は眞甲割られて坊太と敢なく遂おけり、阿部氏出るに及んで栗本氏の太刀も亦亂れかけ遂お阿部氏のお胸は聲に葬られ終りぬ、深澤氏出で、將は活潑な地の活劇は演せられんとする一刹那、阿部氏ハ眞仰付さよ倒れぬ、スカサズ深澤氏の面を取りしハ敏にあらざれば則ち怯、田中鷹氏出で、深澤、田中(崎)、鳥飼、は三氏を倒し勝て益々兜の緒を緊むる氏に敵せしは老田氏なり老田氏は田中氏不勝ちしは田中氏疲勞れ爲めさる事ながら、態度と云ハ氣合と云ハ、周嚴敢て劣さる當年高等中學時代の驍將松下を敗けしに至つては、吾輩只妙の一字を以て批せんれみ、一たび機を制して田中氏を伏せ、再び運に會えて松下氏を破りたる老田氏は、亦も田村氏を誅し得し事僥倖とや云はん、此時は敏刃を以て得意ある松原氏出で、老田氏の敗したる怪むに足らず、松原氏二本を取りて岸君に譲り、岸君更に中野氏に破られて永松氏出で、戦正に酣に、試合は將に庶境に達せんとす、戦士力を觀衆益々勵む、况んや兩々數に於て恰も互角の勢にあるよ於てをや、技の酣囊眞の活劇蓋し是より注目すべし所ならん

か、戰數合永氏面を射て中氏を倒す、中野に代りし誰あり、大石君由良之助百代の后裔雄輔氏あり、聞く氏近來大に技量を進たたりと、奮發一番眞平の技能を顯はし以て鎌倉大將は肉薄するも亦快ならずや、鬼策縦横、彼も小手の叫びおれん、御胸の應へあり、何れも中々の苦戦而も遂に小手を討たれて永氏の敗とありぬ、白の吉村氏は亦鏽々の好敵手態度の嚴乎なる姿勢の泰然たる流石は尋中當年のチャ、御手際ハ儘は拜見仕りぬ、劍端神を走らす胸底龍を躍すとは蓋し是等をや謂はん、氏が一聲高く叫びし御面は雄輔氏の受け損ずる處とあり、未だ大い力量を振び得ずして敗れしは無念、高橋氏出づるや先づ胸を獲んとして成らず、面を襲ふて亦成らず、更に面を打て遂に其意を達しざる、苦戦とは云へ甚だ奇麗、小柄なる野崎氏ハ吉村氏に代りたり、其突さハ大に先生をして傾首せし、胸面屢々合とながし、遂に小手にて高橋氏を破りし處亦非凡とや謂はん、中村(春)氏の野崎宿禰を獲て、意氣稍々昂れりと雖も、平軍西岡氏の敵するあり以て勝を制する難かざらん、果然西岡氏得意の御胸ハ叫ばれ、應へあり、氏ハ更に面を以て橋本氏を擒し阿部(元)氏を殺し、あ

のれ平家の驍將踵を接して薙ぎ倒さるゝの非運に會しぬ、而して平家餘す處僅に戸川倉茂の二將のみ、而かも白お猶中村大將を始め、押原木村の面々片唾を呑んで成敗如何よと待ち構ゆるあま、壇浦あたりには早や紫雲霧さぬ、知れず平軍何等れ成算のある、於是乎滿場の動搖せり、觀衆之叱勵せり、怒る紅の聲、力む白け意氣、さて世之物噓や、此際萬目視注れ中に無量の責任を負ふて出陣ありしは戸川氏、物々しや一人おるも二人ならず三人まで味方を苦しめたる源氏の尻ボ武者連よくいさ我刀の鏽となしけれんと、立ち上るや否や、抜く手も見せず、バテンの早業御腹にて遂は西岡氏を射留らし太刀の速さ、眞に石光電花とも評すべき、拍手は起れり、那次連ハ噪ぎ出しぬ、只見る白袴朱胴の一壯漢波立つ流れに悠々手纏りし者や誰れ、是ぞ多年尋中に於て偉名を轟かせる今や我無聲堂の牛耳を取れる押原三吉君なりき、一と一聲呻叫での姿態磐石の如く、劍光電を放ては神韻活動し、虚々實々而も劍は虚刀おく刀に空劍おし、所謂龍闘虎搏の活劇とて其れ之等の試合に於て見待べぬ者や、氣を採む者、汗を握る者、豈お兩士のみならんや、戸川氏にして押原氏を喰ひ留め

ずんば最後の勝利ハ遂に源氏の者ならん、而も戸川氏ハ運や拙かぞけん押原氏の太刀や優をけん、憂然胸を拂へし太刀ハ、正しく戸川氏の受け損ずる處となりぬ、再び満場ハ急潮を漂はせり、平軍の失望ハ其極に達し命運ハ旦夕に迫りぬ、斯る處に満々たる覇氣を三寸ハ胸中に溢らしつゝ、ある平軍ハ殿軍倉茂君範行ハ、微笑を含みつゝ、現われ來せぬ、呼雌雄の決する處成敗の分る、處一に懸けて此一少年ハ双肩にあり、君が氣合乃常に異なりし者誠ニ徒然あらず、押原氏の一刀ハ正しく範行の小手を落したるか如く見へ、拍手は起り押原氏も絶呼せしも、判者の取る處とならざりき、危機一髪の間を切り抜けたる倉茂氏は、今や是ハ窮鼠の勢、遂に白隊の參謀押原氏を敗れ手腕案外なりしと云へ範行君太ホでのしたると云ゆべし、於是範行得意の時代の來せり、死せるが如し平軍は俄に氣焔を高め來れり、此元氣と此好漢あり、平軍の前途俄に春潮の様々たるを覺ゆ、果せる哉餘勢の進しる處、亦も面みて木村氏を切り伏せ、喝采の聲ハ滿場を動かせり、中村大將と愈々御出馬あらはれぬ、氏や病後の身英氣未だ回復せず健康未だ全らざるして、大將の御役目ヲ重荷にあはざる

か、況んや一方は之れ戰勝の餘威を以て勃々抑ゆべかざるの隼人、須らく短刀直入以て大に急追すべかり、然るに中村氏の餘り責任を重じ過ぎたるにや、終始バツシウの位置ホありま事モ亦遺憾あらざるや、折しも紅白勝敗の決せま御面の聲と範行氏に依りて放たれ、平軍萬歳の聲は續て起り、茲に觀衆散り戰士刀を收めて、堂は再び無聲に實に復しぬ、 (豊泉)

十一月廿七日柔道紅白勝負概見

氣暖ければ体伸び、氣寒ければ体縮む、伸びるの体を以て伸びざるの事をあす、未だ以て壯となすに足らず、縮まれる体と以て極伸の事をあし、奔逸縦横搏虎屠龍の活技を演ずる、是れ豈に由來雪裏嵐鷹に身神を鍛ひ、南西華奢兒をして氣惆悵せしむ東北男子の、常に以て快となす本領とする所ハ非ざるや、十一月廿七日、寒雲暮々、朔颯冷雨を捲くの時、柔道紅白勝負是に於て

紅組	白組
大將 高梨 間一	大將 山口 重作
參謀 江間 圭一	參謀 紅林 豊治
同 久保田 整	同 深澤新一郎

平澤象二郎  
澤田堅太郎  
東郷 直  
栗本 貫一  
佐伯敬一郎  
杉本 勉吉  
湯本四郎右衛門  
野崎 安近  
神谷 秀吉  
清水 勝作  
長澤 泰知  
小林 正旭  
芝田 徹心  
鈴木 庸生  
長澤 泰知  
前田喜代松  
鳥海 他郎

生野 團六 勝負是に於てか始まる、岩崎教師立て各自の心得五條 隆圓 を述べて曰ハク、横掛ハ平素ハ用をあすど雖勝大森 篤次 負お於て之を探らず、逆亦然り、即競技者は拂込高橋 亨 投の三の中に其の勝敗を決すべしと、終て紅吉田 哲雄 白兩軍丁寧相揖す、而して同時に勝負始まる、福田 醇 白 松山堅太郎氏 紅 鳥海 他郎氏 田邊 輝雄 白老軀幹矮少にまて精悍の風あり、紅と泰然と村田 讓 して胖なり、勝負やいかに見る間に、白は見事植木隆太郎 膝車を倒れぬ、あまに氣あしと思ふ間も亦阿部 元松 膝車を倒れぬ、あまに氣あしと思ふ間も亦田中 秀知 白より出は軀幹紅に稱也伊佐 壽 長谷權太郎氏 竹花 武壽 白軍は此度こそはとたれみーに、あざれ一分と榎戸 利吉 立さぬ足拂に打死す、次で倉茂 範行 小幡 重保氏 宇 敷 元 紅の氣勢是に於て益揚と、而の白亦拳を握橋本新太郎 て倪す、憐むべし小幡氏亦紅の疾颯を欺し足拂に止めを刺さる、是に於てか白軍の無念骨お徹同組 佐々木久二 し紅は颯爽の氣は己ハ冲天せんとす、只視る勝小幡 重保 又乗せる鳥海氏は物の見事に足拂に斃れぬ、倒せし者誰ぞ當日紅白勝負第一ハ名譽者白軍の松山堅太郎 佐々木久二氏 なる、軀幹中人、血色の赭さるハ其は健さを証

午後二時半、無聲堂は堯將勇卒の敵愾の氣を以て満さるぬ、校長來り、教務來り、舎監來る、紅白

すべし、立廻り頗る敏捷お、威に乗って頻に白軍

宇敷 元氏

倉茂 範行氏

鈴木 庸生氏

芝田 徹心氏

を足拂、眞捨身大外刈、拂込に倒す、是に於てか  
白軍元氣頓々復して喝采大に起る、而かも紅軍  
の敵愾心亦勃然奮然として見られぬ、

小林 正旭氏

出づ兩々相敵し小林氏の力を以て制せんと云、  
佐々木氏の漸く疲る遂に大外刈に倒る、然り倒  
れたりと雖五人倒しの名譽は、永く君は歸せん  
哉、白軍

橋本新太郎氏

亦大外刈に憐を殘し、小林氏威勢大に揚ると雖  
漸々にして力疲れ、遂に

前田喜代松氏

の手お拂込に倒るぬ、而かも前田氏亦紅の

長澤 泰知氏

の大外刈の一揮に倒れ、白の

榎戸 利吉氏

出づ、吾人は運動家としての君を聞しを久志る  
りしが、未だ武藝家として君を知らず、あはれ如

何にと注視するに、遂に君れ未だ柔道の道を知  
らざ、單に組打角力と心得られたる如死を見て、  
覺えず呆然たゞき而るも終に其の跳梁縱横の  
末、引分となりしを見ては、又々其の敏捷精悍な  
るに驚いて望を后来に屬しぬ

紅 清水 勝作氏

白 竹花 武壽氏

紅は屢足拂を掛て成りず、終に白の大外刈に倒  
る、而して其の倒るや白は紅の

神谷 秀吉氏

の誘致に乗じ見事眞捨身に打死す、而るも勝ち  
し神谷氏は僅の四五歩の進退にして

伊 佐 壽氏

の機に乗せる大外刈の一搏に倒れぬ、  
奮然陳頭み見られしも劍客として奮力家として  
闘校に知られたる

野崎 安近氏

あり、技に勝られぬとや一身の力を手足に込め、  
伊佐氏をして其技を継ぎするを得ざらしむ、而か  
も伊佐氏は則態度悠然、巧く操縦して、見事膝車  
の一本に勝を取じ、又威お乗って近時技大に進  
めるの評あり

湯本四郎右衛門氏

に當り、其の實戦を欺を列しき立廻りも、粘する  
如死力身も、終に無効に終らぬ先し、其の技の  
巧ある其れ態度の沈深ある、后来の進歩は豫め  
此も題すべし、白の伊佐氏の勢の冲天するを見  
るや、我おそのと顯れしは、精悍の聞え高死

杉本 勉吉氏

あざされ共惜むべし此時は既に伊佐氏の前々の  
鏖戦に疲了して黙して勝を讓る、乃ち

田中 秀知氏

との戦とある、只見る杉本氏は極えて矮少、田中  
氏は甚だ長大、田中氏の大外刈と杉本氏の腰に  
掛り、杉本氏の腰車は田中氏の股に當る、是に於  
ての杉本氏の敏捷亦施すに由なき、さりとて田  
中氏お杉本氏を倒す技なく、遂に引分に終る、

白 阿部 元松氏

紅 佐伯敬一郎氏

二氏の技相若くは雖、阿部氏捨身も失敗して佐  
伯氏も拂いられ、小ある阿部氏も長兄佐伯氏に  
敵せず、あはれ十秒の呼聲に無念を止先ぬ、白軍  
の活潑兒

植木隆太郎氏

お先死叫で組む、佐伯氏亦運動の月桂冠を戴き  
し者、元氣益揚り、見事裏投も活潑先生の鋒を挫

く、佐伯氏の勇二士を倒すを見るやイカデと力  
足踏みしめ出でしは白軍

村 田 讓氏

頗る力に凝りて大に佐伯氏を困し先、遂に外巻  
込に勝を制す、初心の弊は此の力お凝て技お伸  
びざるにあらず、村田氏なる者大に力を用ふる所  
以を悟しみて可也、是に於て番組を考ぬれば白  
は佐々木氏伊佐氏の力お由り、勢大も奮へ猶十  
一人を餘せるに紅は僅に七人耳、紅は皆扼腕し  
て一以て二に當らんれ氣あり、今颯爽として躍  
出せるは紅軍の大胆黒漢

栗本 貫一氏

其の敵と組むや直に咆吼踴躍、或は力を以て、或  
は技を以て、村田氏を足拂に倒れて、

田邊 輝雄氏

を隙間おく攻先立て、大外刈に誠る、さはれ息  
漸く喘で力漸く、衰愈終に尨大黎黒の幹軀を優  
細白面の

福 田 醇氏

に制さる、紅の

東 卿 直氏

瀾歩して來り手もなく福田氏を足拂お倒して  
又

吉田 哲雄氏  
を一蹴して足拂に制し、日出の勢は何時滅びとも見えず、白軍

高橋 亨氏

出づ、軀幹力量相如き、勝敗俄に決せず、之ハ足拂に失敗し彼は大外刈に失敗し、遂に一分間引分々の令降る、あはや半分を過むる時、東卿氏右足引死後れ体浮きしと見る間もなく、高橋氏の左足突出して山嵐に危く一本を仕止めぬ、

澤田 氏

技を以てすれば澤田氏決して高橋氏を怖れずと雖、如何せん軀幹の矮少と力の足らざるとは數歩の差を容して勝敗俄に決せず、或は山嵐に或ハ足拂に大外刈に眞捨身互に種々れ手段を尽して而かも殊せず、又々一分間引分の令あり、此時高橋氏横倒しを掛けて失敗し、直に拂込入れ共機已に晚く、却て澤田氏は跳子返へふれと拂ふる、既ハ疲きと雖、暗暝一番、能く之を解て立つ、時に引分を呼ばる、

白 大森 篤次氏

紅 平澤象二郎氏

平澤氏少しく短かりと雖體質は相同ト、必ずや冽しき争あるべしと思へる、大森氏例に似ず、

地を蹴て出でし、

江間 圭一氏

生野氏と對するや直ニ突進きて疾風枯葉、何の苦も亦く膝早に倒す、神速颯爽氣既に全軍を呑む、之ハ應る、

深澤新一郎氏

深澤氏の近來の斯道の熱心實に無比なりとす、江間氏に對して百方其の技を盡すと雖、如何せん未だ敵する能はず、一度右肩を攫まれてより死命全く江間氏に委し、又々膝車的一本ハ憐を殘す、嗚呼深澤氏弱きに非ず江間氏強きなり、江間氏死せずむば兩軍の雌雄甚だ危死あり、此に突出せしは白軍乃手者

紅林 豊治氏

氏は技術あては校中一と稱す、一度敵に向へば其の矮少瘦衰せる如き軀幹も、屹として堅きを嚴の如く、推撥とも突けども動かばこそ、流石の江間氏亦其の二勁を輕々破し來れる手腕を奮ふに能はず、動すれば負色見ざるに非ず、され共奈何せん力少く體輕き紅林氏は二重の不利あり、倒るべし筈の手亦其効を奏せざるにあり暫くにして江間氏又々紅林氏の右肩を攫み、得意の膝車は勝を取らんと思ふ、紅林氏亦細心翼翼、激

平澤氏の背負投より内卷込に轉せる者の爲に、見事殊々ぬ、あはや蟹將軍孺子何爲の者ぞと

五條 隆圓氏

先づ、由來五條氏の足拂ハ、高梨氏の腰車と并てパテントと稱せらる、平澤氏常に此に注意し、其の二回の將に倒れんとする襲撃ハ抵抗せしが、思ハぬ方の外卷込に卷込まれしは、實にすまの浦の塩やく烟とやいとまし、

久保田整氏

の出でし頃ハ五條氏亦大ハ疲れ、久保田氏得意に腰投に止めを刺さる、此ハ奮然陣頭立ちしは

生野 團六氏

氏や軀幹甚だ矮少なりと雖、敏捷なるは殆ど無比、久保田氏と戰て非常の不利あるに拘らず、縦横の技疾風を欺死、且久保田氏亦其の身長の軒軽甚しき爲め、得意の腰車に入ると能はず、生野氏の足拂大外刈ハ屢々危く、遂ハ堪へ切れず、之て足拂に倒る、生野氏の技の精靈ハ驚くへし、茲に兩軍比較するハ紅軍と漸く戰没して、剩す所は僅ハ江間高梨の二將耳、なるに白軍と驍將四人を殘す、是に於てか兩軍の意氣互ハ凌雲見る者亦手に汗を握る、此に紅軍の重任を負ふと

闘五分、江間氏ハ体少くを浮かしと見る所、紅林氏直ハ其の虚を突いて見事大の江間氏を大外刈に倒す、實に校中一の手者の名に負かずと、敵味方感せぬ者なし、されど力強く體大なる江間氏と數刻ハ烈戰に全く疲れ、

高梨 尙一氏

と對する頃は、既に戰鬥力盡了らんと思へり、高梨氏ハ斯道第一ハ猛者と稱せらる、者、就中其の腰車ハ闔校無双、紅氏の組と見ると見る間にはやも屈伸奇幻の腰は、花やハ紅氏を擔て地に投ず、此れに於てか白軍の大將

山口 重作氏

とれ取組となる、由來山口氏の勝負に於てハ未だ嘗て後れを人に取らず、或は五人抜ハ、或は三人倒しに、勇名到處に隠れなし、而して高梨氏亦勝負に強きは敢へて山口氏に譲らず、況んや兩氏共ハ新手おして未だ其力を用ひざりや、兩軍聲を潜れて思はず、汗に滴り背濕ふ、何れにもせよ勇士と勇士と猛者と猛者ととの戰かれば、所謂進退開闔虚々實々、左すれば右に避かれ、前すれば後に逃れ、變幻縱横山口氏内卷込ハ成らんとして成らず、高梨氏亦腰車に殊せんども

殊せず、何時果つ可くも見えざりけり、さはれ山口氏の漸く受身となるを見ては、白軍は憂愁一通りならず、紅軍の掛け聲一刻より勇まし、只見る、高梨氏の腰織塵の隙を窺て山口氏を襲ふや、山口氏必死体を引いて脱走んとすれ共、腰例へば鶴の如く、粘着して離れず、山口氏引けり高梨氏進む、満堂喝采湧くが如し、高梨氏奮勵一番見事山口氏をかつて音勇ましく投げ降す、岩崎先生「一本」と呼ぶ、兩軍の雌雄此よ決せり、校長閣下紅旗を高梨氏に授けて、紅白勝負終る時に五時半、  
(河滄浪)

演説部大會記事

密雲疊々、雨降らんとして未だ雨ならず、紫電時に雲間閃光死て、轟然たる般雷、未だ耳を掠めざるも東洋の天地漸く、當さに多事なふんとす、吟節漫然として、田藤を穿ち、村坂を徑し、麥籬繡錯たる間に、散策を試みしと、猶昨日の感あり、桂權颯乎、空明に掉し、流光は滌り、胡笛雜奏の裡に、納涼を試みしも、猶昨宵の感あり、然るを今や、乾坤轉じ、天地傾き、賓雁商氣を齎し來て、此悽愴たる光景を致す、露と梧桐に滴りて、初冬夜猶長く、閑窓讀書は適して、檠燈更に親む

べし、陋巷の策士は、爾かく燈下に蠹魚と交るも、夫れ顯道の君子は、何事を以て此好時を徒消するや、然も歲月は益々吾人を驅て、髮邊霜を結ぶの悲境に進ましむ、感慨存り來りて、憤懣遂に禁ずべざるに至る、此時に當て、徒らに靜坐黙慮と、果して胸襟豁として披き、悲憤の情亦釋然として滅するを得るか、爰も我演説部が、堂々百端、情も動き意に通下、一片の幽懷を開いて、孤鶴の清涙を喚びしむるもの、洞頭月白く松影黒き處、怪禽一聲、耳を掠むるにも似らんかし、時は是、「聲かきて猿の齒白し峰の月」てふ霜月半、處は學生扣席、聽衆は早や奔々と詰光かけて、無慮立錐の地なく、中に職員の二三も見受けられぬ、満堂之既に、一種の活趣を帯びたるも、靜然相目して、然も寂閑、無言の感嘆の凝て、唯無聲の聲の満るるを聴くのみ、辨士果して之を酬ゆるの概あるや否、いで不文を顧みず、頼まれもせぬ駄評を叩き出さんや、午下一點鐘、拍手四方に破れて、秋田信太郎君を迎へぬ、氏は簡單に開會を告げ、席に復すと見れば、体を反らして轟然濁歩、三軍と叱咤する如く聲恐ろしく、「雨の降る日の天氣が悪い、犬が西向さや尾の東」と節異様の、握り壓さん許りの拳の、聲に應じて

振り舞はされぬ、聽者は驚死、見聞子之筆を落しぬ、山は高し、水と深し、花は紅く、柳は緑、猫も杓子も同化する今日、獨り悲む似而非なるものあるを、而も萬物の靈長たる人間、奇言僅も數十、以て天然と同化するべしを絶し、奇言僅もし、知らず、諸君果して同様の感打されしや否尤、責と以て見聞子の聾なるに歸するが、辨士は誰ぞ文二に其人ありと知られたる植木隆太郎君をいふ、

り、とて夫のセミストクルスの性行を、彼が外交的手腕は權謀たるを難し、百尺竿頭更に一步を進めては、近く夫のクリミアの戦亂、ボスニヤ、耶蘇教徒の亂、普佛戦争、彼といひ是といひ、皆野心慾望の結果に外ならずと論じ、翻て夫れ春秋戰國の形勢より、蘇張を血性ありと慨し、近くは清佛の戦に、台湾征伐も、以て李耶陰謀を責め、外交上信義なれば如此、東西兩洋の間に行はるゝや久し、史を常に吾に教ゆ、果して正義なく、道徳なれば外交は、遂に全ふざるを得るものと痛論を、更し語を次で、史は鄭朝に一人傑子産を得たりと、鄭國が其尺寸の地を以て能く暴秦猖楚の間に介立して、奔馬徑徳の間切憂患なきを致せしもの、特り彼が眼中唯一點の正義有て然るれど、宜なり孔夫子彼と交て兄弟の如しといふもの、焉ぞ驚台と懼を同ふせん、蓋し思ふ可いのを、以て夫のメッテルニヒ、ゴルチャコフオの手段に比し、吾人の易く霄壤の差あるを認めんか、よま蠶食は外交の目途をさりとすも、正義を以て合ま正義を以て分る、一朝事破るれば、正義堂々の陣に對して宜く奮闘す可きものと、咄何人の妄言ぞ、曰く外交に徳義なし、個人又在り、國際と權謀れみど、矛盾亦甚きのみ、吁、今日と

外交的徳義と鄭之子産の演題は掲げられぬ、乳虎の後お羚羊ありと、戯口を耳よして悠々登壇せられし一健兒は、鷹見繁君あり、氏ハ初對面の挨拶振いと懇懇、徐ろに説て曰、諸君は萬國史を繙じ、夫の歐洲大亂の初代、佛國の内情を見れば、又慘憺たる光景の寧ろ哀むべきあるを見んか、舉世滔とて權謀に流れ、道徳は腐朽し、正義光を放さず、又朝に夕を計り難し、夫れ當代能く人智進み、物理化學の如く、亦駭乎とて日に進歩を來すあるも、夫の柚子の外皮を剥がば、内溢汁あると又何ぞ擇ばん、と在五中將が「世れ中お絶て櫻のあかりせば春の心ハ長閑りからまし」の歌を引説して、内裡權謀術數の胚胎なるを説け、以て國際に論及せられ、希史に其人を得た

り、とて夫のセミストクルスの性行を、彼が外交的手腕は權謀たるを難し、百尺竿頭更に一步を進めては、近く夫のクリミアの戦亂、ボスニヤ、耶蘇教徒の亂、普佛戦争、彼といひ是といひ、皆野心慾望の結果に外ならずと論じ、翻て夫れ春秋戰國の形勢より、蘇張を血性ありと慨し、近くは清佛の戦に、台湾征伐も、以て李耶陰謀を責め、外交上信義なれば如此、東西兩洋の間に行はるゝや久し、史を常に吾に教ゆ、果して正義なく、道徳なれば外交は、遂に全ふざるを得るものと痛論を、更し語を次で、史は鄭朝に一人傑子産を得たりと、鄭國が其尺寸の地を以て能く暴秦猖楚の間に介立して、奔馬徑徳の間切憂患なきを致せしもの、特り彼が眼中唯一點の正義有て然るれど、宜なり孔夫子彼と交て兄弟の如しといふもの、焉ぞ驚台と懼を同ふせん、蓋し思ふ可いのを、以て夫のメッテルニヒ、ゴルチャコフオの手段に比し、吾人の易く霄壤の差あるを認めんか、よま蠶食は外交の目途をさりとすも、正義を以て合ま正義を以て分る、一朝事破るれば、正義堂々の陣に對して宜く奮闘す可きものと、咄何人の妄言ぞ、曰く外交に徳義なし、個人又在り、國際と權謀れみど、矛盾亦甚きのみ、吁、今日と



雖も演壇主更に一點の正義なく、投機師れ手代  
 比如く、詐偽欺瞞の如き感あるもの、曰く遼東還  
 附、朝鮮、遼東、日露戦争、(笑聲) 吁實小詐偽取財  
 の共進會、演説の演壇會小彷彿するもの、セミス  
 トクルスに美生とし、柚子ハマキアベリトに至て  
 花開き、メッセルマンニに至て其實遂お結び、然も  
 今猶朽ちず、情勢愈急よ、意迫て頓唇と遂に外  
 交と徳義の一致といふお及で結ばれぬ、君が流  
 暢の辨の見聞するの喜ぶ所なるも、傍人あり曰  
 く、反復丁寧を演説するの意至て親切ありア、(欠  
 伸)と、見聞する者をか云へん、  
 御苦勞様といふ演説の拍手と、鷹見君を送り  
 て、魯國の侵略、演題は佐伯敬一郎君を招れ  
 め、老鷹餌を東亞に貪て飽かず、猶南方に志して  
 成らず、累世魯の君主、其政策を一にするを見る  
 も、夫のクリミヤの戦亂、遂に伯林會議を起し  
 て損失相償はず、哀むべし仁義の名は鬼れ念佛と  
 はなれり、次で中央亞細亞問題として、英魯の  
 衝突を説き、布て遼東に及ぼし、而今や東洋は支  
 那朝鮮の二病國あるを認むるや、諸君羊を見て  
 慾起さる狼おしと、以て魯か鐵道布設の計畫  
 を列擧し、吾人東洋の前途を考ふれば、半宵枕を  
 蹴て立つの概おからんやといふに止言せり、君

が抑揚なき辨は無作法ある聴者が笑聲に葬ら  
 れ、見聞子をして又綴るに苦まじむ、然りと雖も  
 要するは君が所説、論據を縷述して論及あり、所  
 謂本有て未なきの憾は、加之長々、鐵道の統  
 計と、デートを列擧するの煩りある、況や君が得  
 意の奇辨は、以て笑聲を惹くお足るもの、嘗て所  
 説擧雲の如しと迄評せられざる君、豈願はずし  
 て可からんや、  
 倦厭と苦笑とに動搖めき初め、聴衆は、破顔の  
 才兒會我部俊雄君を喝采の裡に迎へぬ、演題は  
 印度思想あり、君は諧謔を以て名あるの人、例よ  
 由て冒頭おれ世辭を振舞て曰、殊に此種の問題  
 の通常概おんば悲哀的あるよ、我は獨りへ  
 ゲル、シヨベハウエル大先生の言も、左右欠伸に  
 埋れざる、を悲む、春秋原在文君去て復た此  
 種に真髓を唱ふる者なしと、爰に語を改めてア  
 リアン人種が最舊宗教の由來より、完全無欠な  
 る佛教其物お就て述べんとて、釋迦の下降より  
 彼が本体を、所謂大日如來として表され、彼が  
 所説は、秩序的に高尚に進み、初光と實有を説き  
 人の能力を有するを見るや、再び夫乃鏡像水月、  
 飛花落葉、偕は萬物を吹飛ばせば無と云ある單説  
 乃ち一切空を説き、進で非有空非に至て、遂に法

華經八卷、事理無限、事々無限と終る、夫のバイ  
 ブルの、塵生人の如き空論ありと、君更お語調を  
 變ト、鷹見君の説に一嘴を挾て曰、吾に自由を與  
 へざれば死を與へよとぞ、アリアン人種の特徴  
 なるも、其利己主義に戻り易きを如何せん、之誠  
 小欠点あるのみと、已に業よ白哲人種は白自お  
 り、希文明と羅馬に、羅馬と之を今日お、然も終  
 への利己主義に歸するを常とす、彼等お既に其  
 同胞の欠点を認む、吁遂に避くべからざるか、  
 吾人子産と同トき東洋の吾人お、蓋し將來彼  
 曹を足下に蹴らんれみ、寧ろ職分たるを信ト  
 て止まず、故に佛教青年會は明日を期して開會  
 せんとすれば、諸君奮て來り會せよと、何ぞ圖ら  
 ん君一廣告を以て此難題を無味な結ばれんと  
 り、吁諸も呆氣なし、よ一聴者をして倦ましめざ  
 るの伎倆と君が長所として恕すべしに足るも、  
 御交際の風姿と活氣なき口振は斷つて聴衆れ取  
 るざる所、見聞子は敢て君の首肩せざるを期す  
 のみ、

陶然として醉危るが如き聴衆の萬目と、今や君  
 が一身に注がれぬ、君果して警醒れ辨あるか、畢  
 竟何事をか説かんとする、乞ぬ須らく君の云  
 所を聴け、見よ現十九世紀はステージに於て、如  
 何よ富力の社會を風動するよ餘りあるかを、然  
 も陰然裏面の中は彷徨して絶大の偉力あるもの、  
 獨り所謂青年のインフリュエンスあるを想  
 へば、身心轉清涼を覺ゆるんか、史を繰りに當  
 り、吾人が近く維新の際に於て特に此ユースな  
 る者を見る、汗沸潮亂麻、中原走鹿、或ハ關ヶ原  
 の苦戦に、或ハ小牧乃奮闘に、英魂笑て眠る八幡  
 の旗下に驍名噴々たり、末裔幾百の諸侯、偕と  
 世の最も信任を措きざり、夫の雲上人等は、果  
 して何事を爲し得り、太平三百年、廟堂日夜  
 苟安謀、六尺の男兒腕振き首を屈して骨なきが  
 如く、憐むべし籠網に汲々して鵬鯤の喙を惹け  
 り、何ぞ圖らん一大創業は半文の價値もあしと  
 迄蔑視せられざる夫の青年の手に成らんとは、  
 よし一家の系累ハ時に彼等が英意を苦むるある  
 も、偉大れ能力と感情とを有する彼等ハ、史に感  
 憤して時勢の非なるを難じ、以て猛烈なる行を  
 擬せん、加之特よ不平と亦一大原動力と成  
 て、遂に國家の陋固を蟬脱せしむるアクトルと

自信せるに至りしめしのみ、更に翻て現今の青年社會が狀態如何、口を開けば曰、深山の朱玉、雲隱の明月乃如し、時來り勢至らば和氏の壁隨珠とあり、惜々たる明月纖々たる玉兔とあると、今や社會の關門ハ開け、荆秦業は平ぎ勢適し時至る、機敏英謀宇内の耳目を聳動せるも、唯吾人が技倆如何存せ、然も猶維新の青年を慕ふもの、其意氣其胆の遠く及ばざるあるに由るか、蹶起せよ明治の青年、江山涙を合で英雄を待たば如し、鷲影ハ北邊を掩ひ、獅蹄西邊を蹂む、吁神州山秀で水ハ玲ある、柳陰蔭暗き所宜く沈思せよ、諸君の期する所果して如何、翠綠滴々たふんとする處宜く默想せよ、未來の活天地其期する所果して如何、吾人は將ハ第二の維新とも云ふべし、テージに立て大に爲すあらんとするもれ、小心翼翼として自愛せよ、激烈又向處て將に蹉跌せるを知り、急激に斃る、勿れ、未だ雨降らざるに綱繆すべく、又以て豪氣あふざる可らず、一身の榮達を計ると共に、絶叫して喝采の裡に降壇せられぬ、痛恨溢れ來て句々君が赤心より出づ、特よ君が熱心ある態度ハ以て聽者の同情を惹くに足るもの、音聲ハ稍重く輕快を失するに至り、又更に言はず、

演題の奮起せよ滿校の健兒なり、辨士を荒木篤三郎君とす、君ハ赤誠を訴へんとていと熱心に説き起して曰、時在て鳥の飛ばざる日あらん、然も運動場裡今や寂として聲なく、唯小嵐の吹き荒ふに委せ、汗滿校の健兒よ、此不活潑なる様を見て果して昨今の嘆なきか、五百の健兒默視して又死せるが如きもの、無聲堂内、撲然たる音竹刀戛々の響に和するの壯響ハ以て諸君を迎ゆるに足らざるか、或は朝露を踏で湖畔に、眩を敲て白鷗の夢驚らすの快ハ又以て諸君を迎ふるに足らざるか、抑も當年の銳意今何所にか轉ずるの故り、吁夫の職工的同盟の弊風は我校を去せり、客氣狂躁徒々に淵默して雷聲せるの徒ハ又今や我校を去て跡あり、然も其反動と那邊ハ發達して又口言ふに忍びざるの憂、泛々として嗷々するもの、夫を意の欲する所に從て情に制せざる、吾人ハ、感情動物の本色として以て猛省するの値をしとするか、吁累卵より安きはなく、枉擗より危きとありと、杞人の憂は似たるよせよ、流連荒亡遂に無爲に至らんには吾曹亦何をか言はん、獨り意馬ハ其駿足を試み去らんとするも、心猿ハ沈滞して疏通せずと、吁痼滯の病根ハ牢とみて遂に抜く能はざる、多病ある蛆虫の吾

輩を去て、運動にまれ學藝部にまれ身を容る、の資格亦死吾輩を去て、尙且此蕪言を發するに至らざらん、も、誰が尤責とや言はん、吁止むなくんば遂に、驕悍の民ハ御せるに政刑を以てすべきのとき、感慨胸を劈して聲爲し顛ふ、吼立る君が辯之時に急且つ大に失するの憾あるも、所説の同情を惹くに足ると言々赤誠より出るの頼母とさよ、聽衆の今更に耳を敬てしも君乃一得とや言はん、

を得ざれば國家の憂立所に至らん、完全なる教育家たるも乃、先づ學德兼備公平より輕重をく、利慾を配分せられず一世の壽命を擲て滿腔の熱心ありてこそ、とて夫のソクラテスの性行より孔子の布教に及ぼし、次で我國不振亦夙に教育の不完全なるを、教育家其人を得ざるを論及し、日蓮弘法の徳を稱揚し、特に榮達と野心に驅らる、今日、果して其人を得るの、とも教育家の教育よ、教育せざる可らず、單に箱庭的の教育は吾人の肯可死に非ずと、時ハ限あればとて所説半ハ、覺束なくも結ばれぬ、吁情も重々れ意外、然も御相談的ハ不熱心極まる君が態度と、時々眼鏡越しの睥睨は殊に見苦しく、前席の熱心ある辯説に比較べて更に一段ハ聽劣りせしも惜し、第八席を米澤稔君とせ、再び稍や倦厭に陥りし聽衆は、明快の辯あれかしといとん面持し目を側て、君を迎へぬ、君は文明の今日に有無より起して、更よ吾輩として無形的境遇に入らん、徐々に説き、紛々たる社會と滔として頑然利己主義に走り、甚しきは國家を賣るに至るもの、所謂吾人の唱臨る文明なざる、果して然らんには文明たらんより、寧ろ姑息だも昔時を慕ぬ可死の、時に或人曰、物に一利一害

次席ハ辨士を松島重隆君とす、君は嘗て法三會ハ壯士的演説を爲して名ありと聞き、題意の今の先生様と云ふ、先づ聽衆の眼を一身に集めて落付濟またる挨拶振、意外にも口重みに優しげに、特に暗中より牛牽出す如き君が態度ハ一層の見聞子の眼を惹きぬ、教育の任に當れる御方様を指せしのみとの言譯も可笑ま、教育は國家の大本なりとて、第一國民全体ハ強弱第二吾人が教育家と申すべきは如何あるものか、第三我國不振の源、第四現代の時勢教育の方針、第五今の先生様の資格第六吾人の不羈獨立の自由教育を急務とし、世界的の人間と成らざる可らずとに分ち、徐ろに小學の生徒より吾人に至る迄、如何に感化力の偉大あるのを説き、訓導其人

を導ざれば國家の憂立所に至らん、完全なる教育家たるも乃、先づ學德兼備公平より輕重をく、利慾を配分せられず一世の壽命を擲て滿腔の熱心ありてこそ、とて夫のソクラテスの性行より孔子の布教に及ぼし、次で我國不振亦夙に教育の不完全なるを、教育家其人を得ざるを論及し、日蓮弘法の徳を稱揚し、特に榮達と野心に驅らる、今日、果して其人を得るの、とも教育家の教育よ、教育せざる可らず、單に箱庭的の教育は吾人の肯可死に非ずと、時ハ限あればとて所説半ハ、覺束なくも結ばれぬ、吁情も重々れ意外、然も御相談的ハ不熱心極まる君が態度と、時々眼鏡越しの睥睨は殊に見苦しく、前席の熱心ある辯説に比較べて更に一段ハ聽劣りせしも惜し、第八席を米澤稔君とせ、再び稍や倦厭に陥りし聽衆は、明快の辯あれかしといとん面持し目を側て、君を迎へぬ、君は文明の今日に有無より起して、更よ吾輩として無形的境遇に入らん、徐々に説き、紛々たる社會と滔として頑然利己主義に走り、甚しきは國家を賣るに至るもの、所謂吾人の唱臨る文明なざる、果して然らんには文明たらんより、寧ろ姑息だも昔時を慕ぬ可死の、時に或人曰、物に一利一害

あま、君の云所の唯害れみを擧げて又利を云く、物は利害得失を得て初めて成ると、昔時飛凡を以て僅かに王城を望む小過ぎざりし當代ハ、變じて物質的進化を致し、襲任門閥に制せられ、曩も孫陽を得ずして空しく卷舒縦横さざざるの怨は、何時う脱却して既ハ驚台と囀を同せざるに至るも、物質的變化亦果して所謂吾人の唱ふる文明なるを、進化の裏面ハ立入て更ハ叙し來り述べ去り、縷々數萬言、遂に此進化ハ加ふるに猶一要素なかる可はずとて、宜く志氣の涵養ハ注心すべしと結び、論旨多くは隠れ幽想尋ね易からず、然も揚抑なき君が辯は聽衆の同情を惹く足ざりしもの、獨り落着れし君が風姿も之を掩ふに至らざりしを憾む、第九席、死論と題して竹内佐太郎君ハ次で起て、世故に苦められて死を覺悟せしにも有らねば、自ら題して此難題ハ苦むるを、咳一咳、沈重の口調ハ君は寧ろ死乃人間に及ぼす偉力を擧げ、人口を開々バ乃云ふ、槿花一朝の夢、子孫比榮、死後の名のみと、難行苦學皆以て死あるが故、所謂生存競争も亦死々競争かんにハ、七情は遂に去て活動せず進歩せず、吾人は只茫漠の間に彷徨せんのみ、人間凡百の行爲焉ぞ夫

れ死の範圍を脱せんや、獨り夫の稍烟中の悠然策を講ずるものは絶て眼中に死あり、語未だ終らざるに何ぞ時既ハ盡んとて倉皇逃るが如く降壇せり、限られたる僅々數分時ハ間に此難題を一貫せんと期せし君が銳意、聽衆は寧ろ其大胆に呆然たる而已、見聞子亦言はず、時既に晡なり、燈と己に掲げられ、聽衆の半ハ散じぬ、然も猶熱心なる健兒ハ依然耳歌て、孤燈の下、特に辯士の宿意躍如たるを覗ふもの、如飢に泣く見聞子亦感奮して筆を擱しぬ、笠井君の法律と何ぞハ予に譲られぬと、信仰論てハ演題の下ハ秋田信太郎君ハ立てり、君と法三に覽吾家を以て名ある人、徐ろハ原稿を披て聳然たる身構優ハ、寒燈光澹ハ所君が明快の辯は滿堂に旋轉しぬ、八萬淨土を照さん許すの明煌々たる眞如の月も、可憐切雲の爲ハ其光を失ふの時あり、ベスピヤス山一朝の噴起ハ人車絡繹を極め、ありハポンペイの全市を煙滅し去りぬ、人は此種の現象を見て無常と云ひ、天地人間も常なしと大法螺を吹て易簧せし釋迦如來とう云ふ人もあり、然も乾坤も常なし、無常の風韻を止むるもの豈ハ祇園精舍一打鐘聲

と乃み云はんや、然りと雖も、彼等の觀界や特ハワソ、サイドドなるのみ、吾輩ハ宜く無常の中に常あり、常の中に無常あるを觀せざる可はず、從て其所謂人間の「メンタル、エント、フィジカル、フオース」の存在を是認せる者なり、然らば果して其活動なるデベローブメントのベストウエーと如何、之即ち吾輩が人生の一大問題として爰に信仰論を唱道する所以なりと、語調更に高く、吾人ハ特に道德の進歩を以て其目的とかし其精神とさせる宗教等に付きて一考する所あらんハ爾來道德説を唱するもの、多くは人間をバツシの地に置けり、果して彼等は或る一種のヲインリテイに對して人間をサブジェクとして論せざる可ざらざるも、吾人ハ寧ろ爾來の宗教乃至道德の本旨に慍然たざるもの、日本八十餘州の人心を風靡せむべき草薙の劔ハ、乃ち之信仰あるのみ、之ぞ心ハ一作用にして深く其根元を意志の上に有ると、恰も富嶽ハ屹として雲を排するが如し、古昔、ストア學なるものは萬象を採て働不働ハ分て論及しぬ、不動元より一種の勢力なり、動亦一種の勢力たるを妨げず、孔子の一派が所謂、仁者樂山智者樂水亦一に此意外ならざるもの、然も信仰は此二勢力

に全然反對せるの偉力ある、吾人は特に夫れクリストに、吾日蓮上人に於て之を見る、彼ハ沈重不動とあり、之ハ縱横能動となる、此に於て信仰の下尙安心立命此地ちと云ふか、而も成功ハ微候ありと結言するに憚らざる可し、此尙なる位置に即くの人、其業や如何、吾人ハ敢て之を語らざるも、其事業は同情の熱き然も溢る、涙の手に由て成るもの、眼底一點の涙痕を止めざるもの、果して期業を成功したりと云者あるの、忠といひ、孝と云ひ、弟に仁に愛國に友情ハ、之皆情熱淚の此處に凝結したるものに非るはなし、佛者曰人生終局尤大の安心は怯懼の全く盡きたる處ありと、阡桃源の泉甘いと雖も豈ハ自由盡無光明眞如の聖泉に如らんやと、此に君はコップの水を傾け又子一輯、諸君の希望に從て去らぬよとて更ハ又、今日ハ社會は皮相的に進行す、吾人は果して所謂以心傳心風ハ直覺的分子の、欠くるを嘆ずるものならんか、更に今日の社會をしてカライルの所謂沈鬱にして愁嘆的かざる、然も風韻の掬す可きある文明たらしめよ、法律と何ぞ又信仰の下に立たしめよ、信仰ある文明は高雅にして更に無邪氣あり、

斯の如くんば四海波平のに、吾人は誠に天國の近きよあらんと絶叫せんと、論お去て揚々拍子に送られぬ、君が輕快に辯其態度に添ふて明瞭なるの、夙見聞子の欽慕する所、憾むらくは時遅くして猶後に辯士の扣ゆるあり、爲お語調動もすば急お過ぎ、聽衆をして又首肯するお餘地あからまぬしをといふもの、見聞子ハ又渴して井を堀るの類。

小野ハ小町の後に板額見はれと叫で、寧ろ冷嘲交りの拍手喝采に迎へられし、風眸瀟洒る白面乃紅顔子大道良太君と起てり、吼ゆるが如く訴ふるが如く、家棟も破る、許りに、演壇も碎くる許りに、我鳴り立て空拳を揮ひ立て曰く、凡人類の生を此世に稟けしより、爾來奢侈廢立は論は吾人は明解を求むべき種の一として、史家は筆ハ忙ハまく政治家の口は渴せんとす、玉樓一世の春を擅おきて、百年悠優華を夢み蝶を夢みるの佛王政の末路の如何、位人臣を極光綺羅錦繡を揚くに飽死し、夫ベリクルスモ何事を以て終ら臨みしかと、絶對的ならざるも奢侈に个人的國家的の二極と説き、更に轉つてポルテール、マンデビルの徒の、人に奢侈乃要ありと論せしとて引説を、縷々難ずるか賛するか遂は君

は誰れり、美服珍味を欲せざるもれあふん、而り之を好むお財あくんバ爲す能はず、財を求むるに道あるう他なし、唯勤と儉とのみと論結せられしが如く、君畢竟云ふ如く板額ありと、要するに君が其態度は、似合らぬ宣教師的否寧ろ脅喝的過大辯と、問々冷語に挟まれて論旨模糊たるを惜しむと雖も、亦以て見聞子の聾ある之を判ずる器なき責の致す所、今更に沈み切たる聽衆を怨むも詮なし。

最後は辯士を教授宮本平九郎君とす、君ハ諸健兒が熱心の餘りに、聊か義務として述ぶるあらんも、日本の外交術とし史上唯に注意を促がるとに過ぎずとて、レクチュアア的辯口に説出し、明治二年條約改正の爲、歐洲に至りし我邦人の失策話より、推古天皇の昔の措置死、そも多少外交の消息を傳へしものハ、十三世紀の頃、織田信長の時一種のバラレンを奉ずる者、佛教者を忌み爲に耶蘇教をして入來せしめ、次で秀吉の時南蕃寺起りて特に宗教者は一注意を促せまも、徳川時代に至て此寺遂は倒れ、后漸く攘夷の端を開きて夫の島原の亂より、カソリックは一步だも我地を踏むを許さず、獨り和蘭のみに通商を許し、彼等をして那翁に本國を蹂躪されし時よ

す、和蘭乃地猶東方長崎にありと誇らしむるに至る、要する外交と云には足らで寧ろ交際とて單は消息を通ずるに止まりしのみ、次で和蘭は遂に夫のペルリを導致致し、連日お米魯に通商を求むるお至れと、而彼等ハ當時日本ハンペレンを如何に考へしやと云に、將軍亦一天子にして、京都ハ單に宗教權を有はに過ぎずとて、又一拙者はれ大名で御座るの辭は諸君の彼等も對する逃辭として一話柄ありし事、當代外交として更に見る可き者なく、世ハ舉てポリシイ、ヲフ、テンポラリゼーションなりと云のみと、循々説に來り問々我の失策話と逸事を擧ぐ、時ハ殘る者僅かに二十有餘名、お話風乃君が低聲も爲に朗として話柄は一段の興味を添へ、和氣霽々の裡、爐邊は火なりりしを吐くも今更に可笑しく、茲に日出度千秋樂之謠はれぬ、

稿し去て洒然、紙窓を排せば、窓外風蕭颯として孤燈更に淡く、東嶺一團の月を吐く矣、燈下忽々語倫眷なし、詩に曰非女之美々人之胎と、諸士若し其意を取て其物と略せば、必らずや盡言に怒らざらん、以て冒昧此お至る、聾評死罪(露子)

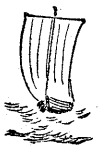
先生の在職日甚だ淺し、未だ其の思ふ所を尽されずして此れ去られしを惜み、併せて在職中の懇篤切實を謝す。

送川上校長

向講師を送りて其席未だ冷えざるに川上校長非職今井教授校長心得の命に接せ、嗚呼昆山に火墮ちて玉石共に焚え、職員交代の類々なる實は予輩をして曳搖の念に堪へざらしむ、閣下の我校改新の期に際し赴任せられたるより日猶淺く、未だ其の思割せらるる所を尽く施行し、施行する所を尽く收果するに及ばず、閣下の遺憾生等切に惜む所、然りと雖天下の事思ふて成らざる者十二七八、士亦遇合あり、良策必しも行はれず、深謀必しも遂げず、閣下たる者亦聊慰めたるべし、況んや今や天下多事の秋、能ある者の一日も坐臥するを許さざるをや、神洲の西北雲氣惡し、希くは閣下幸よ自重自愛して邦家の爲めに盡す所あふんとを、

送向講師

向講師故ありて職を辭して京に上る、予輩の



# 投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ
- 一 雜誌上より雅號のみを記載することを許せども姓名を必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありしを勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十一年二月六日印刷  
全 年二月十日發行

編輯兼發行者

内 藤 昌 太 郎

印刷者

月 岡 眞 備

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

金澤市上松原町紙屋小路一番地源園方

金澤市野田寺町五丁目卅二番地今川昌治方

(明治二十八年二月二十七日内務省許可)